

---

# Epos Etoruria ～エトルリア叙事詩～

Andrea Giuliotti

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

E p o s   E t o r u r i a    〈エトルリア叙事詩〉

### 【Nコード】

N 2 3 5 7 V

### 【作者名】

A n d r e a   G i u l i o t t i

### 【あらすじ】

ある歴史家志望の日本人男性が、交通事故により架空世界に転生する。

彼の目線から見た、世界は、歴史は、文化はどう感じるのか？

ノリと勢いで書いているので矛盾点が結構出てますが、そのうち修正します。

……楽天が優勝した頃に。

20話まで書き貯めてあります。折を見て適時投降します。

※注意 主人公はかなりハイスペックになる予定です。

ついでに言う主人公の性格は、かなり悪いです。

どの位かと言うと、名前イタ公なのに中身が英国紳士位だと思います。

## 登場国家紹介

### 登場国家紹介

ケルティック王国（モデルはイギリス王国）

元々の由来は、十字教に反対するケルト人達がエトルリア帝国より亡命して発足した。異教徒には比較的寛容的で、領内には妖精やエルフや亜人達が居住する。まさにファンタジーな国家。

議会政治はまだ発足していない。女性の地位は周辺諸国に比べて高く、男性も女性も爵位の継承権を持つ。

現在の国家指導者はアデレード女王

伝統と言うべきか、ガウルとはやっぱり仲が悪い。どれだけ仲が悪いかと言うと、ガウルが提案してきた停戦協定文に、大陸軍司令官ガーフィールド公爵は、

「カエル共は×××喰って死ね！」

と紳士的な返礼状を送りつけた程である。

そして、この国の料理は、「生ゴミに火を掛けて適当に塩を振った」と言って良いほどで、この国の名物ウナギゼリーを見た、ウナギ愛好家団体はブチ切れて「ウナギに対する冒涇」とまで言ったという。ちなみにフィッシュアンドチップスはまだ無い。理由はジャガイモ

が新大陸産だから。

ハイランド地方 （モデルはスコットランド）

ケルティック王国北部に相当する、不毛なこの地はエルフ達の樂園となっている。

形式上は王国の一領地だが、事実上は合議制の部族社会だ。

エルフ達は各氏族に分かれていて、族長の指示に従う。そして、族長は会議を開き、政治方針を決定する。

森林や山岳地での静かな生活を好むが、外貨を獲得する為に傭兵として戦場に出る事もある。

特に有名なのは「ブラックウォッチ連隊」や「ハイランダーズ連隊」「ロイヤルスコッツ連隊」だ。

ブラックウォッチは黒い監視者という意味で、ロングボウを用いた長距離からの一斉射撃が得意。

ロイヤルスコッツはケルティック王国の魔導近衛兵として活躍している。

ハイランダーズは盾とブロードソード一本で敵陣に切り込む特攻野郎。

彼等エルフ傭兵の特徴はキルト地のスカートを穿き、軍楽隊がやかましくバグパイプを鳴らしている事だ。

彼等はケルティック軍でも精鋭部隊だ。ガウル軍は「スカート野郎の変態」と忌み嫌っている。

ベルガ王国 （モデルはベルギー）

「ベルガ王国は道路じゃない。国だ！」

ガウル王国 （モデルはフランス王国）

ケルティックの因縁の相手、彼等が毎年のように繰り広げるデスマッチは欧州中（の軍需物資を取り扱う商人）を笑いの渦に巻き込んでくれる。

肥沃な大地と人口の多い都市が多く、中央集権化も進みつつ有り、何処かの帝国よりも遥かに実力的には優れている。

兵力的にもケルティックより多い筈なのだが、どうも肝心な戦いで負け癖が付いている。

現在の国王はフィリップ2世、愛妾にどっぷり嵌り込んでいる所は流石ラテン人である。

マッシリア教皇領 （モデルはローマ教皇領、及びアヴィニヨン教皇庁）

史実のマルセイユ付近に存在する十字教の本拠地。

存在する全ての国家で、最も長い歴史と伝統を持つ宗教国家。

この世界の教会や、修道院、司教領等は全てこの国が管理している。巡礼に訪れる信徒も多く、降臨祭のミサを一目見る事はこの世界の十字教徒の憧れである。

領内の修道院には、恵まれない者達の救済の為に糧を無償奉仕している。

マッシリア宗教大学は、聖職者を目指す為や正しき教えを乞う為に様々な人間が入学している。

しかし、君主にとってはイラッ☆とすると異教徒相手に十字軍起こしたり、大聖堂の修繕費寄こせだの、恵まれない神の子供に寄付を、だの散々言ってくるはた迷惑な存在。ダビスタの税務署や桃鉄のキングボンビーみたいな感じ。

十分の一税で散々儲けているのに何言ってるの？と思えるが、その金は何処へ消えたのかは誰も知らない。

## タラゴナ王国 （モデルはイスパニア王国）

史実では大航海時代に新大陸でヒャッハー！してたり、無敵艦隊（笑）で活躍したが、この世界では起きていない。理由は、新大陸を発見したのはポルトガルに当たる国で、この国の船はガレー船主体で、外洋航海には適していないからだ。

ついでに言うトレ・コンキスタも起きていない。そもそも、この世界にイスラム教やユダヤ教は無い。まあ、史実のスペイン考えるとその方が平和でいいかもね。

現在の国王はガルシア4世

ルシタニア王国 （モデルはポルトガル）

新大陸を発見した西の海洋国家で、イベリア半島の西の端に存在する。

昔から海に出たい病を患っており、王子様が帆船一つで航海に出る暴挙を成し遂げているから、史実のポルトガルより重症である。地球は丸かったんだよ！と言う学説を聞くや否や、キャラベル船で西に出し、新大陸を発見してしまう。（当人等は東の扶桑や大漢を発見したと思っている）長距離航海に耐えうる積載量持つ帆船の開発が命じられ、完成したのがキャラック船らしい。

現在の国王はエンリケ一世 本人曰く「若い頃は無茶しまくったもんさ！」

ラグーナ共和国 （モデルというか、まんまヴェネツィア共和国）

地中海の交易を担う海洋国家。貴族制＋寡頭制＋共和制と言うこの文面だけ見れば意味不明な政体だが、事実そのような政治形態にあ



る。

詳しい事はウィキでも見て下さい。

ヴァレリア侯国（モデルはマントヴァ侯国）

ラグリーナの手下。それ以上の説明は必要ない。

ブレンダーノ公国（モデルはミラノ公国）

史実のロンバルディア平原やポー川、アッダ川、オーリオ川と水にも恵まれて小麦や米等の農作物の生産が盛ん。ナポレオンがイタリア戦役で暴れ回った土地がこの辺りになる。

近年領土を拡大しつつ有り、半島内の実力はナンバーワン。

タウリニア地方（位置はトリノ付近）

チエルヴィーノ地方（位置はヴァッレ・ダオスタ州）

史実のマッターホルンの麓付近に存在する。陸路交易の重要な拠点であると同時に、高い冶金技術を持ち、この地で生産される武器や鉄材は高い品質で知られている。ただし平均気温が低い為、食糧の生産率は極めて低い。

ギアーノ共和国 （モデルはジェノヴァ共和国）

その昔はラグーナ共和国以上の海洋都市国家だったが、経済戦争に負けて落ちぶれた。今ではブレンダーノ公国の支配下にあると言っても過言ではない。何と言うか、今のアメリカと日本と同じような関係である。

ここからは、作者の愚痴なので飛ばしても結構です。

史実のジェノヴァ共和国は人材レベルではかなりの逸材を出している。コロンブス先生もアンドレア・ドーリアもスピノラ將軍もイノケンさんもこの地の出身だった。それなのに、ジェノヴァ共和国は浮き沈みが激し過ぎて面白過ぎる。

16〜7世紀だけでも1528年までフランスに占領されていたと思えば、スペインに与して国土を回復して大商人が黄金期を発動して絶頂期を迎えるが、50年代後半に地中海交易の拠点をオスマンに奪われる。そこで落ち目になるかと思えば、翌年にスペインが財政破綻を起こして、ライバルのドイツ人銀行家が乙った為、ジェノヴァの銀行家や商人が活躍するようになる。そんな黄金の世紀も、スペイン帝国が崖の下へ“更なる前進”をしてしまい終了を迎える。

水晶同盟都市国家群 （位置はエミリア・ロマーニャ州付近）

今から約40年前に、近隣諸国からの侵略に対抗する為に結成された同盟と、その同盟に所属する国家群の総称。9つの都市国家が、強固な経済同盟と防衛協定を結んでいる。北部の争いには積極的な介入をしていない。

エトルリア連合国（モデルは古代ローマ、位置はトスカーナ・ウンブリア州）

史実のローマは帝国崩壊後、教皇が支配する土地となったが、この世界では教皇領がマルセイユに存在するので、別の運命を辿るようになる。

古代エトルリア帝国が崩壊した後、数百年の戦乱の時代を迎えた末にエトルリア王国が誕生して、アルノ川以南の地をその領土として治めるようになる。しかしその王国も40年ほど前に当時の国王が戦死して直系の男子が途絶えた為、後継者争いが勃発する。その波乱の中で王国は、瓦解して各地の独立が相次ぎ、荒廃してしまう。当時の王国元老院は、王制の廃止と共和制の移行を決定。生き残った王族を国外追放して、太古のように12の都市連盟からの共和国となる。

首都はウルブス・ウェトウス・ウォルシニ（位置はオルヴィエート）に存在し、意味は「古都ウォルシニ」

カンパニア公国 （モデルはナポリ王国）

エトルリア王国時代の名門貴族カンパニア公爵家が治める国。風光明媚な都市ナプリアが首都。街の周辺には古代の遺跡が点在して研究家や芸術家、観光目的の富裕層が多くこの地を訪れる。そのような背景からこの地は商品の一大消費地であり、トリナクリアの食糧、ワイン、ギアーノのワイン、絹織物、ラグーナの香辛料、レース等を作り付けに各国の商人が多くやってくる。トリナクリア小麦で作るパスタやピッツァはこの国に来る人間の感嘆を誘う。

この地の有名な生産品は「カンパニアガラス」という黄色の美しいガラスであり、この製法は極秘とされており珍重されている。他には陶磁器や宝石細工がある。

トリナクリア王国 （モデルはシチリア王国）

民族的には先住民のシシリー人、東方からの移民のグラエキア人、エトルリア人、北方のヴァイキングなどの多民族国家。首都カターニア近くにはエンケラドス山と言う活火山が有り温泉や良質な硫黄が有名。またこの島は穀物やオリーブ、ワイン等、農産物の生産地である。塩の専売制で莫大な利益を上げ、領内では塩が貨幣として通用する。薬草のマンドレイクも有名。

フランク帝国（モデルは神聖ローマ帝国）

／（＾Ｏ＾）／

……まあ、上の一言で説明が付くが、一応細かい概要を載せる。

エトルリア帝国崩壊後、ちょっとした世紀末になった当時の欧州だが、そんな中で頭角を現していた国がフランク帝国だ。

元々はゲルマン系部族フランク族が打ち立てた王国だったが、周辺部族を併合しライン川やイタリア半島付近まで進出した。巨大な勢力に危ぶんだ教皇庁と当時成立したばかりのガウルが画策し帝位戴冠を認める代わり、十字教の布教と、領内に司教領の設立を引き換えに「フランク帝国」が誕生した。

：そんな栄華も今は昔。自分が思い通りなる直轄領と言えば、史実のオーストリアとチェコやスロバキア辺り。残るは言う事聞かない大貴族や司教領に囲まれて、戦争してないのに死亡宣告書が出されてます的な有様。

領内の貴族は下らん理由で争い合い、こっちの勅令を平然と無視し、終いには北部が独立まで起こしやがった。

現在の皇帝はアルブレヒト一世

アラマンネン王国 （モデルはロレーヌ公国及びアラマンニ族）

帝国の属国でロレーヌやライン川周辺を納める王国。主人公の義姉の出身地。

「帝国の支配下あ？ ばくばくつかじゃねえの！？」

レックランド王国 （モデルはポーランド王国）

この地に住んでいる先住民族レック族に由来する。一応帝国の属国レック族は背中に翼を持つ所謂亜人に属する。彼等は派手な服装が好まれており重厚な鎧の上に更に衣装を纏って長槍一つで敵陣に突入していく。

もちろん鎧を着ている間は飛行できない。意味あるのか？ その翼。

マジヤールランド王国 （モデルはハンガリー）

帝国の属国だが、帝国とはかなり密接な関係を維持している。具体的な例を上げれば60〜70年代の中国とソ連位の仲良しさんだ。マジヤールランドの議会では、前皇帝が崩御した時は、帝国の国旗を燃やして哀悼の意を示し、普通郵便で弔電を送るという多忙を極める新皇帝に配慮した心遣いを見せた。返礼の代わりに今度、帝国軍三万がマジヤールランドを表敬訪問するらしい。実に素晴らしい国だ。

ヘルヴェティア連邦（モデルはスイス連邦）

帝国の属州の一つだったが、重税に耐えかねて自治権を求めて独立戦争を起こしたのが始まり。コレと言った資源は無く、山岳地故に農業も絶望的な為に、傭兵や銀行業、手工業に特化した国と成る。特にこの国の傭兵団は武勇と忠誠心が高く、パイク兵と斧槍兵から構成された部隊は各国の精鋭部隊として愛用されている。

ダンヴィルク共和国（モデルはデンマーク）

バルト海と北海の海峡を押さえる国家。海上交易の重要拠点でもある。

ノルマン王国（モデルはスウェーデン王国）

ドワーフとかが住んでいる、北欧神話の世界。  
バルト海の覇者で、海洋交易で巨万の富を得ている。  
ロングシップと斧が好きな国。北ドイツ一帯を領有すべく目下策謀中。

かつては領内に数多くの鉱山が存在したが、多くはドワーフに掘りつくされてしまっている。その廃鉱山がドワーフの鍛冶場となる。彼等が鉱山を掘るのは、鉱石を確保する為と居住空間を作り、肉体を鍛えて格闘家として練達する為なのだ。（民明書房 西欧文明―その爛熟と退廃―より引用）

クルラント騎士団 （モデルはチュートン騎士団）

「暴力を振るっていいのは、化け物共と異教徒だけです」をモットーに設立された開拓騎士団だ。

その根拠地は史実のバルト三国の位置にある。

騎士団と言っても独立国家であり、ちゃんとした経済基盤を持っている。琥珀や小麦、毛皮や異教徒の奴隷を商品に利益を上げている。

要望に応じて登場国家の一覧表を作りました。

尚、まだ登場していない国家（小国家や貴族領、司教領、自由都市）や地方（ギリシャ、アジア、アフリカ）は省かせて頂きました。

登場人物一覧はもう少し待って下さい。

（参考資料 原書房 ヨーロッパ歴史地図）





## 登場国家紹介（後書き）

### 解説

肝心な戦いで負け癖

偉大なるフランスの華麗なる戦歴

ガリア戦争 敗北

百年戦争 痛み分け

イタリア戦争 敗北

ユグノー戦争 ヴァロワ朝断絶の上、アンリ4世の改宗

三十年戦争 辛勝

ネーデルラント継承戦争 戦略的敗北

オランダ戦争 失敗

大同盟戦争 敗北

スペイン継承戦争 戦術的敗北（戦略的勝利）

オーストリア継承戦争 敗北（プロイセンは勝っている）

七年戦争 敗北

フランス革命 勝利（但し内戦である）

ナポレオン戦争 敗北

普仏戦争 敗北 e t c.

### 訂正

マゼールランドをマジャールランド訂正

ガウルの首都をルルティアからルテティアに訂正

## プロローグ

——私は歴史家になりたかった。

私は、小さい頃から歴史の授業だけは好きだった。衰退する王朝、勃興する国家、苛烈な戦争、血生臭い陰謀、英雄たちが紡ぎ繰り広げる叙事詩。その話を聞くと私の中の血が熱く駆け巡った。図書館へ行っては専門図書を読み漁り、大学も史学科を専攻した。

しかし、両親の事故死から博士課程までは進めず、一般企業へ就職した。

いつものように仕事を終え、家に帰り、インスタント麺を食べて寝るだけの生活。

……社会人も4年を過ぎると季節が過ぎるのを速く感じる。

休日だってせいぜい図書館に行つて史学書等を読みふける日々だ。

ふと、稀に考察する。

——私は、何のために生きているのか、と

歴史家になると言う夢も潰え、家族も無く、老後のために貯蓄するだけの日々。

しかし、仕事を捨てて歴史家になる程の情熱は無く、今日も仕事を終えるといつもの帰宅路に着いていた。そして、スーパーで半額の弁当を購入するために、交差点を渡るのであった。

突如、横からスキール音と強い衝撃を感じ——私の身体が宙を舞い、地面に叩きつけられた。熱い液体が体から噴き出るのを感じる、驚きと、衝撃と激痛で思考が止まる。呼吸が出来ない。

……視界が徐々に暗くなっていく。

——ああ、あっけない人生だったな

薄れ行く意識の中、私のこれまでの人生を振り返り思った。

——私が居なくなっても、別に歴史には何の影響も無いな。せいぜい警察署の交通事故死者数が1つ増えるだけだ。私の人生って何の意味があったのだろうか。

……暗い闇の中で私は思考した。私の人生は如何なる意義があったのかと。

しかし、答えを出してくれる者は無く、私もその考えを声に出す事は出来なかった。

そして私の意識は停止した。

光を……感じる……助かったのか。

周りで何か話している……自分の知らない言葉だ。語感的にイタリア語かフランス語か？ドイツ語っぽい語彙も聞こえる。海外の病院でも運ばれたか、どれだけ重傷だったのだ？

麻酔が効いているのか体が全く動かせない。眼も空けられない……第一視力あるのか？失明していると生活に支障をきたすので困るな。仕事もできなくなる。

でも、光は感じるな。明るい所で眼を閉じているって感覚だ、失明は無いだろう、本を読めなくなるのは困る、点字を習うのもめんどくさいし、私が好んで読む海外の専門書物とか点字版なんて無いだろう。

眼を開いて見る……うわ、相当視力が落ちてる。でも、見えないわけではないが……色だけ感じる。動いているのが人か？しかし、看護服にははおかしいな？

昔のコメディ映画で見たゴスペル修道女みたいな服装だ。でも、手足を動かす事は出来ない。

もしかして、四肢切断か？仕事は首だな……いや、悪くないな、賠償金とか取れるし、障害者年金とか出るだろう、趣味に没頭できるなら腕や足なんてくれてやる、義手もあるだろう……本が読めればいいのだ、私は。

不埒な夢だが、この先の事を考えると喜悅していた。

……まあ、短い間だったけどね。

翌朝、眼が覚めると、視力が少し戻っていた事が嬉しかったが、それ以上に部屋の状況が可笑しかった。調度品とかがローマの聖堂とか、フィレンツェの市庁舎みたいな感じだった……

そして、自分の周りを取り囲む人たちの服装が、舞台演劇の役者みたいな恰好してた。

………どうということなの？

## 第1話 転生した先は

帝国歴1326年9月 チェルヴィーノ侯国 侯爵邸

「奥様お喜びください！御生れになりました。男の子です」

産婆さんばが取り上げた男の子を私の横に寝かせる。大丈夫だろうか、産声うぶこえを上げていないが。

「私奴わたくしめも驚きましたが、呼吸はしているので大丈夫ですよ、奥様」  
「産まれたか！」

扉を開けて家族と、グリエルモ司教が入ってくる。

「頑張ったな。マリア・テレーザ」  
夫アルベルトが私の手をつかむ。子供のフェルディナン  
ドと

娘マリア・クリステイナが心配そうに見つめていた。

「名前はな、決めてある。男だったらヴィットーリオ、娘ならマル  
ゲリータだ」

「元気な男の子でございますよ。侯爵様」

「そうか！なら、お前の名はヴィットーリオだ。ヴィットーリオ・  
ディ・チェルヴィーノ！」

その声に釣られたのか赤ん坊が笑い声を上げる。

「おお、これは！」

「どうしたか、グリエルモ司教」

「私は叙階じょかいを受けて以来数十年、主のために奉仕ほうししつづけました。多くの神の

僕を洗礼せんれい致いたししました。ですが私は今だかつて産まれて間もなく笑う、神の僕と産ま

れた事感謝する幼子おさなごなど見た事はありません。主よ、私はこの幼子の洗礼せんれいを

させていただく事を感謝いたします。……Amen！」

「そうか、それは誠にめでたい。侯爵家の次男にこれほどの子に恵まれるとは！

これが将来あんたいフェルディナンドとともに侯爵家を支えてくれれば、我が国は安泰であるな」

「恐れながら、侯爵閣下。新たな神の僕を、このグリエルモにお預けください。

この幼子は将来、枢機卿すうききやう……いや歴史に名を残す教皇きやうわうにまで成りえます！」

「駄目だ、グリエルモ！確かに、わが家系から教皇が出れば名誉な事であろう。だが、

わしもこの子を手放す気は無い。これが貴族になるか、聖職者となるかは成人せいじん洗礼せんれいの時に決定する」



「だがグリエルモ、卿<sup>けい</sup>のいう通り、聖職者となる器とあれば卿が教育せよ。卿程の者なれば、間違った方向に行かぬように出来るな」

「感謝いたしますぞ！侯爵閣下、このグリエルモ身命を賭してこの幼子を導きますぞ！」

「うむ、ヴィットーリオを頼むぞ」

「もちろんですとも。ささつ、この幼子の洗礼を致しましょうぞ」

私は悪い夢でも見ているのだろうか？いや、違うな。風景、音、匂い。五感の全てが

「これは現実だ」と伝えている。女の人が乳を飲ませる。母親？違うな乳母<sup>うば</sup>だな。

部屋の調度品や内装から、この家は貴族階級だと思う、時代背景は15、6世紀か？

まあ、イタリア辺りなら昔の家がそのまま残ってるからな、案外近世かもしれない。

中世なら困るな。子供をミイラのようにぐるぐる巻きにして壁に吊るして放置とか  
育て方だったと資料には載ってた気がする……何の資料だっけ？

頭は大人でも、体は子供だな。少し物事を考えるとすぐに眠くなる……

私が産まれてから6年が経過した。

幸いにも怪我とか疫病で死ぬ事も無く、生き残った。

え、大げさだって？この時代の幼児は簡単に死ぬ。現在みたいな小児医療なんてないし、予防注射も無い。疫病が発生したり、飢饉きがが起きたりちよっと熱出したりするだけでアウトだ。貴族だったから栄養状態は良好だけど……

娯楽も対して無いから、勉強はかなりやった。まあ歴史関係の話なんて半分趣味だし、

元々無趣味だったから楽しめたと思う。7自由学芸リベラルアーツは修得したし、俗語（イタリア語）以外にもガウル語（フランス語）、タラゴーナ語（スペイン語）、教会語（ラテン語）は母国語のように扱える。帝国公用語（ドイツ語）は今勉強している所。日常会話ぐらいなら多分出来るけど……うん、やり過ぎだと思うけど後悔して無い。

グリエルモ司教からは、教会関連の説法せっぽうを聞いたり、教育係としてマナーを教えて貰っている。魔法も教えて貰った。ちよっと気真面目だがいい人だ、心配性な所も多いけど。

この前は、風邪を引いただけなのに、最上級の治癒魔法を発動させようとしていた。

風邪どころか、大抵の疫病なら直せる。ただし、高価な聖水ましようと魔昌石せきを湯水のように使うが。「風邪は免疫を鍛えるために体が発熱し

てるんだ。放つとけ」と突っ込んだら、

「素晴らしい！公子のお考えの壮大にして華麗なること、このグリエルモ、感嘆のキワミ」

とか絶叫してた。大丈夫か？アイツ。

「公子殿、お出かけで御座いますかな？」

「はい、グリエルモ司教。市井しせいの様子を見て参りたいと思います」

「いけませんぞ、城下じょうかには危険が多いです。万一にも拐かどされでもすれば如何なさいますか」

「ジョルジョを連れていきます。服装も民衆の物です、もしそのような輩やからが現れたら“説教”します」

ジョルジョは幼いころからの侍従てんじゆうだ。最近では私に剣術を教育してくれている。武術の腕は家の中でも随一ずいいちだ、そこらへんの山賊なんて相手にもならないだろう、とっ捕まえてちよいとばかり武力的な“お説教”の時間になるはずだ。

「おお、分かりましたぞ！……しかし、無茶はいけませんぞ」

「はい、遅くなりません、2時間程で戻ります。着いて参れ、ジョルジョ」

「御意」

まったく、公子殿にも困らせられる。このグリエルモ、胃薬の量がまた増えますぞ。

それにしても、なんと壮麗すうれいにして崇高すうかうな徳に満ちた御方であることか……

私奴も6年間驚きの連続でしたぞ。言葉を刹那の早さで修得した  
かと思えば、自由

学芸を修得し、同時進行で言語学者ブルドン殿から多数の言語を習  
い、自由学芸が

終われば、今度は魔法を教えて欲しいと乞うてくる。最近では武道  
や、兄弟より

統治法まで聞いているというのでないか……

しかし、才能に溺れず、本人も至って謙虚。それだけでない。老  
賢者ような達観や、聖人のような慈愛の心、聖堂騎士のような壮烈  
な心を持ち合わせている。この間も熱病で苦しんでいるのに「この  
熱は……天が与え給うた試練……試練を乗り切ってこそ……人間は  
強くなれるのです……お下がりください」等と宣う……

先程の発言も「悪党に出会ったら説教する」まさに、主の偉業そ  
のものぞ！……

語る者はよく居るが、本当に実行する者は少ない……マツシリア  
の枢機卿共に聞かせてやりたい位ですぞ。

まさしく、天に愛された聖なる童だ、かの御方の御側に仕える奇  
跡を主に感謝します……Amen.

「坊っちゃん、あの宗教家を上手く煙に巻きましたね」

「そんな言い方止めろよな。ジョルジョ」

ジョルジョ・ニコシア もうじき還暦を迎えるこのジーさんは、

チエルヴィーノ侯爵家の元執事だ。別に年齢的な理由で執事を辞めたわけではない。家で一番信頼のおける人間だから私の護衛につけられた。

私の産まれる前年に亡くなった祖父カルロ侯爵の子供時代からの悪友で、若い頃は祖父と放蕩ほうとうしていたらしい。父も実の息子のように可愛がられた。

外見は、仕立ての良いスーツが御似合いそうなダンディなお爺様……ただし、後ろ手にシカゴタイプライターとか隠し持っていてそうだが。

「いつも勉強ばかりだと疲れるでしょうね。偶たまには街で息抜きしましょう」

「うん、行こうか」

チエルヴィーノ侯国はエトルリア半島（イタリア半島）の北西に位置する国だ。史実のヴァッレ・ダオスタ州の位置だと覚えてくればいいだろう。山と自然豊かなド田舎国家。

隣国はガウル王国（フランス）とタウリニア共和国（トリノ）とブレンダーノ公国（ミラノ）。チエルヴィーノ山脈（アルプス山脈）を隔てた向こう側にヘルヴェティア連邦（スイス）が在る。

うん、そうなんだ、すまない。別世界なんだ。魔法とかモンスターとか実在しちゃってるしね。歴史の趣味に没頭できると思ったけど資料が無くてはね……この世界の歴史を学びなおしてもいい思っただけだね…

————— どうせ歴史を観るであれば、己の眼で観たい。

まあ侯爵家の次男だし、後継は無理でも外交官として各地を訪問するつもりで語学とかリベラルアーツとか修得したつもりだったのに、神童扱いだよ。どうしてこなた。

「坊っちゃん、干しブドウ買ってきました」

「うんありがとジョルジョ」

ジョルジョはこの世界で唯一演技なしで碎けて話せる人物だ。相手も分かっている。実の孫のように可愛がってくれる。独身だしね、感覚としては実の孫だろう。

「ジョルジョ、あれって何？」

「あれは、木工もっこうです。木を削ったり加工して椅子とか、家の柱とか作ってますね。

変わった処だと置物とか、細工物とか作ってますね」

「あの人達は何やってるの？」

「あの者達は隊商たいしょうですね。この国で造った武具ぶぐや鉄材とかを他の国へ売りに行くんです。多分、ガウルに向かうんでしょうな。あっち方面は関税安いし、戦が多いから鉄とか武器とかが高く売れるんですよ。あっちで採れる鉄鉱石とか石炭とかが、うちの国に来て鎧てっかいとか鉄塊てっかいに変わっていくんです。うちの国は腕のいい鍛冶屋が多いですからね」

知識で見ると、街で実際に観るのは違うな。ふと視界に、革製の鎧や、布製のアーマー、鉄の胴当て等を付けた人たちが酒場に入っていく。街の警備隊とは風体ふうていが違うな。

「さっきの人達は傭兵？」

「彼等は冒険者ですね。ギルドとか国から依頼を受けたりして街の外の魔物を追い払ったり、役に立つ薬草とかを集めたりして生活しています」

「傭兵とは違うの？」

「はい、冒険者は人間相手の戦闘はしません。山賊に襲われた場合や国から要請された

場合は違いますが。傭兵は商人を守ったり、山賊を倒したり、雇われて戦争で戦ったりしますね」

そんな連中まで居るのか、ますますファンタジーだな。

「さあ、そろそろ帰りましょうか。また今度来ればいいですしね」

山間のこの町は人口一万人程度だ。少ない？こんな辺境にしては充分の多い。というかなんでこんなに住んでるんだ？って位だ。ま  
あ理由は想像つく、隣国ガウルがケルティック（イングラント）と  
絶賛戦争中だからだ。この世界でも奴等は仲が悪いのか。実に度し  
難いメシマズとカエル共である。

その関係でこちらに人が流れるのだろう。

もう一つは、教皇領の存在だ。この世界では、マッシリア（マル

セイユ）に教皇庁が

在り、その周辺が教皇領となっている。別にフィリップ4世がカ  
ブナリーニ事件  
チコミ駆けた訳では

なく、この世界のキリストにあたる聖者がその地に“降臨した”か  
ららしい。

つまり聖母マリアはこの世界に存在せず、筆頭弟子のマリア（マ  
グダラにあたる）が

筆頭聖人となっている。どーいうことやら。

ちなみにこの世界のキリストは、別に罪を負って十字架に掛けら  
れてたのではなく、国家の命令で魔族と戦い、弟子たちに十字架と  
教えを託して、単身で本拠地に乗り込んで、魔族を巻き込んで“派  
手な殉教を遂げた”と云う武闘派だ。

ついでに言うとその決戦場は未だ“人の住めない地”になってい  
る事からも派手な殉教の度合いが分かる…

フェイ斯的にユダに近いのだろうな……もちろん世紀末の方の

話を戻すと南仏の重要地を抑えているために、関税が凄いらしく  
みなみフランス  
物によつては陸路で迂回させた方がマシって事で陸路の拠点になっ  
てるのだ。アルプス越え楽だよ、やったねナポちゃん。

ちなみにガウルは強固な友好国だ。関税関連で経済的な結び付き  
も強い、母マリア・テレーザ（ガウル語マリー・テレーズ）は隣接  
するガウル貴族メリヴェール侯爵家の娘だ。



今年の初めに兄フェルディナンドに嫁いできたのは、アラマンネン王国の王女エリザベッタ（帝国語エリザベート）さんだ。王女が嫁いできたのは多分ガウルに対する牽制<sup>けんせい</sup>だろ。こっちの言葉全然分かって無いし……

帝国と言うのは、フランク帝国の事だ。势力的には史実の神聖ローマ全盛期十二重帝国だ。面積的、軍事力的、経済的にもこの世界のトップだ……カタログスベックは。

弱点も史実の倍ドンで、実際には文化を除けば2流国だ。国内で乱立する大貴族、独立する北部。言う事聞かない属国（主にアラマンネンとか、アラマンネン辺り）を抱え、帝国公用語と聞こえはいいが、地方の方言も何もかも引っ包んでコネ合わせているので訳分からんカオス（習得に時間かかってるのはソレが原因）状態になっている。

そのような軍隊を編成しても幼稚園の遠足だ。  
（指導者が居る分、幼稚園の方がマシだ）

……某SF小説の貴族連合の方がまだ頼りがいがあるぞ。少なくとも彼等は、

「話せば分かる（言語的な意味で）」

皇帝陛下は音楽と美術品収集に精力的だとか……まあ、気持は非常に分かるがね。

“あの”帝国もここまで酷くは無いし。

将来、外交官として帝国に行くことがあればリュートで何か一曲  
慰めて差し上げようか。ギターに似ているから同じ感覚で使えるだ  
ろう……

## 第1話 転生した先は（後書き）

### 解説

シカゴタイプライター

トンブソンM1921短機関銃の愛称 第一次世界大戦の塹壕戦に  
対抗するために開発されたが、本銃が完成する前に戦争は終結した。  
その後「手軽にフルオート射撃が楽しめるスポーツ用の銃」として  
販売され、アル・カポネさん（自称 家具販売業者）の車を破壊す  
るエクストリームスポーツ等に使用された、いわゆる禁酒法時代の  
マフィアの象徴。

ヴァッレ・ダオスタ州

イタリアの北西部に存在する特別自治州。年間の平均気温10度以  
下 ハンニバル先生がアルプス越えした時に使った峠がこの辺りと  
言われている。

マグダラのマリア

聖母マリア（キリストの母親 マリア像と言えば殆どこの人）とは  
別人。カトリックでは罪の女や悔悛した女など娼婦扱いされている。  
福音書の中では、イエスによって悪霊から救われ、磔にされたイエ  
スを見守り、イエスの復活に立ち会ったとされる。

（言語的な意味で）

中世のドイツ語は方言が多くて訳ワカラン事になってます。それを  
無視したとしても、属国が多くてその言語の壁もあります。ドイツ  
語は低地ザクセン語、高地ドイツ語、バイエルン語に分かれ、それ  
以外にも、ポーランド語、オランダ語、アレマン語、バルト語派（  
リトアニア語、ラトビア語）スラヴ語派（チェコ語、ハンガリー語、

スロベニア語、クロアチア語、セルビア語、ロシア語系）等です。貴族たちがラテン語やフランス語を話すのは、おしゃれうんぬん以前に相互理解が出来ないから（フランス語は母語話者数が多い上、騎士物語、宮廷恋愛文学のメッカなので貴族たちがよく親しんでいた。ラテン語は公式文書に使用される上、カトリック教会の言葉だった）

## 第2話 侯国の日々

「Ich will euch tr?sten.」(我、汝らを慰めん)

「wie einen seine Mutter tr?stet.」(人をその母が慰めるがごとく)

「Ich hoffe auf Dich」(我は汝を待ち望む)

「Gott mit uns」(神は我等と共に)

「Meine Ehre heit?t Treue」(忠誠こそ我が名誉)

「Arbeit macht fr…」(働けば自ゆ……)

「おい、ちょっとカメラ止めろ」

なんかこの教科書にもものすごい悪意を感じるのだが…

「如何致しましたか?公子」

「いや、何でもない少し疲れたようだ……」

「市井に降りられたのでしたな。グリエルモ司教が皆に話をしておりました」

……あのキワミ何ペラペラ悪い噂流してくれるんだ?宗教家として

失格だぞ。

弁護士と政治家か異端審問官としてなら合格点くれてやるがな。

「お疲れのようですので本日の講義は終了にしましょう」

「そうですね、ありがとうございます」

「いえいえ、私もあなたのような物覚えの良くまじめな生徒を持つて正解です。」

帝国大学で教鞭きょうべんを振るうよりよほど楽しい日々です」

この人はクロード・ブルドン。言語学者だ。この世界の欧州の主だった言語の大半を修得したと言うソツチ方面の天才ヘンタイ。帝国語以上に、地域変化の激しいフェニキア諸語を、完璧に修得している、正直意味不明なお人だ。

帝国大学の言語学分野の教授職に内定したので故国ガウルから、帝国へ向かって

いたところ、運悪く父にとつ捕まって私なんかの教育係にされてしまった。

最初は渋々教えていたのだが、私が余りに早く言語修得していくのと、

「教会語ラテン語と俗語イタリア語とガウル語フランス語って似てますよね」の突っ込みに彼、大・興・奮。

教授の椅子を蹴っ飛ばしてこの地に逗留とつりゆうし、現在に至る。

（私の教育以外にも通訳とか書記とか兼任してるんだが、文官としても有能だと発覚する）実は大学教授より良い額貰みえってるらしい。

帝国って貧乏みえだもんね、屋敷とかは平気で増築するけど……

「あら、ヴィットーリオ。お勉強終わったの？」  
「うん、クリスティナ姉さま。今日はもう終わり」

マリア・クリスティナ・ディ・チェルヴィーノ、私の2歳上の姉だ。美しい金髪に、はにかんだ笑顔。家族<sup>かぞくびいき</sup>鼻<sup>はな</sup>肩<sup>かた</sup>じゃないが、将来美人になる事は間違いないだろう。

「お庭のお花がきれいな。観に行かない？」

キョトンとした顔で首を傾げないでくれ。その顔は殺傷力高すぎる。

チェルヴィーノの街は、いわゆる城砦都市とはかなり趣<sup>おもむき</sup>を異なっている。

まず防御施設としての城壁が存在しない。周りが峻険<sup>しゅんけん</sup>な山岳地帯だ、それ自体が防御施設になる、この国で過去に起き戦いの殆どは峠<sup>とうげ</sup>とか山道<sup>さんどう</sup>とかだ。まあ戦争自体ほとんど起きないが。

唯一起きるとすれば、他国に援軍として遠征とかする事だ。

簡単な柵とかはあるが、それはモンスターとかの侵入を防ぐための物。人間なら簡単

に突破できる。山賊？田舎でもそこは国の首都。それなりの数の警備隊とか騎士とか

駐留<sup>しゅうりゅう</sup>している。兵舎とかも街の外側に配置されていて、そんな所を襲撃<sup>しゅうげき</sup>したがる馬鹿はほとんどいない。

街の中心の広場には、侯爵邸兼市庁舎と教会が在る。この国には

城が存在しないのだ。

ガウル側と連邦側の国境に数百年前に建てられた城があるが、今ではただの関所になっているし、あの2国と戦争に発展する理由が無い。1つは永世中立をうたった帝国の自治州に、もう1つは婚姻関係と経済面の結びつきが強い準同盟国だ。現在の関係を破壊してまで争わないだろう。

他の2国は少し微妙である。タウリニア共和国とブレンダーノ公国だ。この2国は余り仲が良くない。

特にブレンダーノの方は、公爵様が有能な戦争好きで、近隣諸国の恨み骨髓らしい、人気も余りない。どっかの元大統領みたいだ、有能以外の点しか合っていないが……

という訳でこの国はタウリニアとの関係を強化し、ブレンダーノとは距離を取っている。ブレンダーノの東にあるラグーナ共和国（ヴェネツィア）も、あいつマジうぜーと思っていると聞く、人気って大事だよな。

「ヴィットーリオはお花摘まないの？」

「うん、僕はここで寝っ転がっているよ」

庭の草地に仰向けで寝ている私を姉がその淡褐色の瞳で見つめる、きれいな目だ。

この世界の私の容姿は、濃い栗色の髪に琥珀色の瞳「狼の目」という奴だ。



顔は……まあ普通だろう。不細工ではないと思う、あまりひどい顔だと他人と交渉する時に影響する……人は見た目で判断されるのだ。

顔が優すぎるのも問題である。相手が顔にコンプレックスを抱えていると忌避きひされかねない。

そして目立つのも困る、出る杭は打たれる。べつ、別に微妙な顔で悔しいわけじゃないんだからねッ。

「だめよ！ ヴィットーリオ。そんなお爺様みたいな事ばかり言って」「わっ、ちょっと姉さま。引っ張らないで」

「いやよ、今度はお池に行くの。付いて来る！」

子供パワーはすごいな、底なしの体力だ。私も子供なのだが……

「あ、シルク破れる！ 姉さまらめえ……」

ああ、ファンタジーなこの世界だが、髪がピンク色とかグリーンの色とか見た事はない。

青ならある。ただし、黒い髪が光の当たり方でそのように見えただけだが。

後この世界、灰色の髪と灰色の瞳の両方を持っていると魔女扱いされる。

と言っても別に火炙ひあぶりにされる、とかではなく、街から追放される位だ。後、年齢による変化とかは仕方ないらしい。実に下らん風習だ。

「おお、ヴィトよ、お前でもやんちゃをするのじゃな」

「申し訳ありません、お爺様」

高価なシルクのシャツを1枚駄目したために母に叱られた（と言っても普段が真面目だから少しだけだが）した後、広間に戻る。ちなみに、姉さまはもっと激しく叱られた。貴族の子女に有るまじき行いだ。容疑者は「だって、あの子が寝てばかりで動かないんだもん」と供述した。現在も拘留中である。

「少しやんちゃなぐらいが良い位だて」

アルセーヌ・ブノワ・テオドル・ド・メリヴェール侯爵 母方の祖父にあたる人で、隣接するガウルのメリヴェール侯領の領主だ。ワインとチーズが特産で、毎年送ってきてくれる。

このチーズが、前世のカマンベールのような白カビのチーズで美味しいのだ。ワインは知らないが、両親が美味しそうに飲んでいるので、多分旨いのだろう。

私は水とか果汁とかだ。この地方は美味しい水の産地なのだ。現実でもエビアンとかこの辺だし。

そんな大貴族のドンである筈だが、しばしばこの屋敷にpopする。大丈夫か？

まあ実務は息子がやっているようだからな、そのあたり問題はクリアしてるのだろう。

いわゆる大貴族にしては人の良い善人である。貴族悪玉論事体が

フランス革命の産物

だしな。実際の貴族とはこういうものだったのかな？

自由・平等・博愛抑庄 格差 なまり玉がフランス革命の産みだした産物だしな。思想的には素晴らしいと考えるが、恐怖政治やナポレオン戦争で欧州が被った被害を考えると諸手を上げて賛成は出来ない。

「ところでお爺様」

「ん、なんじゃ？わしのかわいいヴィトよ」

「今日はまた、何用で出沒したのですか？領地は大丈夫なのですか？」

「子供ならもう少し心配する事もあるまいて：ガウル語がほんに上手く

なったの。このまま連れて帰りたいぐらいじゃ」

「それは困りますな。お義父上」

「なんじゃ、居たのかアルベルト」

アルベルト・ラファエロ・デイ・チエルヴィーノ 我が父上だ。このチエルヴィーノ侯国の君主で、家族思いな男。城下を見に行った時の反応や、今までの政策などを考えると、君主としても親としても立派だと思う。尊敬に値する人だ。

「ここは我が屋敷です。居ない方がおかしいでしょう、それより困りますな。これを

連れていくと、貴国との関係が拗こじれるやもしれませんな」

父の発言にアルセーヌがチツと舌打ちする。性格悪いぞお爺様。

「ヴィットーリオ、私はお義父上と大切な話が在る。下がりなさい」

分かりましたと発言して、部屋を後にする。次は何処へ行こうか

……

「で、お義父上殿。今日の訪問はどのような御用件で？」

「うむ、今年の初めのアレじゃ。陛下も大変憂慮ゆうりょされておる」

メリヴェール侯爵の言うアレとは今年初めのフェルディナンドの結婚。

アラマンネン王女がこの国に嫁いできた事だ。

アラマンネン王国はヘルヴェティア連邦を挟んだ北側。ロレーヌのライン川一帯を

治める王国で帝国を支える3王家（他にマジャールランド王国Ⅱハンガリーやレックランド王国Ⅱポーランドが存在する）の1つだ。

国力、権威けんい共に高い王国だ。

普通、国家とは言え田舎の小国。帝国の3王家であるアラマンネンの王女が嫁いでくるなどあり得ない事だ。だが、先方は昨年こんに婚姻いんを打診だしんしてきた。

小国の立場としては断るわけにはいかない。それに悪い話ではな

い。そして隣国の連邦は事実上の独立国とは言え帝国領だ、関係を強化してしかるべきであろう。婚姻は成立した。

だが、この動きに驚愕きょうがくしたのは隣国ガウルだ。唯でさえ北のケルティックと戦線を構えているのだ。ここで帝国と侯国に側面を突かれれば亡国ぼうこくの危機である。

今回、メリヴェール侯爵の来訪は名目上、娘の訪問だが、実際はガウルの外交の使者だろう。帝国を刺激しない為の口実だ。

「確かにこの地が帝国の影響下に置かれれば問題だな。ガウル王の慌てふためく顔が想像できる」

「笑い事じゃないぞ、国内の貴族には併合論まで出ておる。元帥の戦争馬鹿共じゃ」

「このような山岳地に攻め込むと、ですと？大軍の展開すら困難と言うのに……」

「大陸の戦争と同じと思っておる連中は殊の外多いのだて。地図の通りに兵を動かせると思っておる」

「それは面白い連中ですな。恐らく騎士道とジヨストに凝り固まった子弟共だろう」

「まあ、そんなところじゃよ。陛下もあきれ果てておる、正気せいきの沙汰たではないと」

「愚痴ぐちはこの辺にして、本題に入りましょう。勿論、腹案ふくあんはあるのでしょう」

「さすが、義息よ。鋭いな」

「貴殿の息女マリア・クリスティナ・ディ・チェルヴィーノと我が孫、クレマン・ユーク・ジャック・ド・メリヴェールの婚約じやよ」

メリヴェール侯爵は、歴戦の政治家の顔で言った。

「まあ、本当はヴィットーリオを婿として連れていきたかったがの。それは認めんじやろ」

「人質……まあ義父上の場合には本当に可愛がるつもりでしょうが、無理ですな」

「しかし、これ以上貴家と血縁を結びつけるのも……」

アルベルトは口到手を当てて考える、貴族の娘は貴重な外交カードだ。

「今度は皇帝の息子とでも婚姻を押しつけられて見ろ。それこそガウルと

関係の破綻<sup>はたん</sup>じや、それに我が家なら貴殿の娘でも幸せに暮らせるじやろう。クレマンもクリスの事を気に入っておる様だで」

アルベルトは決断する。確かに、王女が嫁いできたことで、国の権威は高まった。皇族との婚姻は限りなく低い、在りえない話ではない。それに父親として娘の幸せを考えないでもない。

「お受けしましょう。最も、我が国も帝国と商業上の結びつきは強化したい、と考えますが、それが軍事的に結び付く事はあり得ません」

「うむ、それは陛下もお喜びになるじやろう。国内の貴族も治まり

が付くの」

「……ですが、婚約を大々的に発表するのは」

「わかっておる。帝国を刺激せぬようにはするつもりじゃ」

メリヴェール侯爵は話がまとまると嬉しそうにする。そして、少し考えて言った。

「して、義息よあの結婚は如何考える」

「……帝国の命令か、王国の独断か。ですか？」

「まあ、わしは想像つくがの」

「ええ、私もです」

二人は声を揃えて言った。

「[王国の独断]」 「ですな」 「じゃの」

帝国には、先の結婚には特にメリットは無い。それに降嫁こうかさせるという

事は、権威を自ら落とすと言う事だ、可能性は低い、このような回りくどいやり方

をせずとも、帝国内の適当な辺境伯の娘でも差し出せばよいのだ。

地理が離れている方が、家同士が結びつかないので好都合だ。

「現在の皇帝陛下は政治的な行動をする人では無いですし、国内の大貴族でもこのような小国を構う人間も居ないでしょうな……言う  
と悲しいですが」

「だの、わしも同意見じゃ」

「大方アラマンネン王が我が国に野心を向けてきた証拠だて。

貴国を利用して関係を引き裂き、折を見て軍事侵攻を目指す」

「最初の目論見は外れましたがな」

「隣国の君主が、お前で本当によかった。マリー・テレーズを嫁がせて正解じゃった」

「有難う御座います、お義父上、この事を陛下と宰相……いや、貴国の場合は侍従長殿しじゅうちやうどのですな。にお伝えすれば、アラマンネンに対して対抗出来る手筈をするでしょう」

アルベルトの発言にメリヴェール侯爵は目を押さえて悲嘆ひたんする。

「まったく、我が祖国ながら困ったものじゃ。国政を壟断ろうだんする愛妾あいしやうに侍従、戦争好きの王太子、言う事を聞かない貴族共！」

「その辺で……他国の首脳部で嘆く事ではありませんな」

「利用するお前ではあるまい。国では言えないのじゃ、今日はトントン付き合ってもらおうぞ！」

アルベルトは、今晚は長くなることを覚悟し、明日の政務に支障が出ない事を神に祈るのだった。

フェルディナンドの妻エリザベッタは嘆息していた。昨年、突如この国に嫁ぐ事を言われて、あれよあれよという間に嫁がされてしまった。雪ばかりの山岳地、故国に比べて小規模な街、何を話しているのか分からない城の人間。夫だって片言である。お付きの侍女以外に話せる人間はいない。なんで私がこんな田舎に嫁がねばならないのか！



「こんにちは、お義姉さま」

えっ、帝国語？懐かしき祖国の言葉に振り返る。すると、琥珀色の瞳の少年が立っていた。

「こんにちは、お義姉さま。お話したくて、言葉、練習した。分かる？」

この子、確か義弟のヴィットーリオだったわね……6歳にして数ヶ国語を話す天才児だって聞いたわ…

先程、グリエルモ司教も噂していた。

「主に愛されたッ、徳高き子供！感激！感激ッ！感激イイイイツ！  
！」

うん、この国の言葉苦手だからこんな感じの意味だと思う。  
ちよっと、目が血走っていて怖かったけど……

「お義姉さま、この国嫁ぐ、大変分かる。僕、義姉さま来る、嬉しい」

不思議と涙が出てくる。この子は塞ぎこむ私を慰めに来てくれたのね……

そのためにわざわざ公用語覚えるなんて、なんて健気ない子なの！

「お姉さま、この国、嫌い？」

他人から見ればそこまで塞ぎこんでいたのね。ダメじゃない私、

こんな小さな子

に心配されるなんて……思わず胸に抱きしめると、言った。

「……いいえ、今好きになったわ!」

パーフェクトコミュニケーション!!

なんとか、上手く交渉出来たようだ。言葉って素敵ね。リリースの産みだした

素晴らしい文化だよ……何時までもこの国に悪感情を持たれていても困る。

それに言葉って言うのは、学ぶのと実際に会話するのは全然違う。会話しないと上達

できない、役に立たない知識なんか持っても仕方ないのだよ。

じゃあ、私の前世のゲーム知識とかも……役に立たないだろうな R T S 得意とか意味無いだろうな。

それにしてもお義姉さま。なかなか結構なものをお持ちで……兄上はこれを

毎日揉みしだしているのか、けしからん話だ。

それにしても実に充実した日々だ。身分的にも嫁さん保証してくれるだろうし、

国家情勢も安定してるっぽいし。転生した時は絶望したが、こういう生活なら悪くないな。

## 第2話 侯国の日々（後書き）

解説

神は我らと共に

ドイツ国防軍の標語

忠誠こそわが名誉

ナチスの親衛隊の標語

pop

ネットゲ用語でモンスターが湧く事。

### 第3話 魔法とか文化とか

「Requiem aeternam dona eis, Domine, et lux perpetua luceat eis.」

(主よ、永遠の安息を彼らに与え、絶えざる光でお照らしてください)

「Exaudi orationem meam, ad te omnis caro veniet.」

(私の祈りをお聞き届けください。すべての肉体はあなたの元に返るでしょう)

呪文と共にマナを寝かされている人形に注ぎ込む。

もちろん人形だから何の反応も無い。

「……完璧ですぞ、これで治癒魔法の修得は終了しました。教会治療師としても活躍出来るでしょう」

「有難うございます。グリエルモ司教」

あれから、2年が経過した。言語は帝国公用語を修得し、今ではケルティック語(英語)とグラエキア語(ギリシャ語)とノルド語(古ノルド語)修得中だ。メシマズは前世である程度知ってるからまだ良いとして、グラエキア語はこれまで全く触れてないので苦戦している。

知っていた言語と言えば「アラララーイ！」位なものだ。エトリリア語(教会語)の方言と納得させて覚えている。ノルド語に至ってはルーン文字だ。さっぱり分からね。

魔法は、治癒魔法は習得出来た。というか、さっきの呪文とかだと意味的に患者が主の元に逝っちゃうんじゃないか？

実はそうなのである。あの魔法をアンデットとか悪魔とかにブチかますと、アンデットは消滅する。上級クラスだと何発か要るけど非常に効果的なのである。

……ほぼイキかけてる人に使ったら、どーなるのかな？怖くてやらないが。

つまり、優れた教会治療師は優れた聖堂騎士なのだ。アンデット用には治療魔法を射出したり放射したり出来るようにしないといけないから別の術式になるけどね。

別にこの世界のパラディンは銃剣持ったり2丁拳銃だったりポン刀振り回したりしなくても良い。

発動体さえあれば使えるのだ。まあ、北部に本拠地を持つ、クルラント騎士団辺りには、そういう連中も居そうではあるが……

「グリエルモ司教、今度からは聖堂魔法を教えてください」

「……いや、公子。次は神に仕える司祭となる心構えと礼法を」

「それについては、知っているのでもいいです。私は礼法よりも実務的な事こそ学びたいのです」

私の発言にグリエルモが祈禱文きとうぶん唱えた後、絶叫してるぞ、禁欲しすぎて発狂したか？

……危ない大人は放置して行こう。ジョルジョが腹抱えて爆笑してる。カオス。

このグリエルモ！今日も公子殿の素晴らしい所を発見しました。聖職者となる為の礼節よりも神の僕としての奉仕をお選びになさった。「それには及ばず、覚悟はある。それより主に近づく為の神秘をお分け下さい」と宣った。あの御方はやはり聖者の器をお持ちだ。

グリエルモ、カ・ン・ゲ・キ！

オリーブ色のズボンを履き、地味な灰色のチュニックを着る。腰にダガーナイフを付けて、フェルトの帽子を深くかぶると、いつものようにジョルジョを連れて城下に出る。手慣れたものだ。

家族には、普段が真面目だからそれぐらいは。とか、下手に禁じてその行動力で家出でもされたらかなわん。だとか、城下でも大人しくしているので構わん。とか、イヤーわたしも連れてけー！とか、概ね良好である。おおむ

さすがに姉さまがホイホイついて来ても困る。貴族の子女って事もあるし、ガチで可愛いから誘拐されかねない……美人に生まれた己の不幸を呪うがいい。

姉さまの婚約発表の後、一番大暴れしたのは兄上だ。「クレマン、ブッコロ」とか

外交問題発言を平気で叫んでたぞ。その後、私の肩を掴んで色々愚痴ってた。

途中からオンドウル語になっていた。実に面白かった。

中世ヨーロッパの風物詩と言えば戦争・不衛生・異端審問だ。まあ戦争はどの時代でもある意味風物詩なんだが。20世紀後の戦死者数って、それまでの歴史を全て纏めた数に匹敵するって話らしい。でも逸散<sup>いっさん</sup>していたり記録抹消されている分もあるから大げさな話だが。

不衛生についてなんだが、かなり史実と違っていろいろだ。道や川に糞尿を垂れ流したり、肉屋が骨や臓物捨てたりとかはしていない、トイレも汲み取り式らしい。いい事だ。

ゴミや汚物は回収されて肥料にされるらしい。この時代のゴミは基本燃えるごみばかりだからな。金属片とかはクズ金属として高く売れるから捨てる奴はいない。

公衆浴場の存在はそんなに驚いていない。実際中世では風呂の風習は残っていた。

誰だって体が汚れたら洗いたい。浴場が忌避されるように成ったのは14世紀以降だ。

その理由も「(男女共用)風呂に入ると病気(梅毒やペスト)に感染する」だ。

風呂で“そういう事”するから感染するのだと思うのだが、兎に角にも事実ではあるので忌避された。



もう1つの理由がこの世界のキリストにあたる御方が潔癖症きれいずきだったらしい。

……まあ、ユダ様だしな。

そして最後が異端審問だが、これは中世と大して変わらないだろう。異端な考え方や違う思想が許せないって気持ちは分かるし、異教の国と戦争しているなら（ケルティックとか北のノルマン王国Ⅱスカンディナヴィアとか）その気持ちは高まるだろう。中世程は激しくないと思うが、歴史というのは脚色されるから、当時もこんなものだったのかもしれない。

あとは、べつに悪魔祓いの魔法が異教の人間に何か効果を示すものではない。

実際、ある魔女に聖堂騎士が悪魔祓いの魔法を掛けたが、

「なんか、あったけえ……」

となっただけだった。

その辺が魔女を街に追放するに留めるだけになっているのかもしれない。

「あら、セルジオくん。こんにちは」

「こんにちは、おばさん」

セルジオと言うのは街に出ている時の偽名だ。立場上は庭師の少年でジョルジョの縁戚の子供ということになっている。侯爵の息子

がホイホイ出歩いているとは思うまい。

こういうとき“だけ”は地味フェイスで良かったと痛感する。

「おっさん、ラシヤ売れてる？駄目だよ、そんな値段じゃ誰も買わないよ」

「うるせーぞ、糞ガキ！いつも余計なお世話だ」

「そんな態度だから、売れないんだよ。奥さん真似してもっと愛想良くしないと」

「うるせ、邪魔であっちい」あんた！子供に向かって何言ってるんだい！」

市井に出るようになってだいぶ言葉は上達した。天上人が使う言葉と民衆が話す

言葉は結構違うもんだ。こんな話し方はさすがに屋敷じゃ無理だ。軽く折檻される。

「さあさ、この地名産の秘密箱、一つ銀貨2グロッシだ。銅貨なら45ソルドで如何だい？」

「おいしい豚の焼肉はいらんかね？焼きたてで美味しいよ」

「聖者は仰いました。神の物は神の物、皇帝の物は皇帝の物、お前の物は俺の物、と…」

「すみません、剣の砥ぎ直しをしている職人は何処に居ますか？」

「ああ、それなら…」

「イテェな！何処に目を付けてんだ。この馬鹿！」「ぶつかったのはそっちだろ！」

「高い！3つで8ソルドで良いだろ」

昼の広場には様々な人で賑わっている。行商人の掛け声、大工や石工のハンマーやノミの音、世間話をする人、交渉する商人、芸を披露する大道芸人、喧嘩や野次る声等だ。

うん、屋敷に居てはこういう事は学べない。いつの時代も人間は変わらないものだな。

中世ヨーロッパは街でも殺人や窃盗ばかりの荒んだ時代等と本で読んでいたが、これ見ると信じられない。しかし、資料とか記録って悪い事ばかり載るからなあ：裁判資料集に「きょうも、一日へいわでした、まる」なんてわざわざ書く奴いないよな。

大通りを離れて裏通りに入ると、表とは打って変わって薄暗く、怪しげな店が立ち並ぶ。街に出始めたばかりの頃はこのような所へ来るのを禁じられていたが、ジョルジョも居るし、少し離れて護衛の家人も付いて来ているし、禁じても勝手に行くしと諦めたようだ。

家族の評価は、神童＞無駄に行動的な神童、と印象がアップグレードした。

いや、こんな楽しい世界で大人しくしてるとか出来ないし、少し欠点がある子の方が可愛いだろう。

勿論、柄の悪い連中に襲われかけた事もあった。その時のジョルジョの“お説教”は凄まじかった。完膚無きまでに叩き潰し、虫の息の首領格の男の口にワイン瓶を突っ込み

ファミリ―  
「家族を大事にしない奴は男じゃない、酷い顔だ。しっかり喰え」

と言って顎を蹴り上げた。あれは正直引いた。

その後、ジョルジョが指を鳴らすと建物の陰から黒服を着た家臣たちが現れ、連中を引き摺ってどこかへ連れて行った……

そんな訳でドン・ニコシアーノが護衛に就いている以上、私の身は安全なのである。

裏通りの散策を終えて表通りに戻ろうとすると道の真ん中でやけにガタイの良い

髭もじゃの子供が倒れていた……うん、突っ込みどころが多いな。

その子供？は赤髪の老け顔、リンカーンみたいな御髭を蓄えている。なのに

背丈が1m程度しかない……ああ、もしかして

「大丈夫ですか？あなたはもしかしてドワーフの方ですか？」

練習中のノルド語で話しかけた。

読み書きは無理だけど基本的な会話なら何とか出来る筈だ。

「腹減った……メシ……水……」

購入していた焼肉を挟んであるパニーニを渡す。ジョルジョに言っ水袋も渡すと凄まじい勢いで食べ始めた。

「浮浪者に施しを与えると収集付かなくなるのだが……」

「ジョルジョ、彼はドワーフだよ。こんなところに1人で居るなんて事情が在る筈だ」

「そうですね……危険はおそらく無いだろうから構わんか」

ドワーフ 北欧神話に登場する精霊で、暗い洞窟などで武器とか宝石を造ってる超インドア派。伝説だと太陽の元に出ると石になったり体がパーンしちゃうヒッキーさんだ。

この世界だと人間に友好的な魔族。鍛冶や細工の技術に優れた小人で寿命が数百年と長い。ノルマン王国では職人として保護されている。太陽の元に出ても問題は無いが、鍛冶場とか工房のような薄暗い所を好む、多分、非常にシャイなのだろう。

「いやあ助かった。感謝するぞ少年！ところでミスリル銀はいったい何処に？」

「いや、一体何の話なのです？」

ミスリル銀 銀の輝きと鋼より硬く錆びにくい金属 多分ステンレスの事である。

と言うのは前世の常識で、この世界では魔力を帯びた銀マナの事で、魔法の発動体や武器、防具、聖職者の杖や法具等に用いられる。錆びにくく鋼より固い非常に高価な金属だ。

正直、魔力を帯びていると云う以外は大した違いは無い。

「山を越えれば、ミスリル銀が石のように転がっていると聞いてきたのじゃ！」

おいイ！チエルヴィーノ山脈越えてきたのか！！さすがドワーフ

格が違った。

「……それ、完全に騙されてますね」

石のように転がってるなら金より高い訳無いだろうが：

「なんてことじゃ！ミスリル銀を5000リブラ（約7t）用意せねばグリーンブルステイを造れんぞ！このままではブロックの奴に負けてしまう！」

途轍もなくいやな予感がするが、構った以上聞かねばなるまい。

「まずは、落ちついて頂けます？最初から話を聞きたいのですが……」

「うむ、そうじゃな。わしはエイトリ」

……やはりお前だったか。

「パンスニンゲの洞窟で鍛冶屋をやっていたのじゃが……」

一酸化炭素中毒になりそうな話だなオイ。

「ある神の命令で最終決戦<sup>ラグナロク</sup>に備えるための兵器を創るよう命令されたのじゃが、わしの兄のブロックも同じ依頼を受けてな。どちらが優れた武器を早く作れるかで競争しているのじゃ」

「わしはそこでミスリルの猪を創ってやろうと思ったのじゃが……」

「……材料が無かったと」

「そうじゃ！前の依頼でレーヴァティンの剣を造った時に使い果たしてしまったのじゃ！」

あの剣お前が造ったのか！

……大方あの詐欺師<sup>ロキ</sup>が騙し取ってシンモラに渡したんだろうな。

「それでミスリル銀を手に入れるために鍛冶屋を閉めて各地を放浪してたのじゃが……」

「山の向こうにあると言われ、情報料で路銀<sup>おかね</sup>を掠め取られた……」  
「大当たりじゃ！ 良く分かったの！」

想像つくわ！ このマヌケ！

「それで、どうするのです？ お金が無ければミスリル銀どころか、明日の食事だって困りますよ？」

「そうなのじゃよ。最初、鍛冶屋で働こうかと思ったがの……見ず知らずの奴を雇えないとか、異教徒<sup>ドワーフ</sup>を住まわすのは無理じゃと言われての……」

この時代の職人ギルドって排他的な所あるからな。その上、何れ<sup>いずれ</sup>去る人間に技術を盗ませる奴は居ない……異教徒うんぬんよりもそれが理由だろう。

「はあ、わかりましたよ。話だけならしてみますのでついて来てくれますか？」

父上に掛けあってみよう。ドワーフの創る産物は優れている事で有名だ。

幾ら異教徒でも悪い事はならないと思うが……

「おお、有難いぞ！ そうじゃ、食事の礼をしよう。左手を出しなさ

い」

左手を差し出すとエイトリは銀色の飾り気のない指輪を人差し指に付けて、

高速でルーンを詠唱する。するとその指輪は黄金色に変わった。

「ミスリル製の魔法の発動体じゃ。見た目は悪いがの、効果は一級品じゃ。一生使い

続けても指輪の効果が切れる事無い、ついでにお前さんにしか使えないようにして置いた。違う奴が装着すれば一瞬で魔力を吸いつくされて昏倒するじゃろう……神でもな」

「……………」

「どうじゃ？嬉しいじゃろう……もつと素直に喜ばんかい」

「……これ売れば、ミスリル1000リブラ位になったのに」

「……ふおおおおッ！！」

頭を垂れて私の後を続くエイトリを引き連れて侯爵邸に戻る。ドーフを見る使用人達の目は厳しかったが、貴重な贈り物を送って頂いた客人だ。と言うと皆押し黙った。

「で、其方の者がドーフのエイトリと云う者か」

「左様でございます。兄上」

フェルディナンド・アルベルト・デイ・チエルヴィーノ 我が兄上様だ。父上に似て

家族思いで冷静な性格だ。民衆の話では少し冷たそう、真面目すぎ



て将来ハゲそう、と言うイメージを持たれている。本人は我関せず、な態度だが。

家族の事になると暴走する。（姉さまの婚約発表のアレとか、私が池に落ちた時とか）夫婦仲も良好なようでエリザベッタさんは現在懐妊中だ。

エリザベッタさんとはあれからよくお話したり遊んだりした。年の離れた弟と言うより愛玩動物ぬいぐるみという扱いではあるが……彼女の生家は後継者争い等で兄弟仲が良くなく、ここまでフレンドリーな家族関係は見た事が無いそうだ。うちは貴族でも異端なのかな？

私も兄上とは小さい頃から、意図的にスキンシップを掛けて来た……嫉妬されない為に。

それに、前世は一人っ子だったから兄弟という関係にあこがれていた。兄上に抱きつくとか、何故か鼻血を垂らすのだ……イケナイ性癖でも有るのだろう。

それを見た姉さまが同調して、みんなと触れ合うようになったのだ。

「全く、お前はつくづく変わった事を仕出かすな」

「申し訳ございません父上」

「見た目は唯の金の指輪ですね」

「母上、私が成長しても指輪の太さが少しずつ変わるようです。金ではあり得ません」

「あら、素晴らしい事。結婚指輪のサイズが変わって抜けなくなる

事も無いわね」

マリア・テレーザ・デイ・チエルヴィーノ　我が母、チエルヴィーノ侯爵夫人だ。

メリヴェール侯爵の次女で姉さまに似た黄金色の髪に青色の瞳を持つガウル美女って奴だろう。慎み深いたおやかな性格で貴族の女性たる事を誇りにしている人だ。

「私としてはこの地に逗留する事は、鍛冶の技術を寄与する条件に生活の保障は致すが…」

「あの、御方が何を仰るか……ですわね？」

あの御方とは、みんな大好きグリエルモ司教殿だ。ドワーフ逗留とまりどまりさせるなんて自分で火刑台をこさえかねない。そうでなければ勝手に殉教だ……気が重いが説得するしかない。

「仕方ありませんね、私が招いた責任です……私が説得します」

「頼むぞ……あの者はお前のいう事は聞くのだ。それが良いであろう」

私は、グリエルモの笛吹き男か、大人と子供が逆だぞ…

早速、グリエルモを捕まえると聖書の文章を引用しまくってドワーフをこの地に逗留させる旨を了承させた。「曰く、主は寛容を持って奇跡を成した」「曰く、異教の者でも悔い改めて聖人となる者も居る」「曰く、主は困っている者に慈愛を持って対応した」等だ。

するとエクスタシーに達したのか、白目をむいてぶっ倒れた。

ふむ、どうやら癲癇性のヒステリーのような……まあいいか。

痙攣起こしている作戦参ば…じゃなくてグリエルモ司教を放置して説得に成功した事を伝える。

こうして、エイトリはこの地で鍛冶屋として生活を保障されることとなった。

「ところで、そのミスリルの猪の完成期限って何時まで？」

「……70年後じゃ」

「……」

「……」

「「30年は働いていけ！」」

さすが、長命なドワーフだ。時間の概念すら違うのか……

### 第3話 魔法とか文化とか（後書き）

#### 解説

銃剣や2丁拳銃にポン刀  
もちろんヘルシングの“あの”連中の事です。

#### 第4話 愛なんて、恋なんて、ロシナンテ

エイトリがこの地で鍛冶屋を営むようになって半年、私は9歳になった。この世界では年齢の数え方は、年の頭に一歳ずつ歳が増えていく数え年が基本だ。その為、新年のお祝いも派手にやるのだから。

この季節の、この地方は非常に冷え込む、絶対車で走りたくない場所だ。脂肪の無い子供の身には辛すぎる……暖房器具だって暖炉とか有るけど、近くを離れると効果が無い。机で勉強など脚先が凍りつくようだ。

先日、義姉上に、待望の第一子が誕生した。マルゲリータと名付けられた。

その時の兄上もすごかった。終始、何かブツブツ呟きながら、部屋をウロウロ徘徊しては「まだ産まれんのか」と時折、低音ボイスで喋ってた。正直不気味だった。

妹の婚約でもアレだったのだ。この子の結婚の時は、血の涙を流すのだろうか……

その時の私は何をしているのだろうか。外交官か腹心として、この国を兄上と共に支えているのだろうか。まてよ、私って九歳にして叔父さんか……

五歳位の幼女に「おじさまー」って抱きつかれるのか……アリだ

な……ぐへへへ

み・な・ぎ・っ・て・きたぜ！これ、ジョルジョよ！馬を引け、遠駆けであるぞ！

「で、乗馬の練習ですか……この糞寒いのに」

「いやあ、貴族たる者馬ぐらい乗りこなせないと問題かな、って思  
って」

「まあ、確かにそうですがね、なにも……いや、坊っちゃんには無  
駄か」

エイトリの一件で私の評価は「無駄に“奇怪な”行動力のある神  
童」に昇格した。

……だんだん悪くなってないか？

「じゃあ、馬を引いてきますので待っていてください」

この時代の馬っていうと重装騎士の馬だからペルシュロンみたい  
なでかい奴かな？それともハンガリーの辺りの軽種かな？スペイン  
のアンダルシアみたいなのかな？すると、ジョルジュが戻ってきた。

「トレビアン！これはタラゴナ産の奴かね？」

「……いえ、近隣の農場の奴ですが」

ハハッ、まさかこの種類になるとは思わなかったよ。力が強く頭  
も良い理想な品種だよ！

……………ロバだとはね

「坊っちゃんだと余り大きい馬には乗せられません。万一怪我されると困るんで……」

「決めたよ……君の名前はロシナンテだ」

「何か言いました？」

「……何でもない行こうか」

春になったら絶対普通の馬で練習してやる！私はそう誓った。

乗馬の訓練と言う名の散歩を終えると、ジョルジョに武術の練習をする。寒さを

解決するには体を動かすしかない、基礎代謝が高まれば体も冷えにくくなる。

「坊っちゃんは、まだ子供なので力で断ち切る技は向いてないですね。間接とか、首とか、脇の下とか、実戦では防具の無く、斬りやすい個所を狙ってみた方が良いでしょう」

「刺突するのはダメかな？」

「下策です。一対一なら良いでしょうが、相手が数人だと負けるでしょう。他にも、人間を刃物で突き刺すと、体が硬直して剣が抜けなくなります」

「また、無理に引き抜こうとすれば、剣自体が曲がったり、最悪は

刃が折れます」

ジョルジョの教える剣技はかなり実戦向けの戦法だ、ガウル貴族  
辺りなら頭がフットーするような卑怯な技を平気で使え、と言う。

「曰く、隙を見せたら足を踏みつけろ」「曰く、砂とかで目を潰せ」

「何処を蹴れば、相手を確実に制止できる苦痛を与えられるか」「  
どの部位が血管が集中してるからダメージが大きい」とか……

「サーベルとかカトラスのような軽めの剣の方が良いでしょう」

「ラグーナのイゼルティア騎兵隊の使うスキアヴォーナとかダメか  
な？」

「良いですな。あれなら切れ味良いし、軽めなので扱いやすいでし  
よう」

「ジョルジョ、ピストーラ（短銃）って使える？どうしても固い敵を  
倒すために予備携行で持っておきたいのだけど……」

ピストーラは火薬式の拳銃だ。この世界には銃は存在する、火縄  
銃とホイールロック式の2種類だけではあるが、大型のタイプは軍  
でも用いられているが、小型の銃は余り活躍していないようだ……  
小型にするのに高くなるし、有効射程も落ちる。そのような高価な  
物を買う余裕が在るなら、魔法でもクロスボウでも持って行くだろ  
う……

「一応使えますね、練習してみますか？ですが、反動すごいですよ」

今、準備しますから待っていてください。と言うと、懐から短銃  
を取り出し、銃口から鉛玉と火薬を入れる、火バサミに火縄を装着



し火皿に火薬を装填する。

「どうぞ、これで使えます。あの藁的に向かって構えてください」

ジョルジョが私の手に銃を握らせる。ゴツゴツした暖かい大きな手だ。

弓の的の藁人形に照準する。一遍銃を撃ってみたいという夢があったが、

火縄銃で実現するとは思わなかったな……

「腕を少し調整してください、肩を外しますよ……そう、撃てッ！」

轟音と共に白煙が上がる。藁人形から藁束が飛び散るのが確認できた。

「巧く当たりましたね、でもすごい反動でしょう」

「ははっ、腕がじんじんするや」

「その銃は坊っちゃんにプレゼントしますよ」

「……こんな高い物を悪いよ」

「坊っちゃんの楽しそうな笑顔が見られたから構いません。」

それに、その銃は装填に時間かかるから実戦では使いませんね」

「そうなの？」

「私は常に、装填済みのホイールロックを携帯しています……まあ、その方が何かと便利です」

使用後に花束でも手向ければ完璧ですね！

「何の音かと思って来れば、またお前か」

「申し訳ありません旦那様」

うん、新たな称号が増えそうだ……

4月頃、無駄に奇怪な行動力のある何を仕出かすか分からない神童ヴィットーリオ

に昇格した私は……うん、ネ実で聞いたことのある文体だ。

とにかく、父上に呼び出されたので執務室に向かう。

「お呼びですか？父上」

「うむ来たか、ヴィットーリオ。どうだ？勉強は進んでいるか？」

「武術に関しては、乗馬、剣術、銃術を学んでいます。勉学に関しては統治学や軍学

を勉強しています。言語に関してはクロード先生がお忙しいのであまり<sup>はかど</sup>捗って無いです」

クロード先生は今までの書記として以外にも、エイトリに通訳とこちらの言語を教えないといけないので、あまり時間が取れなくなっていました。やはり優れた教師が居ないと言語の習得は難しいのだ。

「うむ、そうか。お前は外交官として活躍したいと言っていたのだな……お前の才能なら武人としても副総督でも通用すると思うのだが」

歴オタに戦争とか政治とか何考えてんの、糞親父、と思ったが口にはしない。

「外交官となるなら広い世界を見に行かねばならぬな。今度私はブレンダーノ公国を訪問しなければ為らないのだが、一緒に来るか？」

「荷馬車が、ゴトゴト、君主を、乗せていく」

「……何を歌っておるのだ？」

ブレンダーノへ出立して数日がたった。今回、家族は父上と私だけ、後は護衛の家臣とか貴族とかだ。この世界で産まれて初めて他国へと行くのだ。嬉しくないはずが無い。家を出る時、姉さまに凄まじく恨めしい視線で見つめられた。何かお土産を買っていかねばな…

この世界の馬車は非常に振動が激しい。椅子の座り心地も良くは無い……木のベンチにラシャ張り付けてあるだけだからな。痛風持ちとか痔の人は多分死ねる。

前世で友人のスポーツカーで大阪まで行った時は酷かった。椅子の座り心地は固いし、何か変に低いし、振動とかで按摩器状態だったな。これはもっと遅いの……酷い。

サスペンションが発明されてないからか……あれの開発何時だっけ？

「今日はこの辺で野営だな。明日の昼には到着するだろう」

「少し、外を見回っていいですか？父上」

「はっは！さすがのお前でも馬車の長旅は堪えたか？余り遠くへ行くなよ」

馬車を降りると、護衛の兵士は警戒を、使用人は食事の準備や天幕の設営をしている。興味深きよろきよろ見回すと貴族に声を掛けられた。

「興味が御有りですか？公子殿」

「確か、カッシーリ殿でしたか？」

「覚えていただき光栄に存じます！私奴はジョヴァンニ・カッシーリで御座います」

この鯨のように肥った男は、ジョヴァンニ・カッシーリ子爵だ。忠誠心が高いのか媚を売っているのかよく分からないが、とにかく私は好きではない。

「私奴にも出来の良い息子が居ます。神童と評判のあなた様と良き友人

となれると存じます。一度、我が屋敷に訪問なさって下さいませ」

このビール樽、息子使って取り入ろうってか？いい度胸だ。やはりこいつは嫌いだ。

「感謝する。卿の忠義、父上にお伝えしよう」

「ははっ、有り難うございます。それでは」

ラードの塊が立ち去るとドット疲れが出てきたのか。肩が重く感じる。

外交官になるとああいった手合をあしらうのも仕事になるのか……

「公子殿、おみごとな対応ですね」

「ああ、マスカーニ殿ですか」

ウンベルト・マスカーニ マスカーニ伯爵家の嫡子で侯国でも名門の貴族だ。この人の奥さんは確かブレンダーノのマルガリオ家の出身という事もあって親ブレンダーノ派だ。

「ブレンダーノはいい所ですよ。温暖で気候も良いため農産物に恵まれて食べ物も美味しいですし、服飾品や織物等も素晴らしい物が在りますからね！」

「いや、私は観光に行くのではなく公務で行くのですから。余り楽しめたものではないと思います」

「合間など幾らでも有ります。護衛の方も連れて案内しますよ、諸外国の

王侯貴族も観光に訪れているので安全な店は多くあります」

ウンベルトが語ると、20代の貴族の貴婦人が現れた。ウェーブのかかった黒髪の女性だ。

「紹介します、妻のルチアです。彼女はブレンダーノの出身でかの地には詳しいのです」

「ルチア・マスカーニと申します。公子の御噂はかねがね」

「存じ上げております。確かマルガリオ家の現当主の妹君でしたね？」

私の発言に相当驚いていた、まあ無理も無い。しかし、訪問する国の事や

同行者について等は、頭に叩きこんでおくのは常識だろう。

「ええ、父が亡くなった時に葬儀に行けず。ようやく訪問の機会が出来たので、侯爵様に無理を言って同行させていただいたのです」  
「それは……」

嫁いだ娘が、実家に帰る事はあまり無い。特に遠方の地なら余計だろう……

「それにしても、公子殿の博学には本当に驚かされますな、妻の実家の事まで御存じで有るとは……」

「いえ今回の訪問にあたって調べただけですよ。奥方の事は、貴婦人が

同行するのが珍しいので偶然知ったのです」

「左様でございますか。しかし、本当に調査される方は稀です」

予習、学習、復習やれる事は、片っ端からやっているだけなんだからね。多分凝り性なのだろう。

「有難うございます。現地で観光する機会があれば宜しくお願いいたします」

そういつて別れると、天幕に戻り、食事を済ませて就寝する。

貴族達には天幕に布団や毛布等で寝れるのだが、使用人や兵士は外套に包まって寝る。

マントと言うのは、護身具以外にも、布団という要素が在るのだ。

翌朝、目が覚めると、伸びをして天幕から出る。

思ったより寒くは無かった。標高が降りているから温暖なのかな？

朝の日課の剣の素振りをする。継続は力なり、だ。

振るい続けてないと筋力とか技術とかすぐに衰えるのだから。

「起きたのか毎日、精が出るな」

別の天幕から父上が出てきた。その目は眠たそうだ。

「寝付けなくてな、つい深酒をしてしまった。お前はまだ遣らないのか」

「まだ9歳です酒など早いでしょう。飲めるとしたら果実酒ぐらいです」

「……そうだったな、いつかお前と飲める日が来るのが楽しみだ」

親父と酒か……前世だと大学で1人暮らししていたから、そういう機会は数えるほどしか無かったな。

「では父上、少し周りを走って参ります」

「うむ、気を付けてな」

天幕の周りを走り込む、持久走の感覚だ。「我が戦争は兵士の健脚で完成される」

フランス軍で最も戦争の巧いドイツ人、サックス大元帥の名言で、後のナポレオンも使った発言だ。

上半身マッチョより走れる奴の方が良い、パワーよりスタミナ。

すぐに息切れする奴は使えないって事だ。これを毎日繰り返している上に、田舎育ちと言う事もあって体は丈夫になったしね。

朝食を取ると、馬車に乗り込み道を進んでいく。すると小麦畑の向こうに巨大な城砦都市が見えてきた……ブレンダーノの首都メデイオラーノだ。

馬車が街を進んでいく。そつと外を覗くと、チェルヴィーノとは比べ物にならない活気と建物の緻密さであった。

……やはり、大国の首都となると違うな。通りの広さ、人々の人数、建物の芸術性と配置……こんなに密集していて、火災になると大変だな。裏通りもさらに暗そうだな。

ブレンダーノの城館に到着する。六角形の城壁の中心に建てられた正方形の屋敷だ。外の庭園も美しく整備されている。

「ようこそお越し下さいました、チェルヴィーノ侯国の御一行様。私はルイージ・ピサーニと申します」

「これは、態々の出迎え感謝する。公爵閣下はどちらに？」

「昼食の席でお待ちです。宰相閣下もお待ちしています」

「そうか、卿は宰相殿のご子息であったな」

「はい嫡子で御座います。どうぞ、此方へ」

ピサーニの案内で広間に案内されると、そこには30台の栗色の



ウェーブがかかった長髪で眼光の鋭い黒い瞳を持つ痩身の男が待っていた。

「よくぞ、参られた。貴殿らの来訪をこの国の主として歓迎する」

ブレンダーノ公爵、アメデオ3世 近年成長を続けるブレンダーノ公国の君主だ。

27歳で即位後、破綻しかけていた財政を3年で立て直し、ヘルヴェティア連邦に宣戦布告し、勝利して領土を奪い取った。周辺国家の不安をあおる存在だ。

「ブレンダーノ公爵、本日はお招き頂き…」  
形式上の礼を述べる父上を公爵は制する。

「礼などご無用、我が国と貴国の仲であります。無礼講と致すとし  
ましょう」

交渉の主導権を握れなかった父上は臍<sup>はそ</sup>をかむ。……上手<sup>うわて</sup>だな公爵閣下は。

「さあ昼食の席を設けてあります。席に御掛けになりましょうぞ」

テーブルにはリゾット、パスタ、コトレッタ、ウサギのカッチャ  
トラ……

こんなもんばかり喰ってるから痛風に苦しむんだよ。馬鹿なの？

テーブルを視た私が若干引き攣<sup>くわ</sup>っていると、神経質そうなおっさんが話しかてくる

「おや、公子殿。このような豪華な料理は初めて見ますかな？我が国は田舎では

無いので粗末な料理を出す事は出来ないのですよ……カハハハハ」

誰お前？貧相な見た目しやがって、侍従か何かか？失せろ

「そうですね。我が国は敬虔<sup>けいけん</sup>な十字教徒が多いものでして、このような暴食をする習慣は無いのですよ……ソドムとゴモラの様なね」

「なっ……」

9歳児の口から放たれたと思えない暴言に侍従は沈黙する。ザマアミロ

「はっはっは！お前の負けだ、カルロ。済まなかった、公爵として部下の非礼を詫びよう」

カルロって……どこかで聞いたような。小屋に突入して、何かが刺さって死んだ奴じゃなくて…

カルロ・ピサーニ ブレンダーノ公国“宰相”爵位は伯爵……やっちまったZE！

「噂以上の智略を持つ御子息だ！侯爵も安心であろう」

「……ははは、聖職者を目指してしましてな。聖書に関する格言が好きなのですよ」

わーお、パパ上棒読みだ。マジでソーリー。

ともあれ食事を進める、こうなったら自棄だ。

「Salute！」

皆がワインで乾杯をする。私は飲めないので炭酸水だ。

「この炭酸水美味しいですね」

素直な感想が出る。水処と言われるチェルヴィーノで育ったのだ、水にはうるさい。

「アンバラーノの街で採集される地下鉱泉ですね、カジノなどの保養施設もあるのですわ」

「そうなのですか。ルチアさん」

「貴族達の避暑地の別荘も在って素敵な所ですわ。私も貴方位の時は毎年、家族で訪れていたものです」

「そうですね、私はあのカジノで500ドゥカートも負けた事が有りますぞ」

「カルロ、貴公は引き際を心得ないからであろう」

「うむ、確かにこの水はワインにも会う、辛口で香りの強いワインのきつさを中和してくれる」

おおむ

概ね、良好な雰囲気で会食は進む、ちなみにイタリアなのでナイフとフォークは普通に流通している。他国でも上流階級にはナイフとフォークは流通しているようであるが、平民たちは使っているのかな？

しかし、このフォーク二又だから使いにくいよな……

今度エイトリに言って4つ又のフォーク造らせてみようか。



**第4話 愛なんて、恋なんて、ロシナンテ（後書き）**

解説

ロシナンテ

ドン・キホーテに出てくる駄馬

## 第5話 ブレンダーノにて

食事を終えた私は客間で待機している。マスカーニ夫妻は墓参りに行っているので居ない。父上は公爵と会談している。つまりここに居るのは、あのいけすかない豚だけだ。

彼とは会話をしたくないのでチェスを指すことにした。

会話するよりマシかと思った。が、こいつ滅茶苦茶強い。実に腹立たしい。

「公子殿、チェックです」

無残に崩壊した我が陣営を見る、どう見ても逆転は無理だろう。

「カッシーリ殿、これは既にチェック・メイトと言うべきでは？」

「ふおふおふお、お気づきになりましたか。どうですか？ もう1局」

「……ああ、宜しく頼む（やはりこいつは嫌いだ！）」

その後、連敗記録を更に三つ程追加して、もうすぐ四つ目が出そうになった時、父上が戻ってきた。

「お帰りなさい、父上」

「閣下、お帰りなさいませ」

父上は、万華模様まんげもようのソファ―に身を投げると水を一息で飲み干す。

「ああ、実に狡猾こうかつな交渉相手だ。このわしが翻弄ほんろうされるとはな」

「一体どんな内容で御座いますか？」

「うむ、関税交渉と鉄と魔晶石をこちらに流せ。とな」

「了承したのですか？父上」

「……妥協できるラインでな」

魔晶石とは魔力を含んだ石の総称。簡単にいえば魔力<sup>マナ</sup>の電池パックで、使い切れれば消える。材質は水晶みただけと違うらしい。質量分析計で何か測定したい。

「鉄と魔晶石と言うと……」

「ああ、あの国はまた何処かとドンパチやる気らしい……」

「ラグーナ共和国が相手ですか閣下？」

「おそらく……な。最もラグーナと同盟関係を結んでいるヴァレリア辺りが主攻だと思うが」

「陸ではブレンダーノとヴァレリアの殴り合い。

海ではギアーノとラグーナの潰し合いですか閣下……」

「多分な……」

「さあ、政治の話はおしまいだ。カッシーリよ、1局相手してくれるか」

夜の晩餐会までの間、父達はチェスを指し続けていた。私は家から持ってきた本を読んでいたのだが、時折聞こえてくる呻き声から、父上も連敗記録を積み重ねたらしい。

夜、晩餐会に参加すると昼食の時とは比べ物にならないほどの人

が集結していた。

……立食形式か、服装も色々な文化が混じっているな。深く考えるのはやめよう。

私の服装はスラッシュの入ったコーデュロイのプルポワンにゆったりとした縐子織のズボン。先のとがった靴のプーレーヌでその上にキツネ革の袖の無いジレだ。

ガウルに近いからガウル風の衣装となっているが、ガウルの影響下が強いと見せる牽制だろう。長衣姿のブレンダーノ貴族達とは対照的だ。

父上は大貴族とも在って、他の貴族達から様々な歓待を受けている。

が、子供の私はノーマークな様だ。これを良いことにいろいろ話を聞かせて貰おうか。

「これは子爵殿、ご機嫌麗しゅう。昨年は葡萄の収穫も豊富で質の良いワインが多く出来ましたな」

「うむ、おかげで別荘の改築をすることになった。今年も天候に恵まれると良いですなあ」

「あら、男爵夫人そのブローチ素敵ですわね？」

「うふふ、先日造らせました自慢の一品ですの。新大陸産の質の良いオパールで、

ルシタニアから購入したものをカンパニアの職人の手で加工した逸品ですよ」



「先日のアルトラ河の堤防の決壊でスカルラッティ伯爵領の小麦畑が壊滅したそうな」

「ふん、いい気味だ。主の罰が下ったのだ」

「先日、ガウルとケルティックの戦いで、王太子率いるガウル軍が勝利を収めたようだ」

「ほう、それは目出度い事で。この後ガウルはどのように動くのであろうか？」

「北へと兵を動かすようだ。この機に大陸からケルティック人を追放すると息巻いている」

「すると、小麦が多く売れますな」

「だから、チェルヴィーノと関税取引をしているのだ。食糧を陸路とギアーノの船とで売り付ける積りらしい」

「その資金で武器を手に入れて……」

「ああ、戦端を開くのは来年になるだろう」

「近年の帝国ではcaf?なる黒い溝水を飲むのが流行しているようだ」

「邪教徒から取り寄せたという毒薬ですな? 帝国人共も墮落したものだ」

「ラグーナ共は実に度し難い。ヴァレリアの連中に武器と火薬を売り付けているようだ」

「ああ全くだ、我々ギアーノ人を市場から締め出して利益を独占している。守銭奴共め！」

くだらん話も多いが貴重な話も多くある。宝石ってのは石の中に入っている、って事だ。

ここまで出た3カ国の簡単な概要を説明しようか。

ラグーナ共和国 海上貿易で利益を成す貿易国家で、エトルリア半島内で通用する貨幣は主にこの国が発行している。海外に多くの補給港や中継基地を持っていて、その維持に命を掛ける海の女王様。とは言え内陸部にも幾つかの都市と要塞等を維持している。

ヴァレリア侯国 ブレンダーノとラグーナの中間地点にある国家。近年ではラグーナと同盟を組んでいる。

ギアーノ共和国 史実のジェノヴァにあたる国だ。昔はラグーナ以上の海洋国家だったらしいが、ラグーナとの経済戦争に敗北しその地位を失墜させた。現在ではブレンダーノの属国となり、その製品が多く流入してきて経済的に上向いているらしい。ギアーノの間は民族衣装で青いズボンを履いているのが特徴。

「愚者は語り、賢者は黙る。聞き耳を立てて情報収集ですか？」

その言葉に後ろを振り返ると自分より5歳程の年嵩の青年が冷笑を浮かべていた。

「失礼ですが、卿の名は？」

「卿：ですか。フフ、失礼しました。その見た目と言動が一致していないもので」

「私の名は、ロレンツォ……ロレンツォ・ダ・バンコ。タウリニア貴族の家柄です」

では、失礼致します。と言ってその男は去っていった、何だったんだ？

「良く分かんが疲れた……」

会場内が暑く感じたので、外の庭園に出る……春の夜風が非常に心地よい。

ふと、見ると誰かが会話しているが暗い影から誰かは判別できない。

1人が話を終わると戻ってくる。マスカーニさんだ。

「……ああ、誰かと思えば公子殿ですか」

「こんばんは、マスカーニさん」

「そうだ、明日は時間が有るでしょう？ 私達と街を見に行きませんか？」

嬉しかった。明日もあのメタボとチェスを指さねば為らないのかと思うと憂鬱だった。街を散策するのは良い気晴らしになるだろう。

「喜んでいただき良かったです……私はもう失礼するので、また明日」

「はい、御休みなさい。明日は宜しく願います」

明日は何処を見て回ろうかと考えていた。ミラノみたいな感じだ

から服屋とかが良いかな。そんな事を考えていたので、男に声を掛けられるまで存在に気が付かなかった。

「こんばんは、少年」

アメデオ3世……なんで私なんか話しかけてくる。

「そう緊張する事もなからう。貴国とは友好国だ、襲ったりはせぬよ」

凄まじい威圧感だ……カリスマとはこういう奴の事を云うんだな。父上も交渉に難儀するだろうな……私なら、相手にしたくない。

「むう……どうも私は冗談が下手なようだ。臣下の人間も笑ってくれん」

「そ、そうなのですか」

公爵は芝生の腰を下ろす。自分だけ立っている訳にもいかないの  
で隣に座る

「見事な庭園であろう、私の自慢だ。この暗さでは何も見えぬがな」  
「昼間、訪問した時に一度拝見させていただきました。美しい庭園  
です」

「雄大な自然とは別の美しさが有るであろう、人の手で成されたH  
armonia調和も悪くない」

「侯国では見られませんね。自然が身近に在るので、草木の形を整  
えるという考えが無いのでしょうか……間伐や枝落としだけは違  
います」

私の冗談に公爵が笑うと、語る。

「上手いな、公子は。この芝生では半年に一度、トーナメントを行ったりするのだ」

「公子、もし気に入ったならこの国で暮らすか？名家の娘を嫁に紹介するし、その才能を存分に生かす役職を用意いたすぞ」

何言ってるの？と疑問になると公爵は、君の評判は調べさせてもらった。と前置きした。

「今の貴公は場所を得ているとは言い難いであろう。侯爵家とは言え次男だ、跡目を継ぐ事は出来まい。このままその才覚を坊主として腐らせるか？実に惜しい事だ。家宰として家を纏めるか？それで留まる才能ではないだろう」

突然の侯爵の勧誘に私が言葉を話せないでいると、公爵は遠い眼をして見つめて語った。

「……俺は公爵家の3男だった。父と兄達は享楽に溺れ国政を顧みず、苦言を呈す俺を疎んでいた。正直、兄達が乗馬事故と病で死んだ時は狂騒したぞ。それで無ければ俺は今頃僧職だ、冗談ではない」

「このままでは君も同じであろう、才無くば罵られ、才を示せば忌避される。家族では無くとも追従する者達に嵌められるだろう」

「私は才覚を示すものは誰でも麾下に置く。我が国の最高司令官は放逐された貴族の息子だぞ。爵位が欲しいなら侯爵位なんぞ簡単に

用意してやる、どうだ？」

ああ、公爵は私を自分に当て嵌めて心配してくれているのだな。そう考えると公爵に親近感がわいた。

「閣下、私の祖父はガウル侯爵。万が一国を追われる羽目に成りましたらガウルにでも逃げます。御心配は無用に願います」

「ははは、勧誘に失敗したか！君のそのガウル衣装、大変似合っているぞ……ではな」

公爵が立ち去るのを見て、私も部屋へと戻る事にする。尻が冷たい。汚れてないと良いけど……

「……ふう、やれやれ。我が息子は本当に心配させてくれる」

物陰に居た在る国を治める侯爵閣下はそう呟くと部屋へと戻った。

翌日、マスカーニ夫妻達と買い物に出かける。父達は条約文章を纏めている。

それが終われば、翌日には故国へ帰る、滞在するのは今日が最後だ。

「このお店がこの街で一番の商店ですわ！私もこのお店の御用商人に、何度も御世話になったのよ」

その店は如何にも貴族向けな、と言うお店だ。やはり大都市だ、我が国とは品揃えも店の規模も違う。天上に描かれている豪華な絵画、クリーム色の壁には聖人達の偉業を象った13枚のタペストリーや著名な芸術家の絵画が飾られ、広間の中央にはエトルリア帝国時代の大理石像が鎮座し、櫛の重厚な陳列台には各地の名産品や工芸品が所狭しと並べられ居た。

「御来訪お待ちしておりました、公子様。私は支配人のマルコと申します。」

本日は貸し切りで御座います、どうぞごゆるりとご覧になってください」

「貸し切ったのか、それはかなりの金額を使わねばなるまいな。さもなくば侯爵家は吝嗇だと誹りを受けてしまう」

私の冗談に皆が破顔する。

「ご安心ください公子様、この店に在るものはすべて購入できます。購入できないものは、私と、この店舗だけです」

綿入れされた緋色の天鵝絨と黒壇の椅子に腰かけて商品を選んできてもらう。大理石のテーブルには紅茶が載せられている。この世界では割と飲まれているらしい、

私はコーヒー党だが……ひと口頂く、緑茶が懐かしい。

「このタペストリーはゼーラントの名産品で金糸をふんだんに使われています。如何ですか？」

「良いですね、部屋の壁飾りに頂きましょうか」

こういう時はバンバン買い物をする。評判と言うのも馬鹿に出来ない。他国で悪い噂が流れると外交に影響する。あとは東方で造られたパルティア絨毯じゅうたんとホイールロック式短銃を購入する。

「写本も数冊頂きたいですね。ディゴメデス法律書、ピウスの教会魔法全集、アリーフ・サールド年代記ですね。他にも目録を用意するので発見次第送ってください。他には…」

「ミンクのショールが欲しいですね、母上の土産物にしようかと。後はラグーナの手鏡を4つほど、女性陣が喜ぶでしょう」

畏まりました。と支配人が言うに従僕に商品を取って来させる。

「ラグーナと言えばガラス細工も有名でしたわね、繊細な形には心奪われますわ」

「左様でございます、奥方様。ガラスと言えば造形の美しさはラグーナ。」

色の美しさはカンパニア。切子細工きりこさいこうと言えば帝国のチェック地方と3大名産地で御座いますね」

「では、ガラス細工のグラスもお願いしますか？公子」

「そうですね、後はレースの飾りの着いたハンカチを10枚ほど」

これは主に贈呈用だ、御世話になった人達の  
その他にも幾つかの商品を購入して店を後にする。すると、主人が見送りに来ていた。

「沢山お買いいただいて有難うございます。後これは代金とは別の



贈呈品です」

支配人の持ってきた箱には色とりどりのガラス製のペンが入っていた

「公子様は勉強熱心なようなので贈らせて頂きます。この街にご来訪の際にはまた御贔屓ごひつきください」

「うむ、この地に来る事があれば寄るとしよう」

その後、この町自慢の大聖堂（内装の絵画の修復中で入れなかった）や一番高い鐘楼しょうろうを登ったりした。昼食は街のリストランテで済ませた。この時に気が付いたのだが、着飾った平民階級が多く、レストランでも平民が食事を楽しんでいる様だった。

恐らく富裕層の平民が多いのだろう、この国の領主は間違いなく名君だ。

実力で採り立てると言うのは本当の話なのだろう、勉強になるな。

その後、郊外にある自然庭園の散策を済ますと、少し日が傾いてきたので屋敷へと馬車を進める。

「いやあ、本当に楽しかったです。ウンベルトさん有難うございました」

「……………」

「ウンベルトさん？」

「ああ、済みません。少し考え事をしていました。楽しんで頂きなによりです」

「ええ、私も宝石細工などを数点買い求めましたわ」

3人で会話をしていたのだが、馬車が停止した。外から怒号や叫び声とかが聞こえる。

……喧嘩だ

御者の制止を無視して馬車から降りる。1人の大男が数人相手に大立ち回りを繰り広げていた。その男は隻眼で、頬に大きな傷跡があり、肩ほどの髪を後ろに撫でつけていた。

「てめえら！1人相手に何手間取ってんだ。取り囲んでやっちなまえ！」

じゃあ、お前が行けよ。と思うのだが……

「ハンッ！てめえらみたいなチンピラが幾ら居ようと！」

突っ込んで来た2人の頭を大きな手で掴み

「一緒なんだよッ！」

おお、すげえパワー……片手で人間放り投げやがった。

「なめやがって、ぶっ殺してやる！」

チンピラ首領が短剣を抜き放って突っ込んでいく……旦那、それは死亡フラグですぜ。

案の定、長い脚の蹴り一発で沈む悪党。この人馬場さんか……

「兄さん！あなた何しているの」

え、ルチアさん。兄さんって……え？

「がははは！ いやあ情けない所見られたなあ」

オリビエロ・マルガリオ ブレンダーノ貴族マルガリオ家の出身。本当は嫡子で子爵家の継承者だったのだが“御遊び”が過ぎて放逐され、仲間たちとガウル軍の傭兵隊長に雇われる。両親の死後、墓参りに故国に戻った際、戦争が発生したので参加するが色々大活躍して最高司令官に任命される。ダルタニャンみたいな奴だ。

「笑い事じゃないわ！ あんな危ない真似して、いい加減身を固めて安定した生活しなさい」

「それは無理だ！ いつ死ぬか分からない軍人、お固い暮らしなんて出来ねえぞ！」

「まあ義兄さんも2人とも……その辺で」

言い争いを辞めた2人だが、オリビエロの視線が私に向く。

「ピストーラか護身用には悪くない選択肢だ。撃ち慣れているか？」  
私は頷いた、ジョルジョに貰ってから何度も練習している。

「そうか、ならあの看板の文字は読めるか？」

「……剣の修理から鍋の穴塞ぎまで、金工ロッシの店」

「目も良いな、体格も痩せているが、筋は付いている。剣の練習をしているな」

私は頷いた。するとマルガリオも目を細めて頷いた。

「ウンベルト」

「何ですか、義兄さん」

「こいつ貰っていいって良いか？お前の所の親戚だろ。」

「10年ばかり貸してくれたら優れた軍人にして返すぞ」

「お兄様!!」

「ハハッ、大丈夫だ！俺も從卒に困っていたんだ、悪い様にはしない。」

「大人の遊びも教えてやるぞ坊主！」

「その御方はチェルヴィーノ侯爵家の御子息よ!!」

「……何だって？」

「…重ね重ね申し訳ない事をした」

「いや、気にしないでください」

オリビエロから平伏されて謝罪をされた。気にしていないので頭上げてください。むしろ周りの視線が迷惑です。的な事を言った。2m近い人が頭下げると逆にそっちが威圧感あるわ。

「俺は弟と折り合いが悪くてな、店や兵舎とかで寝ているんだよ。じゃあ、俺は店に行くわ……2人共、元気でやれよ」

そう言ってオリビエロは歓楽街へ消えて行った。

「さ、私達も屋敷に戻りますか」

ブレンダーノの郊外を西へ向けて馬車は進む。都会も良いけど住み慣れた地を思いはせると高揚する。

「ヴィットーリオ、それは何だね？」

「ベルベットのクッションですよ。馬車の振動を和らげるために購入したのです」

「そうか、確かにこの振動は慣れぬものがあるな」

「父上、お使いになりますか？ 私は平気ですので…」

「済まぬな、実は最近、腰が痛むようになってきたのだ」

うむ……これは確かに楽である。と父上が言っている。父に1つの箱を差し出す。

「本当は、屋敷に戻るまで秘密にしようと考えたのですが先に渡しますね」

箱の中には一本のブランデーが入っていた。店で買い求めた奴だ。

「私は味が分からないので店の人にお勧めを選んで貰いました。私が飲めるようになったら開けましょう」

私の言葉に父上は鼻柱を押さえ「そうか、そうか」と言っていた。

親父と酒盛りを交わす、前世では余り実現できなかったが、この世界なら、実現できるだろう。

遠くは無い未来に、夢をはせた親子を乗せた馬車は、故郷への道を進んでいくのだった。

## 第5話 ブレンダーノにて（後書き）

### 解説

ポトラッチ

ネイティブ・アメリカンの風習で、相手に贈り物を送り、相手はそれよりも多い対価を返礼する。これを繰り返して最終的に礼が出来なくなった方が負け。ちなみに、対ギアノ戦争で送り届けられた品は、交易先には賄賂を、相手の船舶には鉛玉を互いにプレゼントしていた。

民族衣装の青いズボン

デニムの事。ウォードと呼ばれるアブラナ科の藍の染料を使った。発行させて染めるので悪臭がする。

## 第6話 北の魔術師

私は11歳になった。

この二年色々な事が起きた。国家レベルとしては、帝国の皇帝陛下が崩御した。それをきっかけに、史実のユトランド半島にあたる地域が、独立戦争を起こして新国家を樹立した。「ダンヴィルク共和国」だ。

鎮圧に向かった帝国軍は、敗北を喫した。ノルマン王国の支援があったらしい。北海とバルト海を隔てる地点の新国家に周辺諸国は警戒している。

さらに、帝国の影響力の低下を見た北部の貴族領がゲルマニア連邦を成立させた。

史実のプロイセンの辺りだ。今のところは帝国の属国としての立場を表明しているが、何れ独立を起こすのは明白。文句を言えない帝国の立場大きさがそれを物語っている。

ブレンダーノは大方の予想通りにラグーナⅡヴァレリア同盟に喧嘩売った。

全体的にブレンダーノが押しまくって責め立てたものの、ヴァレリア首都の攻略戦には失敗して退却した。

海上の戦いはどちらも貿易路の確保に終始し、目立った大きな海戦は発生していない。だが、全体的なダメージとしては、商船を襲撃されたラグーナの方が大きいと言える。



この結果を以ってブレンダーノは講和を要請した。ヴァレリアに領土の一部割譲と賠償金いちぶかつじょうばいしょうきんを請求した。元々、戦う気の少ないラグーナは了承、賠償金を肩代わりするとヴァレリアを説得し、ラグーナに同盟解消されたらいよいよ終わりのヴァレリアは講和を呑んだ。

大陸の戦線はアレクサンドル王太子率いる軍が、大陸からメシマズを追い散らすべく攻勢を掛けていたのだが、本土の援軍を得たケルティック軍に押し返され、結局は元の線に戻った。……何度やれば気が済むのだ？

我が国も幾つか変化がある、エリザベッタさんが懐妊した、今度は男の子だと良いけど。

後は、ブルドン先生が、帝国大学の教授に再度要請されて、2度は断れず帝都へ旅立たれた。兄上は執務室で書類に埋もれている。私も勉強がはかどらない。恨むぞ、新皇帝陛下。

そしてグリエルモがルグドーナ管区大司教に昇格し栄転して行った。

転勤の知らせを受けた時は白目向いて昏倒した。そんなに嬉しかったか。

別れる時も絹のハンカチを噛みしめていた。高いんだぞソレ、破れたらどうする。

「いたらうるさい御方でしたが、いないと寂しいですよねえ」

ジョルジョお前は元気でやれよ。その絹のハンカチ似合ってるぞ

……2重の意味で。

新しく転任してきた司教はとても“物分かり”の良い人物でエイトリの事を認めてくれた。どういう説得かはあえて説明しないが、私の所有する金貨の袋が一つ減ったといっておく。

「さて、今日も街へと出るとしますか」

本を閉じると、俺は何時ものように、ホーズと呼ばれる白麻のズボンを履きベルトを締め、上にチュニックを着込む、亜麻色のシュールコーを着込めば何処から見ても平民だ。

護身用のナイフを装着しショートソードを佩く、今日は少し街の外まで馬で駆けるので銃も持って行こうか……態々、平民の服に着替える事も無かったな、まあいいか。

「行くぞ、ロシナンテ」

ロシナンテは初めて乗ったロバではなく、大型のペルシュロンだ。つまり2代目ロシナンテである。ちなみに3代目は「木村嘉夫」と名付ける予定だ。

郊外に向かって駆ける。顔にあたる風が気持ち良い。馬も従順だから快適に駆けられる。

ペルシュロンは大人しい気性の大形馬で、足は遅いが農耕馬や重

装騎士が愛用する力の強い馬だ。体重はサラブレットから見ると倍の1t位ある。小型の普通車と同じ位だ。

この馬に数十kgの鎧を着た人間が槍持って突っ込んでくるのだ。だから重装騎士の突進を押し留めるのは難しい。中世が騎士の時代であった理由の一つだ。

「だいぶ早駆けが巧くなりましたな」

「有難うジョルジョ。でも馬が優秀だからだよ」

「またまた、御謙遜を……」

この馬は、乗馬を遣りたいとせがんだ時に、偶々居た祖父がガウルから送ってくれた名馬だ。非常に従順な性格なのでこの馬なら、と父も許可してくれた。

……これがサラブレッドなら叩き落とされるのがオチだろうな。

「ん、あれは何だろう？」

「どうしましたか。坊っちゃん」

私は遠駆けした時に現在地点が分かるよう、幾つかの目印を付けているのだが、

その一つの大木の下に白い何かが映った。

「……この位置だと分かりませんか」

「行こう、ジョルジョ！」

近づくにつれ、それが何であるか見えてきた。白い何かはローブを着た痩せた老人だった。その老人は、木の洞にもたれ掛かって目を閉じていた。

「また、行き倒れか……」

「その様ですな」

何処かの赤毛のドワーフの出会いと光景が重なる。私はどうして変な事に巻き込まれる事が多いのだ？

「御老人、大丈夫ですか？」

私はその老人に声を掛ける。非常に痩せている……枯れ木の様だ、アイスマンか？

「反応ありませんな。亡骸でしょうか？」

老人の肩に触れると、電撃の様な物が走った。思わず飛び退く

「なッ！」

「坊っちゃん！」

すると、老人はカッと目を見開いた……生きていたのか。

「……防御術式を無効化する魔術。聖堂騎士か？」

老人の言葉はケルティック語だった。少し独特な訛りがある様だが、間違いない。

またこの展開だ、私は変わった老人ばかり好かれる。同年代の友人は未だに居ない。

「申し訳ありません。何やら行き倒れて居るようでしたので、心配で声を掛けさせていただきました」

「……綺麗なケルティック語だ。貴殿も御同輩か？」

「いえ、この地の人間です。ケルティックは一度も行った事はありません」

「…左様か、瞑想を妨害する所業許しがたき事……だが、異郷の民なら仕方ない。許す」

「もしかしてドルイドの方でしょうか？」

「……遥か昔はそのような地位に居た」

ドルイドとはケルティックの聖職者で十字教の司教みたいな存在だ。

「もしかして、他国を遍歴しているのですか？」

「……左様、この場のパワースポットたる、大樹で英気を撫養していた」

「それは、妨害して申し訳ありませんでした」

「……その謝罪受け入れよう」

「……貴殿に質疑をよいか？」

「…何でしょうか？」

「……我が結界破る事。難いはず、如何にして裂いた？」

「…恐らく私が持つ指輪に吸収されたのですね」

エイトリ謹製の指輪のお陰だろう、これには有害な魔法を吸収する効果がある。

「……玩味がんみして構わぬか？」  
「どうぞ」

左手を差しだすと、老人はその手に節くれだった木の杖を当てて何かを唱える。

その光景を見たジョルジョが剣に手を掛けるのを制止する。

「大丈夫だ、害は無い。」

「しかし！異教の術をッ……」

異教徒と交流するならまだしも、その術を受けるのは教義上の御法度である。

バレたら間違い無く地獄行きレベルだ。あくまで教義上だが

「……エイトリの件で今更だろう。地獄まで従ってくれるか？」

ジョルジュは押し黙った……なあに悪い事にはならないさ。

————私は一度その地獄とやらへ行ったこと有るからな。

「……秀逸しゅういつな逸品いっぴん。この物は如何にして求めた？」

私はエイトリの出会いと、その後について説明した。

「……十字の民にしては珍奇ちんきな鷹揚おうよう……その達観たっかん、如何にして得た？」

知りたいか、宗教家？一度深淵しんえんを覗いた人間として教えてやろう。

全て真実を語るつもりはないが、ジョルジョには言葉が分からないのが幸いだ。

「……幼少期に池に転落して生死を彷徨いました。その間、闇の中に居ましたが天国なんて在りませんでしたね。ただ闇があるだけです」

「闇の中では、思考は出来ませんが、体を動かしたり発声したりは一切出来ません」

私は老人に語りながら、額に掌を当て前髪を握りしめる。

「……気が狂いますよ？意思を表現できないのは。……悲しいですよ？時間という概念でさえ狂ってきます。私が人間という存在であった事さえ忘れそうでした」

「まだ私が現世に居る以上は救う者、つまり神は存在するのでしょう、それは信仰します」

「ですが人間はその死後、天国なんてところには行きません。待っているのは何もない闇の世界です」

「……だから、人間として生きる一秒は砂金より貴重なのでしょうね」

「……其れが貴殿の生き急ぐ所以か」  
「生き……急ぐ？」

「左様、年齢に見合わぬ才気、知識、向上心の源……貴殿が貴殿で

ある由」

「……分かるのですか？」

「言動、身体、魔力、挙動、空気……永い時を過せば交流無くとも概観<sup>がいかん</sup>で理解できる」

「……卿の望みは英知、以て何を望む」

「理由ですか…」

理由か……とくに考えた事は無いが。

「——知りたいから知る。それだけです」

「……我が英知を知る覚悟はあるか？」

ドルイドの魔法か……それを覚えたら後には退けないだろう。発覚すれば立場上火刑だ。

だが、私の答えは決まっている。

「勿論あります、知識は人間が持つ特権です。それに教義に合致しない、異教徒の教えを乞う程度で地獄に落とすが神ならば——私は神を嗤<sup>わら</sup>って地獄へ行くでしょう」

「……了承した」

私と老人との会話が途切れると、ジョルジョがためらいがちに話しかけて来た。



「……坊っちゃん、一体何を話していたのです？」

ああ、ジョルジョの存在を忘れていた。彼にはごまかしが出来ないな。

「ジョルジョ、私は彼に教えを乞う……私は万物を知りたい、その考えは十字教の教義だけでは無い」

「……………」

「ジョルジョ、父上に知らせたくば、致すが良い……暇を出す、今までご苦労だった」

どれ程の時が経ったであろう、私とジョルジョは互いに視線を交わしていた。

やがて、ジョルジョが目を閉じると、首を振った。

「……いつか、こうなるかと思っていましたよ」

「坊っちゃんは、昔からそうでした。皆は坊っちゃんの知識を褒め称えますが、私には知識の量よりも、その思考と行動力の方が驚かされます」

突然、ジョルジョは私に頭を垂れ、崇敬の姿勢を取り誓った。

「この、ジョルジョ・シモーネ・ニコシアは、ヴィットーリオ・ミケーレ・デイ・チェルヴィーノに永遠の忠誠を誓い、枢機すうぎを守り、終末の日の審判で地獄に落とされようとも、彼の者に従い、追従する事を誓約する」

「……私が、この宣誓せんせいを破棄する事があれば、甘んじて地獄の炎に

焼き尽されるであろう……Amen.

「……ジョルジョ」

私が言葉を失っていると、ジョルジョは悪戯に成功したような無垢な笑顔を見せた

「これで我等は一心同体だ……地獄まで従いますよ。坊っちゃん」

「……談義は決したか、決断は如何に」

主従の答えは一つだった。

「老師の教えを乞います。従者も秘密を守るそうです」

「……その信頼、見事なり」

「師よ、その尊名お聞かせ願いますか？」

「我が名はロバート・クリフォード。樹精と石精の魔術師」

こうして私は異教の術を学ぶことになった。

## 第6話 北の魔術師（後書き）

解説

2重の意味で

小説版ゴッドファーザーでマクルスキー警部に殴打されて顎を碎かれたマイケル・コルレオーネが傷口を隠すために絹のハンカチを愛用した。

木村嘉夫

昔放送されていたテレビ「雷波少年」で出てきたロバ「ロシナンテ」の本名。職業はテレビ司会者。CDデビューも果たしている。

## 第7話 結婚

1332年初夏、私は12歳になり、いよいよ将来について検討する時期が来た。

私の今後としては、貴族になるか、聖職者となるか、家を出て遍歴の選択があるが、事情により答えは絞られてくる。

聖職者については……ありえない。貴族の次男の選択肢としてはよくある話だが、私が異教の術を使える事が発覚する可能性があるし、何よりこの世界で“魔法使い”になるのは御免だ：私だって結婚したい。

次に遍歴騎士の道である。これは家を出て行き、他国へと仕官の道を求めると言う事だ。

これもありえない。家を出たという知らせを受ければ、メリヴェールの爺さんが縄で拘束して自領に連れていくだろう。

消去法で貴族になるという事だが、これが現状で一番現実的である。分家を興しその当主になるのだ。

ちなみに昨年、兄上に生まれた子供は、男子でトンマーゾと名付けられた。侯爵家の世継ぎ誕生で、将来は安泰である。

そして私は、父上に大学への進学を希望した。この世界の大学は、

初等教育を修了後に入学するのではなく、著名人の推薦状と試験に合格すれば入学できる制度だ。

この近隣都市にも幾つかの大学がある。特に有名どころはモンペール大学、マッシリア神学校、ウォルシニ大学、パタヴィーニ大学等がある。

……だが、私はあえて帝国大学に留学する事に決めた。

帝国大学はフランク帝国の帝都にある大学でこの世界の学府の最高峰だ。

基礎学芸は勿論の事、神学、法学、哲学、歴史、医学、数学以外にも、武術、軍事学や、近年は、教会魔法“以外”の魔法も教えているとの事。

信仰心の厚い人が多いガウルやこの周辺から見れば信じられない事だな……

さらに、平民にも多く門戸開放して、卒業すれば官僚として就職できる。

授業料も奨学金制度の様なものが在ったり、官僚に就職することを条件に免除する制度がある。

現代に近い制度だ……文化“だけ”は一流と言うのは本当だったんだな。

特に平民に広く門戸を開いているという点が素晴らしい。他の大  
学でも平民の

入学を認めている所は在るが、奨学金を出してまで呼び寄せると言  
う事は無いだろう。

この点を視る限り、校風は自由なのだろう。異教の魔法を学べる  
という点も素晴らしい。何よりあそこにはブルドン先生が居る、中  
途半端になった言語学を学べるだろう。

しかし、これだけ優れた制度を持っているのに、何故あの国は二  
流国なのだ？

やっぱり上が腐ってるのか？……今の宰相は、現皇帝の幼少の遊  
び相手っていうしな。

「坊っちゃん、旦那さまがお呼びです」

「判った、今行くよ」

居間へ行くと、家族全員とエイトリが集結していた。何があった  
のだろう？

「おお、来たかヴィットーリオ」

「父上、御呼びでしょうか？」

「……エイトリよ、例の物を」

エイトリが持ってきたのは5つの金細工の首飾りであった。

その繊細な技巧はさすがドワーフ、と言わしめるものがあつた。

ペンダントの部分には、チェルヴィーノ侯国の紋章「剣を折る鉄  
槌」が描き込まれ、その下には「F o e d e r e e t R e l i

gion Tenemur」(我等、法と神によって守られん)と記載されていた。

「この紋章を一家全員が持つ良い…」

首飾りを家族五人が身に付ける、それを確認すると父が語った。

「……我ら家族は、王侯貴族には珍しいほどの親密さを持つ。

ベルガ王国など王子同士が殺し合いをしている、私はそれを見たくないのだ。」

「皆、この紋章に誓いなさい。この紋章を持つ者は末永く愛する、と」

「皆、家族で愛し合いなさい。親族で殺し合う事は決して起こしてはならない」

皆が頷く。態々、確認するまでも無い事だ。

「マリア・クリステイナ、お前は明日には他国へと嫁ぐ。時として元の家族と争う事もあるだろう」

「だが、その時はこの紋章を思い出せ。“私が汝を愛したように、互いを愛し合いなさい”」

(ヨハネの福音書 第13章34節)

「……はい、お父様」

姉さまは目元を濡らし、震える声で、しかし、はっきりと断言した。

その様子に父上は目を細め、満足げに微笑んだ。

「……皆、呼び出してすまなかったな、もう遅いので休みなさい」

ああ、私はこの世界、この家族の元に産まれた事を天に感謝しよう。

この瞬間に立ち会えただけでも、再度、命を繋いだ甲斐があった。

――この幸せを破壊する者は、私は決して許さないだろう。

さて、明日はいよいよガウルに向けて旅立つ日だ。幸福を、天に感謝して寝よう。

「ヴィットーリオ、準備は出来たの？行きますよ」

「はい母上」

「お前が買い求めてくれたショールは、私の自慢の品。式典に着て行くつもりです」

「有り難うございます。母上」

「あの子は悪戯好きで、本当に手が掛かった。しかし、居なくなると思うと、寂しいものですね…」

「……そうですね。母上」

「お前を育てるのが一番楽だった、いつそお前が娘で、あの子が男なら良かったのに……」

母上が、感慨に耽っていると、扉が開き、母付きの侍従が入ってきた。



「……奥様、ご準備は」

「すぐに参りますわ。コジモに後の事を頼む、と伝えておきなさい」  
「はっ」

「ヴィットーリオ、皆が待ってます、参りますよ」

本来なら母上は、家で荘園や内政を見なければ為らない。

しかし、縁戚のカペロット伯爵に任せて来た為、娘の晴れ姿を観る事が出来るのだ。

それ以外にも、家族全員で来訪するという事はガウルへの信頼を示すと言う事だ。

と言うのも、近年ブレンダーノの覇権主義に対抗するためにガウルの力を示して牽制すると言う意味合いが在るのだ。

他にも私が帝国大学に留学すると言う事に、ガウルが若干不快感を示した。

「なぜ、我が国最高峰のルテティア大学に留学せずに、帝国なんぞに行くのだ」

と、難癖付けてくるのだ。

馬鹿じゃないのか？あんな最前線に近い大学なんかに行って陥落して捕虜になったらどーすんだ？政府機能をサン・ベニーニュに移す位、幾度となく戦闘が起こっているのだぞ。

家族も同じ考えだったらしく、私の拒否に何の反対も無かった。

メリヴェールの街は、ギマーシユ湖の畔にある街だ。街を走る運河の傍に立つ建物が、かのラグーナと似た光景である。自然豊かなこの地は、別荘とか建てたり避暑地には最適かも知れない……私は見慣れているが。

家畜や葡萄畑が多く、チーズやワインが名産で、買い付けに訪れる商人も多い。

飲兵衛には堪らない所だろう。

この世界の貴族の結婚は、妻側の実家が夫側の実家へ、持参金を納めるのが通例である。我が家も当然、今回の結婚にあたり持参金を納める。家の爵位や権勢でその額は違ってくるが、今回は六万ドゥカートを用意した。庶民の年収の600倍の額になる。

ちなみに、候国の年収は80万ドゥカートほどである。小国にしては大きい経済力だ。

それだけ多くの武具や関税で儲けていると言う事だ。

結婚式は教会の横の庭園で行われる。聖堂は神聖な場所で、その中で乱痴気騒ぎをしようものなら、即刻破門である。日本の寺と同じだ。よってパーティは庭園で行われる。

本来なら結婚式の40日前に婚約式を行い、その後初めて結婚式となる訳だが、そこまで国を空けられないので省略される。貴族ではこういう事もある。

披露宴が始まり、各国の貴族や王侯などがお祝いに集まっている。外交上も重要な式典になるだろう。

その証拠に、父上の元には、ガウル貴族が多数話しかけてきている様だ。

「ヴィットーリオ、覚えておきなさい。あそこに居るのが、アレクサンドル王太子だ」

兄上が耳打ちする、その男は金髪の長髪をリボンで纏め、羽飾りの付いたビロードのベレー帽を被り、その二重の瞼と大きな唇が、生来の尊大さを表していた。

服装は、筋肉質な体を、金糸で飾られたプールポワンを着飾り、大きく膨らんだ緞子の脚衣は切れ込みが入り、裏地を覗かせていた。ダマスク織の肩掛クロークを風になびかせる姿は、一見すると喜劇役者のようにも見えるが、気品のあるその人物が纏うと、壮麗な風体に見えるから不思議なものだ。

「国王陛下は、本日出席していない。おおかた、愛妾と宮殿に籠っているのだろう」

兄上が眉をひそめる。さすが父上と共に政務をこなしているだけあって、各国の要人について詳しい。

「今父上に話しかけて来たのが、ジャルダン元帥だ。古代グラエキア趣味で、ガウルでも主戦派のトップ……我が国は良質な鉄の産地

だ。食糧が戦争の血液なら、鉄は骨格だ。機嫌を取って、有利な条件で流してもらおう、という魂胆だろう」

ジャルダン元帥はトーガと呼ばれる紫色の服と、月桂樹の冠、皮革で造られたサンダルは金で装飾されていた。トーガは一枚の布から造る事が出来るので、安価な様に思えるが、その布地は絹である上に、貝紫から取れる染料は非常に高価で、その昔は皇帝のみ許された色として珍重されていた。

「兄上…ここは、いつから仮面舞踏会バル・マスケの開催地になったのですか？」  
「…間違っても聞こえるように言うな？主戦派はガウル的主流だ。あんなのでも国への影響力は絶大だ。特に奴は、軍歴ではなく金貨の量で、元帥まで昇格したと言われているのだ」

「判っていますよ、兄上も結構言いますね」  
「…お前程では無いがな。現在のガウルガウルの首脳は、ド・サンズー侍従長・ジャルダン元帥・愛妾のコストンヌ侯爵夫人で動かされているのだ、宰相のモントルイユ伯爵はお飾りにされている」

…とんだビック3だな。そりゃ、ケルティックに押し込まれるわ。

「これは、これはフェルディナンド殿、ご機嫌麗しゅう」  
巻き毛の鬘かつらの老人が話しかけて来た。典型的な18世紀前半のフランス貴族の風体だ。時代背景無茶苦茶だな。

「あれは、アヴァリキウム侯爵だ。政治的な力は低いが、領地経営で経済的に恵まれている。友誼ゆうぎを結んで損はない」

兄上は私に耳打ちすると、その老人の元へ歩いて行った。

給仕から果実酒を受け取る、最近では度数の低いものなら飲めるようになった。

ブランデー、グラッパ、ウィスキーとかだったら楽に死ねるが……

ちなみに彼ら給仕係は、平民の使用人ではなく、下級貴族の次男等だ。

権力者に近づく機会が多いので、以外にも人気職だったらしい。

「では一番！アルセーヌ、一気するぞい！！」

……相変わらず元気な爺さんだな。久々に合ったベルナル叔父さんは、

白いものが増えているな……人間歳を取っていく、ということか。

「やあ、ヴィットーリオくん」

「お久しぶりです。クレマンさん」

姉さんの結婚相手のクレマン・ユーク・ジャック・ド・メリヴェールだ。

少し気弱な性格をしている人だ。小さい頃から家を訪れる度に、姉さまに構ってくる。

まあ性格上、直接口にはしてなかったが、バレバレでしたぜ。今回の件は本壊だろう。

……兄上には激しく恨まれたが。

「ヴィットーリオ君が、もう少し年上なら、同じ大学に通えたのにねえ……」

「そうですね、クレマンさんが居たなら、モンペール大学に留学したかもしれませんね」

モンペール大学は南ガウルのモンペールの街に有る大学だ。沿岸都市でも有り、地中海への貿易港にもなっていて活気に満ち溢れている。兄上もこの大学の出身だ。

「帝国大学を目指すって聞いたよ、何を修得するつもりだい？」

「やはり言語学ですね。後は歴史を学びたいと」

「僕と違って頭が良いからねー、僕はエトルリア語を修得するのでさえ難儀したよ」

「ヴいとーりにーさま、ぎゅー！」

「わわっ！」

幼女にタックルされてバランスを崩す私。

「もう、駄目じゃないのマルゲリータ！」

「うわああん、かーさま怒った！」

我が姪マルゲリータだ。兄上譲りの漆黒の瞳と義姉上譲りの美貌を持つ幼女だ。

将来の美人さん候補ナンバーワンだ、このまま育てよ。

「本来の三歳児とは、あれが正常なのだろうな」

「……兄上」

「あの頃のお前は、既にガウル語を修得していたぞ…大学に通っている私より速くだ」

兄上が苦笑している。目元が赤い、酔っているのか？酒豪なのに。

「……クレマン」

「はっ、はい義兄上！」

「……妹を頼むぞ」

一言呟くと、背を向けて歩き出した。去り際に振り向いて一言

「…泣かせたら、マジ、ブ・ツ・コ・ロす、からな？」

最高の笑顔だった。あーあ、クレマンさん、フリーズしてるよ。

「ヴィットーリオ！」

「姉さま、ご結婚おめでとうございます」

姉さま……本当に美しくなられた、昔のお転婆が嘘のような美女に成長なさった。

「もう、あなたと一緒に暮らせなくなるわね…」

……姉さま、そのような悲しい顔をなさらないで下さい。

……姉さま、私は姉さまに幸せになってほしいのです。

「覚えている？小さい頃は、貴方と一緒に庭の花を摘んだりしたわ」  
「覚えております、あの時は、姉さまに絹のシャツを破かれてしまいました」

「そうだったわね、お母さまに二人して怒られたわ」

「姉さま、家族でギアーノの海へ行った時の事、覚えておりますか」

「ええ、あの時は貴方が岩場で足を切って大変でしたわ」

「あの後しばらく肉類を食べる事が出来ませんでしたね……」

「私も……よ」

「姉さま、逢えなくなっても想い出の中にその人は居ます。故国へ帰っても」

姉さまの事はいつも考えます。姉さまも、私の事を時々、想い出してはいかがでしょうか？」

「ええ、必ず……貴方に貰った手鏡、大事にするわ」

姉さまが嫁いってから2カ月、8月の中旬の事だった。

私は来年の秋、帝国大学へと受験する。帝国には知人は居ないが、義姉上の親戚筋の伯爵家に逗留する事になる。宮廷管財人のアルノルト伯爵だ。法服貴族（領地の無い貴族）で帝都の市参事会の議員でもある、つまり大学の間を利用して、帝国の宮廷で顔売って来い、と言うことらしい。実にありがたい親心だ。

帝国自体は3流国家（北部の造反でさらに実力低下）でも、その権威と言う物は馬鹿に出来ない。というか、権威が有るから今まで滅びなかった、とも言えるが……

そんな事を考えていると、父上の元に、危急の伝令を告げる使者が現れた。



父上がそれを開き見ると、目を見開き愕然としていた。  
父の反応に、よほどの事が遭ったと見た兄上が覗くと、兄上も硬直していた。

私も覗き見る。そこにはエトルリア語で以下のように記載されていた。

「ブレンダーノ公国、タウリニア共和国に宣戦布告。国境線を突破セリ」

平和な日々は終わりを告げ、歴史が始まる瞬間だった。

第1部 完

## 第8話 Eschatos 終わりの時

タウリニア共和国に、コルモヴィーコという街が有る。全てはこの街が発端だった。

この街は、ブレンダーノとギアーノの丁度中間地点に有り、両国の陸上交易の重要拠点で、その関税などで大変栄えていた。というのも近年、ブレンダーノ公国は小麦やワイン、高級織物を、ギアーノ経由でガウルに売りさばっていた。

これを見たコルモヴィーゴ領主はブレンダーノへの妨害の為、関税を高く引き上げた。その為、別ルートへの迂回や、チエルヴィーノ、ヘルヴェティア連邦経由の陸上交易へとシフトして行った。

これに激怒したのが、ギアーノ共和国及び、コルモヴィーコの商工会だ。前者は海上交易の利益減少、後者は陸路輸送の商人の消費減だ。両者は反乱を企て、成功し、領主一家の首が城門に晒される事態に至った。

当然、共和国政府は討伐軍を派遣する。

しかし、共和国軍が街に到達したときには、城壁にはギアーノ国旗が靡いていた。

「アルタータ司令官、如何なさいますか？」

「…攻撃だ！投石機を組み立てろ、梯子を作成するのだ！」

「了解しました！」

「投石機、梯子の作成終わりました」

「よし、反乱軍を許すな！攻撃開始！」

多少の増援を得たとて、所詮は反乱を起こした市民が中心。プロの市民ではあるが、プロの傭兵と騎士から編成された軍にかなうはずも無く、数時間で城壁が占領されかけた……その時。

「ギアーノの奴等も情けない奴らだよなあ……野郎共！連中の背中はガラ空きだ。」

一番多くの敵を倒した部隊全員に、娼館で豪遊させてやるぞ！」

「Si！Capo Oliviero！」（了解、オリビエロ親分！）

「しっ、司令官閣下！敵の増援部隊です……あれは、ブレンダーノ軍！」

「なんだと！ええい、攻城戦を中断して迎え討て！」

マルガリオ將軍率いるブレンダーノ軍が、背後より猛攻撃を掛ける。討伐軍は、なまじ城壁に集中していた為、逃げるに逃げれず、司令官以下ほぼ全軍が戦死、若しくは捕虜となった。

その後、街の統治に最低限の人数を残すと、ブレンダーノ、ギアーノ連合軍は、タウリニア共和国へと雪崩れ込んでいった。

「以上が、今回の顛末で御座います」

「うむ……御苦労だった。下がってよいぞ」

伝令が下がると、強張った顔をした兄上が問いかける

「大変な事に……成りましたな。父上」

「うむ…重臣を集めて会議せねばなるまい」

「ヴィットーリオ、お前は下が……いや、考えが有る。会議に出席せよ」

暫くすると、屋敷に重臣が集まる。

遠方に居る領主や、任務で海外に居る貴族は、後ほど知らせを傳達する。

案の定、ブレンダーノとタウリニアの戦争に皆が驚愕していた。特に、親戚がブレンダーノ人のマスカーニ家の人達は蒼白になっていた。

「聞いての通りだ。我が国は、二年前にタウリニアと五年間の相互防衛条約を結んでいる。よって、ブレンダーノへ宣戦布告する事を胸に戦略を建てて欲しい」

「ガウルにも、この事態については以前に協議済みで、増援が派遣される事になっている」

「…皆の意見を聞かせて欲しい」

ざわめきが起き、あちらこちらから声が上がる。

だが、それは意見と言うより、ブレンダーノの非道をなじる暴言ばかりだった。

「皆の者、落ちつくが良い。怒りを吐いても何も変わらぬ。我こそは、と思う者は家臣を率いて戦場に出るが良い」

戦場は名誉と、報酬と、機会を得る絶好の狩り場だ。  
近年、平和な日々が続いた為、多数の貴族達が名乗りを上げる。

「うむ、これだけ集まれば、傭兵を雇わずとも十分な数が集まった。  
皆の忠義、嬉しく思う」

「カペロット」  
「はっ」

「貴殿が戦場に出れば心強いが、今回は若い皆に功を譲れ。  
卿はマリア・テレーザと共に、残ったもので領内を纏めよ」  
「……承知しました」

「カペロット老！我らが功績を立てるのを見ていて下されよ」  
「やかましいわい！」  
若い貴族の子弟が囃し立て、老伯爵が激昂し、皆に笑いが広がる。

「カッシーリ、卿も留守番だ。街の警備部隊を纏めよ。  
騎士が減る分、防備に不安が残るが、職務を果たせ」  
「お任せ下され」

「マスカーニ伯爵、息子嫁の件は残念に思う。だが世の習い。両名の補佐をせよ」  
「……ッ！承知した」

いよいよ、私にも初陣の時が来たのだろう。訓練は積んだ、後は名乗り出る勇氣だ。

「父上、私も！」  
「ヴィットーリオ、お前は残れ」

「しかし、考えがあると!」

この場に呼んだのは、出征させる為では無いのか! 私が出した勇氣はなんだ。

「……そういう意味では無い」

「これは戦争だ。我々も討ち死にするやもしれぬ。その時の為に皆に発表しておく」

「我々が討ち死にしたら、マリア・テレーザとカペロットとお前で国を護れ」

「しかし、トンマーズ公子が!」

ありえない、国を継ぐべきは兄上、そして、その直系のトンマーズ公子だ。

しかし、父上は机に拳を叩きつけて断言した。

「一歳の乳飲み子に国が護れるか!」

「…家族間の確執が気になるのであれば、トンマーズを養子にせよ。そしてマルゲリータを嫁にすれば良い……無論、成長を待ってだが」

父上の軽口に皆に笑いが広がる、あの子は3歳で、かつ姪だぞ! 誰がそんな真似するか!

「いやあ、それは目出度い。聡明<sup>そうめい</sup>なる公子殿なら、どちらも守れるでしょうな」

……失せろ、豚野郎。

「私も、あなたなら娘を任せられるわ。娘もヴィットーリオ君の事を気に入ってるようだし……そうよ! そうしましょう」

義姉上、話がややこしくなるので、黙って頂けませんか？

「いやあ、それは止めた方が宜しいでしょう。公子は来年、大学へ留学なさる、婚約者など作っておけば、真面目な公子の事です。きつと、遊びもせずに勉学をに励むでしょう。……青春時代の交遊は、人の味に深みを増す香辛料です。妨害為さらぬが宜しいですな」

ある中年貴族の発言に、場の空気が完全に解れ、会議は終了した。

数日後、軍の編成が完了したチエルヴィーノ侯国軍が、ブレンダーノのカステロ・サン・ロタリーオに向けて進軍して行った。その城は、ブレンダーノ、タウリニア、チエルヴィーノの3つの国境地点に近いブレンダーノの要塞で、この地を攻撃する体制を見せれば、ブレンダーノ軍が進撃してくると見えてる。

ブレンダーノ軍の総兵力は、多く見積もっても三万程度、しかし、各地の防衛部隊や、国境線の牽制に一万は裂く必要がある。理由は、先年の戦争で領土を奪われた、連邦、ヴァレリア、ラグーナの三国が報復戦争を仕掛けてくる可能性があるのだ。

ブレンダーノ軍の実働戦力は二万、ギアーノ軍が七千、対抗する共和国軍は、傭兵を加えても一万八千程度だ。しかし、首都に立てこもった防衛線になれば、数カ月は保つと見ている。冬になれば軍を維持できなくなり、撤退する。この時代の戦争は、冬季戦はめったに行われない。

チエルヴィーノ侯国軍は総兵力九千、数こそ少ないが花形である、

cavaliere（重装騎士）を多数備え、補佐する歩兵部隊も、訓練された石弓部隊や、連邦仕込みの斧槍部隊と質では高い編成だ。将来、軍を率いる事が有れば、テルシオ陣かマウリッツの横隊を造ってやる。

戦略は、要塞を包囲しつつ、従士の騎馬部隊を偵察として各地に散らし、ブレンダーノ軍が救援を送ってくるならば、峠まで撤退して防衛線に挑む、質では勝っている上に、候国軍は、山岳戦や森林戦は十八番だ。五分以上の戦いが出来るだろう。

相手が要塞を見捨てる場合は、ガウル軍の到着と同時に、包囲を解き、タウリニアと対峙しているブレンダーノ軍と決戦する。数も互角以上、おまけに前後に敵を構える形となる。よほど、アホな真似しなければ勝てるだろう。

最後に、タウリニアの攻撃を中断して全軍を以って、候国軍に攻めよせてきた場合は、峠に引き摺りこんで、山岳地帯を利用したゲリラ戦や撤退戦だ。犠牲は大きいだろうが、山岳地の落石用の岩の隠し場所や、それを発射するカタパルトやスコープオンを隠してある。さらに、地形を利用した野戦陣で、高所から溶けた硫黄や鉛、焼け石を御見舞いする。

突破されたら市街地でゲリラ戦だが、そうなる頃にはガウル軍が到着しているはずだ。

マジギレした我が祖父が、ブレンダーノ軍相手に猛攻撃を掛ける。撤退戦で犠牲を出している彼らが防ぎきる事は出来ないだろうし、防ぎきっても相応の犠牲が出るから、維持しきれず撤退するはず。



だが、最後についてはあまり気にする必要はない。何故か？

1、ブレンダーノの戦略目標はタウリニアだ。戦略目標を放棄してまで我が軍と

戦闘したがる戦闘馬鹿では無いだろう。

2、包囲を外せば、溜飲下げる為に馬鹿貴族が勝手に追撃するから。それで負けるブレンダーノではないが、多少の犠牲は出る。

3、我が国はタウリニアより北側、沿岸都市のギアーノからかなり離れている。

ギアーノ軍は本国防衛のために、ある程度の兵力は廻すはず。つまり兵力差は減る。

4、タウリニア軍がある程度統制が取れるなら、思い切って一万程をこっちの増援に送る。上手くいけば挟撃戦。勝敗は別として、ブレンダーノ軍は大打撃を受ける。撤退して戦略的勝利を得る。

と言う事で、よほどの事が起きない限り、今回の戦争は有利に展開するだろう

傭兵部隊を雇えば、数で匹敵する筈なのだが、父上は傭兵の存在を軽蔑しているのだ。

この時代の戦争は、行われる期間は春から秋と限定されている。その秋や初夏でさえ小麦の収穫時期になれば、互いに撤退する場合がある。そこで登場するのが傭兵部隊だ。

傭兵は個人を雇うのではなく、Condottiere（傭兵隊

長」と契約し、部隊ごと雇われるという形式だ。その数も、数人と  
いった小さな物から、国家君主が傭兵隊長であり数万の規模の兵力  
持つものまで様々である。

現実の歴史で有名なのは、ガッタメラータ、黒隊長ジョヴァンニ、  
ウルビーノ公モンテフェルトロ、ヴァレンシュタイン、ジョン・ホ  
ークウッド、アンドレア・ドーリアと…どれも、ラテン人共ばかり  
だ。

もっとも傭兵を雇うのは、資産に余裕が無ければ出来るものでは  
ない。イタリアで傭兵が発達したのも、その辺りが理由であると推  
測している。

この世界では、ヴァレリア侯カルロ・デッラ・キウージの先祖が、  
傭兵隊長から国盗りを成功させた事例がある。まあ、あの国自体が  
ラグーナの防へ…もとい、傭兵隊長みたいな物だからなあ…

武力のある者が篡奪<sup>さんだつ</sup>を狙う。下剋上<sup>げいくじょう</sup>は古来より存在するものだが、  
その前例を知っているだけに傭兵を忌避しているのだ。

父上は、良くも悪くも田舎者なのだ。家族や信頼する身内は優し  
いが、よそ者や信頼の出来ない人間には極めて排他的である。エイ  
トリが領内で生活できるのも、その技術力が高いからだけで別に信  
頼はしていない。

このタイプの人間は、他人を仲間にする時は、身内に取り込んで  
しまおうとする。婚姻政策や、養子縁組等を駆使する。親族登用主<sup>ネボテイズ</sup>  
義上<sup>モ</sup>等なのだ。親族で無いのなら、親族にしまえばよい。まる  
でハプスブルク家だ。

この考えが良いか悪いかは判断できないが、身内への面倒見は良い為、領内の貴族の団結心は強いだろう。国を少数の兵力残すだけで、遠征出来るのが理由だ。

まあ、私が考えても詮の無い事だな。

数日が経ち、季節は9月3日となった。

伝令からの情報によれば、ブレンダーノ軍は要塞を見捨てる戦略を取った。

つまり、今頃、タウリニアの首都攻防戦は熾烈しれつを極めて居るだろう。

是が非にもタウリニアを陥落させて戦争を終結させようという魂胆こんたんだ。

だが、肝心のガウル軍の到着が遅れている。そろそろ領内へ入ったという知らせが来ても良さそうなのだが……多分、大貴族の利害調整で遅れているのだろう。互いにライバル関係とか有ると、勝手な行動をしたりするからな。秀吉と勝家がいい例だ。

しかし、朗報も入った。ラグーナ共和国が国債を発行し始めたらしい。

出入りの商人経由の情報だ。国債を発行する、つまり早急に資金

調達が必要となったという事だ。

この場合は、ほぼ間違いなくブレンダーノへの宣戦布告であろう。

すぐに、この情報をカペロット伯爵に伝えた。カペロット伯も狂喜して、父上へと伝令の使者を出す。士氣の面でも良い援護になるはずだ。

夜になり、夕餉を頂くとする。母上と私の二人だけだ、数カ月前の喧騒けんそうが嘘の様だ。

尚、義姉上と子供は昨年に完成した別邸で生活しているので居ない。

夕食のメニューは、パンに、鹿肉のシチュー、祖父から送られたチーズに、マーシュやケール等のハーブサラダと、生ブドウ、レモン水だ。現代からみれば、結構な御馳走に見えるが、貴族世界からすれば相当質素である。

これは主な理由として私が、大量に作ってもどうせ食べられない。使用人に食べさせるなら、始めから別に作れよ勿体無い。と、幼いころから口酸っぱく言って来たからだ。

御蔭おかげさまで使用人には、選民主義こうまんだの、吝嗇ドケチだの、冷徹な天才児と近寄りがたい存在に思われている。下手に近寄って媚売られるのも面倒なんで放置している。実は寂しいが。

「お父様のチーズ、美味しいですわね」

「そうですね、母上」

会話が途切れると、銀器を動かす音だけが稀に響く。

「あちらでは今頃、ワイン造りが本格的に始まっているでしょう」

「ワインですか……」

「まだお前は分からないのでしたね」

「ええ、まあ、飲めるとは思いますが、父上との約束があるので」

尚、この地は万年雪のある山が近くにあるので、多くの季節を雪で冷やしたワインが楽しめる。あと一月もすればそれを楽しめるだろう。

「あの子は今、何をしているのでしょうか」

「同じ月を眺めているでしょう。どんなに土地が離れていても、同じ月です」

「お前は、吟遊詩人の才も有ったのですね」

「母上」

「何ですか？」

「母上は、この土地に嫁いだ夜、何を思いましたか？」

「……そうですね」

「私は貴族の女です。望まぬ結婚も、愛無き家庭も、政治の駒となる事も甘んじて受け入る積りでした。」

「今だから言えますが、私は当初、この結婚を望みませんでした。私には、心寄せる方が居たのです」

「ですが、理想と現実とは相反する物、私はこの婚姻を受け入れ、半ば試練に立ち向かう聖女の気持ちで、あの方に出会いました」

(――なぜ、そんな悲しい表情をするのだ?)

(……)

(…君には、想いを寄せる者が居るのかね?)

(……ッ!)

(……やはりそうか)

(……)

(……構わぬ)

(…えっ?)

(生きている限り、思い通りならん事の方が多い。問題は、自分の気持ちをいかに納得させるかだ。奪われるのと、譲り渡すのでは、結果は同じでも、気持ちは大きく違うだろう。そうは考えないかね?)

(…うふふ)

(……何がおかしい)

(今の時は、愛の睦言を囁き合うのが普通では無くて?)

(…むう、そのような戦術は訓練されていない。不可能だ)

(では私で練習なさんと如何です?)

(………私は、今日初めて君に逢った。そんな私に恋せよ、と言うのは出来まい)

(だが、私達は夫婦だ。愛を育む事は吝かでない。そうではないかね?)

(……五十点)

（ええい！どうせ私は口説き文句など出来ない田舎者だ）  
（うふふふ）（一々笑うな！）

「私は、」

「侯爵に、恋はしませんでした。ですが、夫として愛する事は出来  
ました」

「そして気が付けば、子供が生まれ、家族が増え、今では私はおば  
あさま」

「ヴィットーリオ、覚えておきなさい。」

「――A m o r   v i n c i   O m n i a .」（愛は全てに勝利す  
る）

「今日は少し疲れました。先に休みますね」

「はい、母上御休みなさいませ」

夜、寒さで目が覚める、9月には最高気温も10度を切る地だ。  
さすがに薄手の布団では寒すぎたか。

「……外が、少し騒がしいな。喧嘩かな」

街の郊外から騒ぎ声が聞こえる…警備隊がその内止めるだろう。

だが、その喧騒は収まるどころか、次第に近付いてきた。

……何かがおかしい！

すると、壺が割れるような音が、あちこちで鳴り始めた。その後、ヒュッ、カッ、トンと何かが刺さる音がした。木製の窓の扉を少し開き外を覗く。暗くてよく分からないが、そこには侯爵邸を取り囲むようにして、大勢の人間が武器を手に喊声かんせいを上げていた。

そして、松明に照らされた旗に一瞬見えた紋章は、盾地の半分に黒と白のアーミン模様が、残りの半分には、赤地に金色の鍵がマーシャリングされ、その上には王冠に巻きつく蛇と、盾を取り囲むように金の鎖が記載されていた。そして、モットーには、

“*S u m   c u i   q u e*”（それぞれに所有すべきもの）と記されていた。

「……ブレンダーノ公国の紋章！」

何故？ いったいこの地にどうして？ 等と考えてい来ると、敵の司令官と思える人物が進み出て来た。

「候国軍は全滅した！ 侯爵も、その息子も死んだ！ ヴィットーリオ公子、次は貴様だ！」

……父上が亡くなった？ ……兄上も？ ……馬鹿な、あり得ない。  
しかし、あそこに居るのは公国軍？ ……嘘だ……



「ガウル軍は来ない！峠も封鎖した。貴様等は見捨てられたのだ！」  
思考が止まる、体が動かない……扉に何か突き刺さった…火矢？  
後ろを振り向くと、部屋の扉の隙間から白い煙が流れ込んでいる  
のが確認できた。  
……まさか、さっきの割れる音は

「坊っちゃん！」

荒々しく扉を破ってきたのはジョルジョだ。

「どんな魔術を使ったかは知りませんが、ここに居る公国軍は本物です！」

「ジョルジョ……父上が……兄上が……」

声が震える、ジョルジョそんな事は嘘だろう、そう言ってくれ。

「ここに奴等の居る以上、恐らくは……」

「…そんな……な……」

「坊っちゃん、何れにしろ、この屋敷は危険です。  
奴等は油と火矢を打ちこみました。このままでは焼け死にます」

「今の坊っちゃん……いえ、ヴィットーリオ侯爵の仕事は、母君を助け出して再起を図る事です」

「……しごと…母上を……たすける?…」

「そうです閣下、その服装では危険です。外出時の民衆の服を着用なさって下さい」

「着替え終わりましたな。失礼ながら箆笥を開けさせて頂きました。金貨の袋を御持ちなさい。逃走資金に必要です」

「銃の携行は忘れずに、勿論、火薬もです」

「……ああ」

「では参りましょう。ご母君の寝室へ」

「くそッ、火の回りが早い!閣下、別の道から行きましょう」

「公国軍の連中め!屋敷から逃げ出した人間を皆殺しにしてやがる  
!」

「寝室の扉を破ります。宜しいですか?」

「……」

「…失礼いたします」

「母上」

「……いけませんよ母上、床で眠るなど、貴族の女性として果した  
なくありませんか？」

「……母上、母上…母上？ウウツ……」

「手前、いい加減にしやがれ！！」

「屋敷が焼かれるのは悲劇だ！親が殺されるのも悲劇だ！  
だがお前まで焼け死んだら、それはただの喜劇だ！」

「お前、普段の智略と行動力はどうした？」

「お前は親が殺されたから、悲嘆に暮れるだけか？」

「その程度で生きる事を放棄するか？教義いたんを恐れず、貪欲に知識を求め、

肉体を鍛え上げ、己の目的に向かって行動するお前は、その程度の人間なのか？」

「お前は、剣と天秤を持ち、己の正義を信じて悪と戦い、勝利を収める」

「それが、俺の崇敬すうけいするお前の姿ではなかったのか？」

「……はははっ、それは個人崇拜こじんそうはいって奴だよ。ジョルジョも教義を恐れないね」

「随分、思いつき殴ってくれたね…青くなってるよ」

「はん！少しばかりイイ男に整形しただけだろが」

「その言い方が、ジョルジョらしい。閣下、なんて言い出した時は、

煙でやられて気でも狂ったのかと思ったよ」

そうさ、私は何を悩んでいたんだ。時間は元に戻らない、そして運命に聞く耳はなし。

——運命という女を陥落としたければ、行動あるのみだ。

「坊っちゃん、脱出しましょう」

「いや、最後に少し待ってくれ」

母上の亡骸に近寄る、胸に抱いた手鏡を掌中する。

「：母上、司祭もオリーブ油も、最後の時を見取る事すら出来なかった愚かな息子をお許してください。」

「Agnus Dei qui tollis peccata  
mundi dona eis requiem semper  
nam」

（この世の罪を除き給う神の子羊よ、彼の者に永遠の安息を与え給え）

「……行こう、ジョルジョ」

ジョルジョは何も語らず、先導する。彼のその気遣いがあったかった。

「屋敷は、完全に包囲されています。まともに遣りあつて脱出は無理でしょう」

「翼でも作るか、ジョルジョ？……この熱では飛ぶ前に溶け落ちるぞ」

御冗談を、と言ったジョルジョが案内したのは、今では使われていない古井戸だった。

「この、枯れ井戸は底に横穴が掘られています。そこから市内へ抜けられます。元々はカルロ侯爵が、市内へ放蕩するために使ったんですがね」

ジョルジョがロープを手にする。

「今では屋敷で知ってる人なんて居ないですよ、さっ、降りましょう」

横穴を抜けて、出た穴をよじ登る。そこは薄暗い裏通りのpiazzetta（広場）だった。

ジョルジョは枯れ井戸に格子を嵌めこむと、私を手招き、先導した。

到着したのは、ジョルジョの家だった。淀んだカビ臭さに鼻を顰める、机には薄らと埃が積もっていた。古い木の椅子を、手で払うと腰を下ろす。どれだけ掃除して無いのだ？

「あー、駄目だ。葉っぱが埃だらけだ」

「安ワインで良いですかい？他に飲む物なんかねえわ」

「いや、何も要らない。それより今後の手立ては？」

「んー、暫くはここで身を隠しましょう。何がどうなってるのか、さっぱりだ」

「そうだ！義姉上を御助けしなければ！」

「止めた方が良いでしょうや。本邸をあんな手際よく襲撃したって

事は、別邸も……」

「……」

「何もわからん時は、闇雲に動くのは止しましょう」

その時、扉が激しく叩かれる。

「…本当に手際のよい事で」

「どうする？」

「……あの梯子で、屋根裏から屋根伝いに脱出して下さい」

「なんだよ、扉が壊れるじゃねえか！今開けるから、少し待ってろ！……お別れです。出来るだけ会話して、時間を稼ぎます」

「……ジョルジョ」

「…このままでは二人とも死にます…ならば、どちらかが助かるべきだ」

「ジョルジョ……さらばだ」

「……ご壮健で」

梯子を登り、屋根裏へと出る。下の方から怒号と物音が私の耳に聞こえて来た。

それを助けてやれない矮小な自分の身を呪い、力の無い自分に酷く腹が立った。





## 第9話 Passus 受難

ジョルジョの家を脱出した後、夜の街の裏通りを抜けながら考えた。

この国は滅びた。ブレンダーノ領に為るという事は、旧指導者層は徹底的に弾圧される。

民間人を利用した人狩りも起きるだろう、隠れる場所がない以上、この地に居るのは危険だ。

この国から逃げ出す必要がある。残っていても、殺されるか、傀儡<sup>かい</sup>として利用されるかのどちらかである事は、明白であった。

国境や峠は封鎖されている、また、タウリニア方面は戦場になっている。ガウルに抜ける道は、封鎖されているのだろう。どちらにしても直接行くのは難しい。

また、盗賊と化した傭兵や奴隷商人に捕まれば話にならない。

「ならば、一つだけだな」

チエルヴィーノ山脈。アルプス越えだ。史実のマッターホルン登頂記を見る限り、それを成すのは困難に思えるが、私はそんなに悲観はしていなかった。

別に登頂するわけではない、スイス側に抜けさえすれば問題ないのだ……

その後、一週間かけてマッターホルンの麓<sup>ふもと</sup>まで来た。時間がかかっているように思えるが仕方ない。可能な限り、人目を避けるために、街道沿いを避け、森林地帯を踏破<sup>とうは</sup>したのだ。

途中の村で、現地住民の服と幾度か食料を盗み出した。少しサイズが大きいのでナイフで端を切り調整する。街の住民が着るような仕立ての良い服を着ていると、身元がばれる恐れがあった。

麻袋も拝借しマントに仕立てた。この地方の服は厚手とは言え、マントが無いと夜は凍死する。服が破れるのを防ぐためにも必要だ。

まあ、銀貨を置いてきたので許してもらおう。

季節は秋 だが、山脈を見上げると積雪している。幼いころから雪道を歩き慣れているとはいえ山越えだ。この革のブーツだと足元が不安かもしれない。ああ、現代の登山ブーツが非常に欲しい。

だが無い物を強請っても仕方ない、湖で水を補給すると、道なき道に向けて登山を開始した。

予想通りだった。途中で足を滑らせて転落しそうになるアクシデントもあったが、迂回する事によって頂を突破した、視線のかなたに村が見える……ツェルマツトか？この世界にも存在したとは……

最も村が有る事は予想していた。マッターホルン超えを狙ったのも超えた先の近くに村が有るからだ。ここまで来れば追われる事は無いだろう。

だが、忘れていた。この世界が魔法もありモンスターありのファンタジーだという事を

「グゲエエエアアアッ！」

聞いた事も無いような叫び声が耳に入り後ろを振り向くと、巨大なオオワシが飛び込んでくるのが見えた。

「がッ！なんだコイツは！」

かわし切れず頭を打たれて地面に倒れる、額が切れて血が目に入り右目が見えなくなる

これがモンスターという奴か、やらなきゃやられる！

「くそっ、喰らえ！」

持っていたホイールロック式短銃を（万が一のために既に装填されている）化け物に向けてぶっ放した

———ところで、当時の拳銃の射程はどれほどの物か知っているか。

答えは、10m前後。これ以上離れると何処へ飛んでいくかわからない代物だった。

その上、鳥のような動く目標に撃ったらどうなるか。

当然——外れた

「!」

化け物は半円を描いて体当たりを喰らわせて来た。まともに衝撃を受け突き飛ばされた。

「ううっ……」

「鳥の化け物が…畜生…」

何とか立ち上がり敵を見つめる。めまいがして頭を振る。

怪鳥がこちらに向かって滑空して来る。

呼吸を整えて相手が射程に入ってきたのを見計らって剣を払う。

片目が見えないので射程を少し見誤ったが、確かな一撃を与えた。その事に満足すると急に体が、瞼が重く感じる……疲れたな、少し寝るとするか。

……誰かの声が聞こえる。まあ、何とかなるだろう。

……じゃあ、おやすみ

「おはようございます」

眼が覚めると見知らぬ部屋だった。体は自分の体だったから転生フラグは無いだろう。……もう一度赤ん坊から始めるなんて嫌過ぎる。

すると、部屋に居た知らない少女が私に気が付いたのか声をかけてきた。

「あっ、気が付いたみたいね」

栗色の髪を肩で切りそろえた白い花のような顔の少女だ。年齢は自分と同じぐらいだろう。薄い水色の大きな瞳がチャームングだ。

「あーとー……少し、待って居てね。今、人を、呼ぶから」

単語を区切るように話す少女に、ああ、そう言うことか、と思いつ話しかける。

「ありがとうございます。公用語なら話せるので心配しないでください」

りゅうちゅうなドイツ  
流暢な帝国公用語に驚く少女。やっててよかった言語学！

「そうなの！よかったー、私たちのパーティでエトルリア諸語（俗語）を話せる人居ないから。ギンター、トーマス、彼、気が付いたわよ！」

パーティ……と言うと彼女は冒険者なのか。世の中には色々な事

情が有るから、深くは問わないが。

そんな事を考えていると、部屋の扉が開き2人の人物が入ってきた。

「おおー良かった！気が付いたのか」

「傷の具合は大丈夫ですか？治癒魔法をかけたので、ほぼ完治していると思うのですが」

始めに声をかけてきた青年は金髪に緑の瞳に白い肌、典型的な北欧人だった。

顔の作りは広い額に切れ長の眉毛、大きな瞳、高い鼻……典型的なイケメンだ、滅びろ。

もう一人の青年は、おっと、こいつもイケメンだ、畜生。

髪の色は伸ばした金髪を後ろで束ね、とびいろ鴛色の瞳で細眼。

人の良さそうな笑顔を浮かべている……うん。人類の敵ですね。

そんな事をぶつぶつと考えていると。切れ長イケメンが話しかける。

「えっと……言葉、分かるかな？俺、ギョントー。」

ギョントー・シュヴァルツシルトって名前だ。歳は14。」

「あつ、すみません、帝国語なら話せます」

ギョントーはその発言に少し驚いたようだが、すぐに笑顔を浮かべた。

「そっか、宜しく」

「自己紹介が遅れたわね。私はフレイヤ。フレイヤ・ライネー。1

3歳よ」

「申し遅れました。私はトーマス・カーライル20歳です。聞いての通りケルティック人でドルイド見習いをやっています」

哺乳類イケメンキツネ目ことトーマスの挨拶を聞くと質問を投げかけた。

「皆さんに助けていただきありがとうございます。」

あの、俺がどうやって助かったのか聞いていいですか？」

「そうですね。私から説明させていただきますましょう」

それはギルドからメーベ村の怪鳥の討伐依頼を受けて戦闘中の事でした。

「フレイヤ！装填<sup>そうてん</sup>まだか！」

「うっさいわねー！少しぐらい一人で耐えなさいよ！」

ギョントーの要請にフレイヤがクロスボウのボルトを装填しながら言った。

彼女が扱うクロスボウは装填が速く済むように改造されているのだが、それでも10秒近くはかかる。

「させません！アイスカッター！」

私の魔法の援護射撃で怯む怪鳥。その隙を逃さずギョントーは叫んだ。

「んにやろう、我慢の限界だ！ほ・の・お・の剣！」

剣にマナを注ぎ込み刀身が焰に包まれる。盾を投げ捨てると両手で袈裟に斬りかかった。

「あッ、馬鹿！」

ギョンター渾身の一撃を危うく避けた怪鳥は大きく嘶くと飛んで行った。

「どーしてくれんの、この馬鹿！何であそこで斬りかかるの？」

討伐対象に逃げられたフレイヤが憤慨してギョンターに言い募る。

「隙を見せたら悪・即・斬！だろ。大体フレイの装填遅すぎ！」

「仕方ないじゃない。麻痺薬塗るのに手間取るんだから。大体、クロスボウにしたら相当速いわよ。私」

確かにそうである、普通のクロスボウは30秒に1発とかだ。改造ライトクロスボウとは言え、麻痺薬塗って10秒に1発など、どこぞの傭兵団から声が掛かってでも不思議ではない。

「まあ、失敗してしまったのは仕方ありませんね。今日は一度村に戻るとしましょう」

私が彼らを説得して、村へ戻ろうとすると銃声が聞こえた。

「なっ…何？」

「まさか、村人が！」

「急ぎましょう！」



銃声の聞こえた場所に到着すると一人の少年が怪鳥と対峙していた。

右手に剣を構え、左手には短銃を持ち、血を流し服は破れ、見るからに重傷だった。

「a q u i r a   d i a v o l o ! m o r t e !」

何か良く分からない言語を喋っていた。村人じゃないのか？服装はいかにも村人だが…

怪鳥が少年に向かって突っ込んでいく。少年は剣を掲げてじっと待っていた。

……刺し違えるつもりか？いけない！

「フレイヤさん！クロスボウで麻痺を。ギンター君！少し時間を稼いでください」

少年は怪鳥に一撃を与えたようだ……しかし、浅い。致命傷までは至らず、勢いのまま突進され飛ばされて倒れる少年。追撃しようとした怪鳥に、ギンターが斬りかかる。かわして空中へ逃げようとした怪鳥に、フレイヤの矢が命中して地面に叩き落とされる。

「わたし特製シビレタケの麻痺薬。その辺の麻痺薬と違って効果は折り紙つきよー」

笑顔で地面に叩き落とされた敵を見る少女。その顔はとってもやり遂げた感がある。

……これが無ければ、もう少し可愛げが出るのですが。

「今です！アイスランス！」

詠唱していた魔法を発動させる。氷の矢が怪鳥の羽を貫く……もう飛んで逃げる事は出来ない。

「ギウンター君！」

「おう、今度こそ！ほ・の・おの剣！！」

ギウンターが怪鳥の首を斬りおとす。これを持っていけば依頼達成だ。

しかし、今は少年の容体の方が気になる。

幸い、命には別条はないようだ。出血と疲労から気を失ったようだ。しかも良く見ると

気品のある顔立ちだ……先程の銃といい、この顔立ちといい猟師の息子等というのは有りえない。保護して話を聞かねば……

「ねえ、この男の子大丈夫なの？」

「命に別条は有りません。ですが、出血は多いですね。宿に連れ帰って治療しましょう」

「それがいいわ。ギウンター、あんたが背負いなさい」

「うげッ「げ！じゃないでしょう。元を正せばあんたが先走ったのが原因なんだからねッ！」

「むう……悪かったよ」

「では、彼の荷物は私が持ちますので、フレイヤさんには警戒をお願いします」

こうして私たちは気を失った少年を背負ってメーベ村へと帰還し

ました。

村に帰還すると、怪鳥の脅威から解放された村人たちが歓迎してくれる。少年については誰も知らない。と口を揃えて言っていた。宿に連れ帰って治療してみると、幾つかの事が分かりました。

まず、体つき。年齢に比べてしっかりしている。すなわち栄養豊かな環境で育ったという事だ。体も筋肉が程良く付いている。武術の経験は有るのだろう。しかし、体には大きな傷は無い。山育ちなら多かれ少なかれ怪我をする。この点から、山育ちの少年という説は消えます。

次に持ち物。ホイールロック式銃：最新式の短銃だ。軍隊でも配備しきれていないし価格も非常に高価だ。それに装飾も付いている。これだけで金貨数枚の価格はするだろう。

持っていた剣は一般的なものです。行商人が護身用に持っている程度の剣。

そしてかばんの中にあった服。平民用の服とシルクのシャツとズボン。

平民はまずシルクなんて着ませんね。羊毛か亜麻、近年はいつてくるようになった木綿の何れいすかです。

更に一番の謎は、数百枚の金貨の入った袋と、指にはめられた指輪。発動体ですね。

そして、手鏡と、豪華な装飾と宝石で彩られた紋章の入った首飾り。

——聞いていいですか。君は何者ですか？

私は見事な推論に感心していると、トーマスは続けていった。

「ま、大方は予想付きますけどね。家出した貴族の子弟。違いますか？」

トーマスの目つきは鋭くなり、諭すように言った。

「悪い事は言いません。家に帰りなさい。この世界はあなたが想像しているほど

甘い世界では有りません、君にも帰りを待つ両親や兄弟が居るのでしょう」

「ちょっとトーマス、言い過ぎじゃ……」

何かを言いかけるギンターを手で制すとトーマスは続けた。

「ギンター君の事情と彼の事情は違います。言わせて下さい。はつきり言って迷惑です。命を落とす前に帰りなさい。家までは送ります」

彼の言葉に部屋はしん、と静まり返る。

「確かに、このまま行けば命を落とすだろう——だが」

私はこれまでの事情を話した。侯爵家の次男である事、戦争で家族を失った事、命を張って助けてくれた老人を見捨てて逃げ出した事、森林を踏破し、盗みを働いてまでこの地までたどり着いた事。話をしていると涙が出てきた。

家族が亡くなった時には涙が出てこなかったが、今になって初めて泣いたのだ。

——そして、家族を、家を、国を、自分のすべてを奪ったあの男に！ブレンダーノ公に激しい恨みが募った

「帰る家など既に無いッ！この上はアメデオの奴に復讐してやる！奴に家族の受けた以上の苦痛を与えてやる！溶けた鉛を背中に掛け、焼けた鉄のブーツで踊らせてやる！やっここで歯を引き抜き、眼球に酸をかけて、滑車で腸を引き摺り殺して、殺して、殺してッ！！」

途中からエトルリア諸語で語っていた為に、彼らには、私の発言の始めしか理解できないはずだ。

だが、いつの時代も、愛の囁きと暴言には国境は無い。それはこの世界でも同じらしく、私の発言の粗方の意味は、彼らに通じたようだった。

……一頻りの怒りと悲しみを言葉にして吐露すると悲しみが少しは紛れた。

肩で息をする私を皆が慰めてくれる。

「その公爵の奴は相当な根性悪だぜ！それまでも散々民衆を弾圧していたらしいじゃねえか。その上、反乱を起こさせて家族ごと焼き殺すなんて、皇帝陛下の爪の垢でも飲みやがれ！」

「大変だったね。もう大丈夫よ、ここまで来れば兵隊だって追って

来られないわ」

「……そのような事情とは、知らずには言え、勝手な暴言を語り、申し訳ありませんでした」

「魔法で治癒されているとはいえ、体はまだ治りきっていないはず、この部屋は貴方のために借りています。今日は早い所体を休めた方がよいでしょう」

「――悲しみを癒すには時間と愛情です。今はたっぷりと寝て、少しでも心を癒してください」

初対面の人間をここまで慰めてくれるとは、彼らは信じての良い善人なのだろう。

荷物だけ奪って放り出される事だって、あり得た事態なのだろうから。

――どうか、この先に出会う人間も、彼らのような善き人ばかりでありますように。

転生してより多少は信仰するようになった主の存在に、私は祈りをささげると、意識を闇へと落とした。

## 第9話 P a s s u s 受難（後書き）

### 解説

マチェット ジェイソン・ボーヒーズ愛用の武器 刃先が重く、軽い力で大きな打撃を与えられる。草や枝を薙ぎ払ったり、動物の解体やゾンビの頭をカチ割ったりも出来る万能兵器。

## 第10話 X? plasma 聖なる恩寵

朝、眼が覚めると体の痛みは残っていなかった。平民用の服に着替え、剣を吊るし一階に降りる。

一階に降りると、宿の親父さんが、坊主大丈夫だったか?と声をかける。

ええ、トーマスさんの治療で完治しましたと返すと、身元についてあれこれ聞いて来る。

適当に嘘を並べ立て、裏庭で剣の練習をして良いですか?と聞くと

「ああ、いいぜ魔物に喰われるなよ!それと早く家に帰れよ!」

と返される……どうやら、家出息子だと思われているようだ。まあ、外れではないが。

この世界は現代のように、インターネットやテレビでニュースが見られるわけではないのだ。

情報の速度と正確性は格段に劣る。

首都で起きた事件が、地方に伝わるのが一月後、なんてことは当たり前なのだ。

そもそも身の回りと関係の無い事件など、入って来ないことだってある。山を隔てた隣国が滅亡しようと、この地方に兵隊なり、難民



なりが来ない限り、なかなか伝わらない物だ。

だが、その分変化には敏感だ。

私が逃避行中に、人との接触を出来る限り避けたのは、それが理由である。

怪しい人物（一人で出歩く身なりの良い12歳児）なんぞ格好の噂の的である。

それが理由で正体がばれれば逃亡した意味が無くなる。

だが、あの分なら大丈夫であろう。

あの焼け方だ、屋敷は全焼。DNA鑑定が存在が無いこの世界では使用人の子弟と貴族の子弟の見分けはつかないだろう。

魔法で判別できるかもしれないが、教会魔法にそのような術式は無かったので心配は無い。

ヴィットーリオ・ミケーレ・ディ・チェルヴィーノと言う貴族は死に、私は今の誰でも無いのだ。

元々、私は半分は死人のようなものだったが……除霊魔法を自分に掛けたらどうなるのだろうか？

そんな、事を考えながら裏庭に出る、昨日の青年が剣を振っていた。たしか、ギンターと言ったか。

「おっ、お前も剣の練習か」

今日も笑顔が素敵ですね。このイケメン。

「うん、日課だったんだ。練習しないと少し、落ち着かなくて」

剣を鞘から引き抜いて見ると剣の中ほどから、大きな亀裂が走っていた。

「あー、すっげヒビ……直すのに結構取られるぞこれ」

「この亀裂だともう駄目……かな。切り詰めて短剣にするか、鉄屑だね」

危ないので鞘におさめ、手頃な棒で素振りをする。

「あーあのな……」

しばらく互いに無言で素振りをしていたが、ギュンターが何か言おうとするので、

素振りの手を止めて聞いた。

「本当にすまなかった！あの怪鳥がお前に向かっていったのは俺のミスなんだ！」

突如、頭を下げて謝罪するギュンター。おおう、この世界にもお辞儀の風習あるのね。

だが、止めてくれないかねギュンター君、対外的には冒険者に救われた家出息子ということになっているのだ。その冒険者サマが頭

を下げていると何と……ほら、奥方様たちひそひそ話しちゃってますよ？目立ちますよ、ばれますよ、私の死亡フラグおっ立てるおつもりですかアナタ……このままでは不味いので少し大きめの声で言っ  
た。

「いえ、ギョウターさんが気にする事ではありません。怪鳥に襲われたのはあの場所に居た自分が大きいのですから……それに最初に攻撃したのは俺です。怪鳥が激昂して向かってきたのは、俺に原因があります」

最初に攻撃したのは嘘だが、嘘を信用させるのは真実と併用して用いるべし、だ。

それに、半分は本当の理由だ。モンスターが出没するポイントにのこのこ出歩く私が悪いのだ。

真実を語らない方が本人のためになる事もあるのだ。

「そう言ってくれると、助かる。フレイから相当攻められたんだよ、大変だぜあの女は。」

それとお前、いい奴だな！友達になろうぜ、俺の事はギョウターと呼び捨てで呼んでくれよ」

驚きだった。私はこの世界では呼び捨てで呼び合うような、気軽に話せる同世代の友人は居なかった。権力者に真の友人は存在しない。だが、今の私なら。そして彼なら親友となれると確信できた。

「うん……宜しくね……ギョウター」

緊張で少し赤くなっただろうか、そんな私にギョウターは飛び込んで来た。

「おうよ！俺に任せておけ！！」

話を聞いていた主婦達も「若いつて良いわね」とか「青春ね」や「創作意欲が湧くわ」等と…

ちよっと待てコラ。色々突っ込みたいが、この世界にもアレがあるのか！

「……この分なら大丈夫ね」

陰に隠れていた栗色の髪の少女が、そう呟き立ち去るのを、私は気が付かなかった。

素振りを終えて二人で宿屋へ入ると、フレイヤとトーマスが朝食を待っていた。

他に泊まっている客は居ないので事実上の貸し切りだ。2人に挨拶をする。挨拶は人間関係の潤滑油だ。

「わっるい！遅くなったぜー」

「いつもの事でしょ。それよりあんた。ちゃんと彼に謝ったの？」

「もちろんだぜ！ヴィットーリオはいい奴だよ。俺の事許してくれたぜ」

机を見るとライ麦の混じったパン、ゆでたソーセージ、シチュー、リングのジュースが置かれていた。フォークもある、どうやら民衆の文化はかなり進んでいるようだ。史実の中世みたいに肉の手掴みは個人的にはごめんだった。

ギョンターは民族的に北の出身だろう、その人物がフォークを普通に扱えるという事は、ナイフ・フォーク法が民間レベルまで伝わっているのか。

……やはりコーヒーは無いのかな？どこかで聞いた気がするが：朝は、あれを飲まないと始まった気がしない。最も、今の身体でカフェインを摂取すると、どうなるか分からないが、紅茶はあるからそっちを…

どうでもよい事を考え込む悪い癖が発動し、食べないのですかとトーマスに言われてパンを食べる。

……旨かった、冷静に考えるとあの日以来、初めてのまともな食事だった。

食事を胃袋に叩きこんでいると、のどを詰まらせリンゴジュースを飲む……訂正、これはリンゴジュースじゃない、シードルだ。

シードル リンゴ果汁を発酵させた酒、要するにリンゴビールだ。アルコール度数が低いので子供向けにも飲まれる。子供に酒を出すな、と怒るかも知れないが、生水の方がよほど危険なので、酒の方がマシなのである。民族的に酒に強い連中が多いしね。多分、今の自分の方が、前世の自分より酒に強いと思う……12歳児に潰される25歳ってなんだ？

シードルの味？腐ったリンゴジュース。というか、果汁100%のリンゴジュースを放置すれば出来と思う。

「こうして、ごはん食べる所は年相応よねー」

……一週間ぶりのまともな飯なので勘弁して下さい。

朝食を終えると部屋に集合した。聞かれたらマズイお話などをするからだ。

「さて、単刀直入に聞きましょう。あなたはこれから如何したいのですか？」

「正直言っ分らない。あの男を恨む気持ちはまだ有る。

だが、今殴り込みをかけても返り討ちに遭うだけだろうから意味が無い」

恨みなんぞ簡単には消えない、奴が目の前に居れば嬉々として殺すだろう。

「だが、このまま手を拱いていても事態が好転するとも思えない。奴の権力は拡大しつつある。権力が高まれば暗殺の機会が増える。故に、護衛側も注意するからだ」

「毒殺等採りえる方法はあるのだが――――奴はこの手で仕留めたい」

私が胸中を語るとトーマスは言った

「その見識、意思、行動力どれを見ても12歳とは信じられませんね」

「母国語じゃないんだろー。それでそれだけ語れるなんて、葉で子

供の姿に変えられたとか言われても信用出来るぜ」

……やけに鋭いな、ギンターは。つい途中から口調が変わってしまったのも悪いが。

「よく言われます。でも俺は正真正銘の12歳ですよ」

「ほんとよねー、ギンターに半分の知識を分けて欲しいわ」

「なんだよ、俺はバカってか？」「あら、馬鹿じゃない？討伐対象の獲物を逃す位には」

ギンターとフレイヤが口喧嘩をしそうになっていたのでトーマスが止める。

「私としては、あなたの復讐を止めるつもりは有りません。復讐は残された者の正当な権利です」

意外だった。トーマスという男の言動から見ると止めてくるかと思った。

「ですが、今のあなたの實力では、返り討ちに遭うのは事実でしょうね。私は知り合いをそのように死なせたくはありませんし、目覚めも悪くなります」

「なので、ここは私達としばらく行動を共にしませんか？行くあてが無いのでしたら同じでしょう」

「そうよ！それがいいわ」「俺も賛成だ！」

「この先の行くあても有りません。一人ならブレンダーノに乗り込

み果てたでしょうね」

「だが——冒険者として生きるのも悪くない。悪くないと思います」

「——そう、悪くない。復讐をするなら確実に、だ。冒険者として力量と付ければ実力的にも対抗できるし、人脈を築けば政治的にも対抗出来る。著名な冒険者は王侯貴族とも面会する事が有るのだ。とすればそれを支援に事を成せる。何も悪くない。」

だが、打算とは別に、彼らとは友人関係を気付きたいのだ。いい加減一人でいるのに疲れたのかもしれない。肉体に精神が引き摺られたのか？神童だの、天才だの言われても、私は子供ということか…

「よっしゃ！これから一緒に前、共用語と剣が使えるけど他に何が出来るんだ？」

彼等には転生知識以外の自分の全てを明かす。隠すべきでないだろう、信頼には信頼で答えるのだ。

「そうですね、言語は一番の特技ですね。母国語のエトルリア諸語以外にも、エトルリア語、ガウル語、タラゴナ語、ケルティック語、共用語、グラエキア語これらは読み書きも出来ますね。ノルド語は方言がきついと無理ですね、会話だけなら出来ると思います」

「テュルク諸語は片言なら通じると思います。普通の会話は無理でしょう。どうしましたか？」

「いや……もう君が色々、規格外なのは解りました」



「やって見れば簡単なんですけどね。エトルリア語系でタラゴーナ、ガウル、俗語が覚えられます。帝国語も習得すれば、ノルド、レックランド語も覚えられます。あ、レックも多分通じますよ。帝国語十ノルド語系ですから……ケルティック語、グラエキア語は、趣味で覚えましたね」

今思えば子供の記憶力すげーって覚えまくったけど、充分チートです。

「あれれー、ぼく、あのこがなににいつているのか、わかんないぞ」

「……ギウンターあなた疲れているのよ」

……漫才始めた2名は放置する。

「武術の方は、剣と銃以外は扱えますか？」

「はい、司教様から、魔法を少々」

「……と言うとやはり教会魔法ですか？」

私は悪戯っぽい微笑を浮かべると言った。

「正確に言うと、教会魔法“も”使えます」

「ケルティック系も少し齧りました。その為にもケルティック語を覚えたのです」

私の発言にトーマスが少し驚いた表情で言った。

「意外ですね。十字教徒の方はドルイドを忌避すると思いましたが」

「さあ、僕は別にどの教えが正しくて、この教えは異端で間違っている。といった考え方は出来なかったので……正解なんて無いと思いますよ。仮に間違っていたとしたら、その時は、司教のいう所の“異端”の神に救いを求めますね」

発言してから、相当不味い事を発言したと思った。仮にも宗教家相手にお前の教えなんて知るか。と発言したようなものだ。グリエルモなら泡吹いてぶっ倒れるな。

ギンターとフレイヤは石像のように固まっている。肩が震えているぞトーマス。完璧に怒らせたな。

もし、ここで戦闘沙汰になったらどうやって逃げようか。などと考えていたがトーマスの考えは、いい意味で予想とは違っていた。

「……感嘆しました。他者の教えを尊重し理解する。ですが、この国でそれを口にするのはかなり問題でしょうね」

「この考えが教義に合っていないのは理解しています——この思想を知っているのは

私の魔法の師と信頼する一人の家臣、あなた方三人だけです」

頬を釣り上げ笑みを創る。悪魔の笑顔とはこのようなものをいうのだろう。

——さあ私の信頼は全て曝したぞ、どう応える。

「……魔法の師と仰いましたね。何という方ですか？」

……巧みに答えを避けたかトーマス、まあいいだろう。少なくとも教会で異端審判になる事は無いな。

「……確か、ロバート・クリフォードと言う方で……」

驚愕したのか、眼を見開いて肩に掴みかかるトーマス。おう、この男もこのような反応をするのだな。

「教えてください！彼は今何処に居るのですか！」

おい、顔が近いぞトーマス、私にその趣味は無い。

「さあ？俺も数ヶ月間教えて貰っただけなので、突然現れて突然いなくなるから」

そういえばそういう人物でしたね。と呟き肩を放すトーマス、二人は彼の反応に驚いているようだ。

「トーマスさん。そのロバートって人は有名な方なのですか？」

「ええ、ドルイドの中でも最も優れた魔術師と言われていますね。」

150年前の資料に既にその名が記されていますから、実年齢はそれ以上です」

その時点で十分化け物だな、あのじじい。

「不老不死なんて憧れるわぁー」

「不死だと思うけど、不老ではなかったよ。枯れ木みたいな見た目だったし」

最初、行き倒れてるのかと思ったぐらいだからな。  
いや、枯れ木はイヤ、とムンクになっている少女は放置して話を進める。

「じゃあさ！ヴィットーリオもすごい魔法の使い手なのか？」

「んーそうでもないと思う。覚えてるのは“タラニスの車輪陣”や“トータティスの一撃”とか詠唱に時間かかるし……」

「それって、最上級儀式魔法じゃないですか……それを子供に教えるとか何を考えているのですか」

やっぱ、お前すごいよ、さすが親友。とか言っているけど詠唱に一時間かかる魔法なんて、何の役に立つのだ？敵は待ってくれないし、だったら剣で斬りかかった方が早い。

費用対効果が悪すぎるのだ。詠唱失敗したり、魔法陣が破壊されると命を落したりすることもある。だから、私は実戦で魔法を使わなかった。教会魔法でいくつか使い勝手のよさそうなのはあがあるが、アンデットとか、悪魔向けがほとんどで、後は治癒関係の魔法だ。

「と、すると“弦の拘束”とか“氷の槍”や“石礫”等の護身魔法は使えないという事ですね？」

「護身魔法？」

「知らないようですね。ドルイドの魔法には儀式魔法、治癒魔法、弾唱魔法、護身魔法があります」

トーマスの話を纏めると、このような分類になるらしい。

儀式魔法 大規模な術で使用するのに陣や儀式が必要。無い場合は長時間の詠唱若しくは大量のマナが必要。祭典や戦争などに用いられる。効果が大きい分対価も大きく失敗すると大抵大惨事になる

治癒魔法 教会の治癒魔法と効果はほぼ同じだが、術式や必要な道具が変わってくる。

弾唱魔法 吟遊詩人の唱の事。魔力が必要無く一般市民も楽しんでいる。要するに歌謡曲。

護身魔法 手軽に使えて自分の身を守るための魔法。ファンタジーゲームの魔法に一番イメージが近いのがコレ。簡略された儀式魔法が基らしい。

一応、魔法の建前としては、治癒魔法や、弾唱魔法みたいな害の無い魔法以外は、人に向かって使うのは禁止されている。だが、身を守るために使うのは許される。その事を曲解して戦争や盗賊相手にバンバン使う……建前と実際なんて往々にして逆転してるものがある。

勿論、魔法を悪用する奴も居るが、それは魔法に限った話ではないだろう。

「という事で、危険な儀式魔法を使用するのはやめて欲しいのです。その代りわたしと行動している間に簡単な護身魔法を教えます」

願っても無い話だった。実用性皆無の魔法なんか覚えていても仕方が無い。

必要なのは即戦力になる魔法だ。

「はい！宜しく願います」

「礼を言う必要は無いですよ。もう一人魔法を使える人が居れば戦いの幅が広がりますし、私も楽できますし」

「あ、そうだ。思ったのですがヴィットーリオという名前は捨てることにします。この名前だと正体が割れるかもしれないし」

「今までの過去を捨てる意味でも、新しい名前を名乗りたいのです」

私のその発言に皆は感動しているようだ。フレイヤに至っては涙まで浮かべている。

「そうだね、Vittorioを縮めてVito……ヴィトって名前にします」

単純すぎるネーミングだと思ったが、しっくりくる名前なので良いだろう。変な名前が目立つのもごめんだ。

「よっし、ヴィト！一緒に来るなら装備を購入しないと、あんまりいい物ないけど」

「間に合わせならここでも十分よ。本格的なものはクルムバッハまで行けば揃うから」

「……私は留守番していますので、3人で行ってらっしゃい」

ギョンター達3人が出ていくと、私は先程の話を振り返った。

（このまま手を拱いていても事態が好転するとも思えない）

（——この思想を知っているのは私の魔法の師と、あなた方三人だけです）

（……確か、ロバート・クリフォード）

（“タラニスの車輪陣”や“トータティスの一撃”）

（その時は司教のいう所の”異端”の神に救いを求めますね）

（—————奴はこの手で仕留めたい）

あの少年はいったい何者なんだ？ どう見ても人間の子供、悪魔憑きやエルフでは無い。しかし、その知識と言動は12歳ではありえない。たとえ家族を殺されて復讐に燃えているとしても性格は変わっても知性は変わらない。

彼の本質は賭博師だ。<sup>ギャンブラー</sup>自分の命さえチップにして運命をゆだね、停滞を嫌い、変化を望む、勝てば全てを手に入れ、負ければ全てを失う。敗北さえも運命と楽しんでいるのかもしれない。

極めて危険な思想だ、しかも実行能力まである。おそらく彼が起てば、人はその魅力に酔い嬉々として命を捨てていくだろう——私も、おそらく彼のために行動するだろう。

彼は私たちを信頼してくれているのだろう、さもなくばあのような発言はしない。望むなら韜晦<sup>とうかい</sup>することだって可能なはず、だが彼は、我々の事を信頼してくれているから、全てを語ったに違いない。

私は彼を導かなければなるまい。少しでも良い方向へ……

「……本当に何者なんですか？あの子は」

——私の弦きに応えるものはいなかった。



## 第11話 旅立ち

メーベの村 チェルヴィーノ山脈の麓にある村で、史実のツェルマットにあたる村だが、電車も無いこの時代に、観光で来る客など僅かなので、主に林業や手工業で収入を得ている。人口も数百人程度で、史実から見れば小規模な村だ。

まずは買い物する前に、換金をしなければならない。村の商店に金貨なんか持ち込んでも釣り銭が出せない。銀貨か銅貨に変えなければならぬ。

私が持っている貨幣は、ドゥカート金貨やリラ金貨、グロッシ銀貨、ソルド銅貨、主に地中海の通貨だ。この地方では、帝国の貨幣すなわちグルテン金貨、タレール銀貨、ペーニツヒ銅貨が流通している。地中海貨幣でも使えない事は無いが、面倒事を避けるために両替したかった。

両替商はこの村には居ない。彼らも商売だ、金のある都市に行かないと居ない。

では、どうやって両替するか？金のある所、つまり教会か村長だ、だが教会に持っていくと、あれこれ理由付けてふんだくられるので、まともな人間は村長に両替してもらう。

「すみませーん。貨幣の両替をしてほしいのですが……」

フレイヤが村長に話しかける。50代の男が出て来た。彼が村長なのだろう。

「おお、これは冒険者殿。両替ですか？」

「ええ、この子を村に送りたいのですが、その為の小物類や、食糧を買い足したくて……でも前の依頼の報酬がラグーナ貨幣だったので、使えるようにしたいのです」

「なるほど左様ですか。いかほどの交換で？」

フレイヤの懷からリラ金貨1枚と3枚のグロッシ銀貨、27枚のソルド銅貨が出される。

我が故国では、金貨1枚⇨銀貨10枚⇨銅貨200枚が目安だが、帝国には有望な銀鉱山が有るので、若干銀と銅が安い、対して金は産出する鉱山が少ないので高くなっている。

レート通りなら金貨1枚⇨銀貨12枚程度になる。

「そうですね、13ターラーと17ペーニツヒでいかがですか？」

……明らかにボツテルな。まあ仕方ない、妥協しよう。

「ギュンター、俺早くナイフを見に行きたいのだけど」

それでいいという合図だ。フレイヤが、分かりましたお願いします。

と言うと布袋に銀貨をひい、ふう、と数えて入れて渡してくれた。

「布袋は3ペーニツヒ」

……とことんがめつい村長である。

村の広場にある商店に向かう、小さな村の商店は、雑貨から食糧まで様々なものを扱っている。コンビニみたいなものだ。土産物の象嵌はいかが？と勧められるがそんなものは必要ない。

「えっと、水袋とロープ、クズ綿、ラード、銅の手鍋。厚手のマントと良く切れるナイフ」

「あ、そうだ背囊も要りますね。固焼きパンと干し肉。後、岩塩も下さい」

「それだけ買うと結構するよ。大丈夫かい？」  
小間物屋のおばさんが私に聞いて来る

「怪鳥に服ごとやられちゃったので。大丈夫です。家から持ってきましたから」

正直、全財産叩きつければ店ごと買っても釣り銭が来るがな。

「……呆れた子だね。親御さん大激怒してるよ？うちは商売だから構わないけどさ」

「まあ、おばちゃん男は冒険するのが好きなんだからさ」  
ギョンターが笑いながら話す。

「うちの亭主みたいに片足失う前にやめて欲しいけどねえ……嬢ちゃんはこういう馬鹿と一緒になっちゃいけないよ」

寄木細工を手にとって見ていたフレイヤが赤くなり

「ええっ、そんなつもりないです」と否定している。私は、おばさんに商品の代金を渡す。

「おばさん、俺でも着れそうな古着って無いですか？

今の服、先生からの借り物なんです。村に帰ったら返さないといけないし」

「古着ねー。ちょっと見た目悪くても良いかい？

樵のペーターが昔、着てたやつだけだね。厚手の羊毛だから、寒さ防ぐにはいいよ」

おばさんが出してくれたのは、少し昔の子供向けの服だ。少しといても田舎の、特に子供の服は古着が当たり前だ。現代みたいに新しく作ったりしない……ヴィンテージ物の子供服だ。

「充分です。お幾らですか？」

「んーこのサイズを着られる子が今は居ないから置いとしても誰も買わないしねえ」

「おばちゃんからの選別だ。でも、もう親を泣かせたら承知しないよ」

古着とは言え、立派な商品だ。そこそこの価値はある。このおばさんに優しさが嬉しかった。

「おばさん。ありがとう」

笑顔で礼を言うと、おばちゃんは

「おつむも良さそうだし、素直だし、見た所、力もありそうだ。無鉄砲なところが無ければうちの息子に欲しいぐらいさ。娘が居ればつば付けたのにねえ……」

等と言っていた。おばちゃんは先程から赤くなってもごもごしているフレイを捕まえると

「お代金の代わりに嬢ちゃん借りるよ。男共は先に宿へ戻ってな」

と、私たちを追い払った。

宿に帰ると、一階の酒場でトーマスがマスターと会話していた。私達に気が付くと

「おう、お帰り！冒険者と家出息子。昼食の時間はもう少し待ってな」

「おかえりなさい。フレイヤさんはどちらに？」

「しらねー。オンナのお話だとし。ヴィト、荷物まとめとこうぜ」

旅の装備に最低限必要なものは手に入れた。火打石は銃に付いているのが有るし。

先程の買い物で使った費用が4ターラーと8ペーニツヒ。岩塩と、ナイフが高く付いた。

……そうだ銃の整備もしないと。

ホイールロック式短銃 火打石を使った初期型の銃 引き金を引くとホイールが回転し、火打石を挟んだハンマーに当たって着火する。ガスの無い100円ライターみたいな物だ。

複雑な設計で壊れやすく、有効射程は10m前後。現在の唯一の遠距離武器。

護身魔法を覚えたら倉庫送り確定。

銃を弄っているとギョンターが声を掛ける。

「すげー細かい部品で出来てるなソレ。強いのか？どの位飛ぶんだ

？」

「……有効射程は良くて50ペース（15m）位だね」

「短ッ！石でも投げた方がマシじゃねえ？」

「でも、フルプレートの鎧でも貫通するよ？」

口径が大きくて火薬量も多いのだ。近距離でマトモに喰らえば、現代のアサルトライフルより威力が高い。むしろ鎧なんか着ていると、弾が潰れて大変なことになる。ダムダム弾でググれ。

「ギューンターが敵と切り結んでいて相手は鎧を貫通できる武器を腰に下げている」

「ああ、集中できねえなソレ」

「それに戦闘スタイルも多分違うし」

「戦闘スタイル？」

「ギューンターの武器はロングソード。重さで敵を断ち切る剣。だから、鎧相手でも打撃でダメージ与えられる。僕が愛用していたのはショートソード。軽くて斬撃に特化した剣。鎧にダメージを与えるなんて無理。折れる。だから鎧に対抗できる武器が欲しい」

所詮は子供だから、ロングソードなんて振れないのだ。すぐに疲れる。

だからショートソードにしたのだ。レイピア？刺して引き抜けなくなるし攻撃を受けられない。クレイモア？大人でも長時間は振り回せないわ。それに戦でもない限り、フルプレートの鎧の敵と対峙する場面が想像できない。

後、2年成長すればロングソードも使えるのだが……

昼食出来たらしく、トーマスさんが呼びに来た。銃の整備を終えると背囊へ仕舞って腰に道具屋で買ったナイフを吊るすと、一階に降りるのだった。

「えっへっへー見て見てー。」

フレイヤさんが寄木細工の箱を掲げている

「うん、一目見て気に入ったの。ちょっと高かったけど買っちゃった」

たしかに、このような工芸品は高いだろう。造るのに相当な技量いるはずだ。

「アンナさんの、あっ、あの小間物屋おばさんね。」

その旦那さんが木工職人で、趣味で造っているんだって」

「へえ、確かにこれは良く出来てるね。幾らしたの？」

「うん、1ターラー」

「ちよっ、こんな箱買うのに銀貨が要るのか！」

貨幣の価値が違うので一概には説明できないが、銀貨一枚で大体5千円位だ。

だが、現在と違って、嗜好品や美術品等の価値は非常に高い。領土と引き換えに美術品が動くことだって有る。

「うーん、フレイヤさんちょっと見せて」

「フレイヤでいいわよー。1つしか違わないんだから、どうぞ」

その箱を手に取り見る。幾何学模様が美しい。指で弾いて音を確認める。

前世でも家に有ったな、何処の土産物だったか……

側面の中心の模様をスライドさせる。次はその下を、そして今度は上をと動かしていくと、一番上の蓋が開けられるようになった。中には木片が入っており、こう記されていた。

“ s c i e n t i a   p o t e n t i a   e s t . ” （知識は力なり）

「はい、どうぞ。お返しします」

「これは、驚きましたね。このような仕掛けになっているのですか」「ええ、隠し箱と言います。城下の小間物屋に売られているのを見たことが有るんです」

「ヴィト君すごい、こんなによく分かったね」

「すっげーな。どうやって作るんだ、これ」

「この箱が銀貨一枚なんて相当お得ですよ。城下町で買えばもっと取られますね」

多分、ここが田舎だから安かったのであろう。田舎では貨幣が余り流通していない。

田舎の銀貨一枚は街の金貨一枚に匹敵するのだ。

それにしても見事な象嵌だな、これを創った職人に会ってみたいな。

「それで、これからどうするんです？」

私はこれからの行動指針を聞いた。

「そうですね、依頼を終えたのでギルドに報告証明して報酬を受け



取ります」

トーマスが懷から1枚の書類を出す。茶色の厚手でごわごわした安い紙だ。

「これが報告証明書です。依頼人、若しくは依頼先の仲介人等が討伐した証明と引き換えに発行します。この書類をギルドに持ち込めば報酬と引き換えとなるのです」

つまり話を纏めるところだ。

1、大きな街にある冒険者ギルドで依頼を受ける。  
2、依頼をこなすと、現地の依頼人若しくは仲介人に証明（今回の場合は首）を引き渡す。

（ただし納品依頼のようなものは指定されたギルドへ運ぶ）

3、依頼人はそれと引き換えに証明書を発行する  
4、その書類をギルドに持ちかえる。報酬と引き換えて貰う  
5、依頼人は数カ月一度、証明書を纏めて送る。この時に証明品の数が違っていたりすると調査される。

良く出来たシステムだと思う。怪鳥の首を抱えて旅をするなんて遣りたくないし、毒のある生き物だったら疫病を撒き散らしているような物だ。

下手したら異端か何かと勘違いされてキャンプファイヤーだ。そうでなくても城門で止められる。

「ここから一番近いギルドは首都のクルムバッハですね。歩いて4日位かかります。でも急ぐ旅では無いので明日出立します。今日はゆっくりしていいですよ」

他2名は「なあ、フレイヤあのおばちゃんと何話してんたんだ？」  
「なっ、何でもないわよ！」と掛けあっている。何の話か大体想像はつくが……

その日は、細工箱を創った木工職人（オイゲンさんという名前だった）に会いに行ったり、村の子供たちと遊んだりした。夜は3人の冒険談（主にギョントターの馬鹿話）聞いた。

こういう生活も悪くは無いなと感じた。

翌日、日の出の少し前に村を出る。旅人の朝は早い。日の入りまでに如何に進めるかが勝負だからだ。

昔の人間は何処へ行くにも徒歩だ。馬や馬車もあるが、資産的に余裕のある人でなければ使えない。

みんな、現代人とは比べものにならない健脚だ。

「ヴィト君は思ったより体力が有りますね。この分なら3日で付きそうですね」

「チエルヴィーノ侯国は田舎ですよ？あそこで暮していれば嫌でも体力付きますって」

「でも、貴族だったんだろー、勉強ばかりで屋敷に籠ってるとかだつたらあんまり体力付かないよな」

「勉強ばかりじゃないよ、武術の訓練とかいろいろやるし。それに田舎の貴族なんて屋敷に居てもやる事無いからって狩猟とか模擬戦

とかばかりだったね」

「でも、ヴィト君勉強できるじゃない。いろんな国の言葉話せるって尊敬するわ」

「うーん、家族に他の国の人が多いから小さい頃から色々聞いてたから覚えるの簡単だった。母上はガウル貴族だし、兄嫁はアラマンネン人。そもそもチエルヴィーノって公用語とガウル訛り強いし」

他の皆は無事だろうか。エリザベッタ姉さんやマルゲリータ無事だと良いが……

「そういえば聞きそびれたけど、3人はどういう意図でパーティ組んだの？」

「んーまあ、これから一緒に旅する仲間だから説明してもいいか。隠す程でも無いし」

私は、帝国北部の城砦都市ヴィーヘンブルグで育ったの。父は街の大商人「ライネー商会」の会長アルベルト・ライネー。母は私を産んですぐに亡くなったから覚えてないわ。

母が居ないから男に囲まれて私は育ったの。だから、お花とか宝石とかまったく興味が無い。

剣とか騎士物語とか大好きだったわ。男の子達とチャンバラごっことかやってた。

父はそれを止めようとしなかった。むしろ書記長のハンスさんや、女中のゾフィーさんとかの方が苦言を言っていたわ、女の子らしくないってね。

よく遊んでいた男の子のグループのリーダーがギンターだった。下級騎士の家の3男の乱暴者だったわ。乱暴なのは今でも変わらないけど。

でも、全てが変わったのは1年前

「結婚？……ですか。お父様」

「うむ……先方が是非とも、と言って来てな。お相手はカールマティアス・フォン・キュヒラー殿だ、武門の名高い家柄の嫡子だ。武道の好きなお前には悪い話ではあるまい」

「嫌です！私は結婚なんてする気は無いですし、あんな男も嫌いです！」

カールマティアス・フォン・キュヒラー。確か子爵位を持っている家系の家柄だったはず。どうでもいいけど。私が覚えているのは、氷のような冷たい青い瞳で何を考えてるか分からない冷血漢。いつも私を舐めるような目線で見つめて虫唾が走った事位ね。

あ、もう一つ知っている事は、あの結婚が財産目当てだったという事。

あの家は、散財が激しく火の車って街でも評判だったから。

「だが、相手は伯爵さまの覚えもめでたい大貴族だ。

向こうが是非と言っている以上断れないのだよ……諦めてはくれんか」

「ぜっ・た・い・にイヤです！あの男と暮らす位なら修道院に行きますわ！」

「待ちなさいフレイヤ！」

「はあ……あのお転婆を貰うという方が出たと思えば……」

「ギョンター！居るんでしょ話があるわ」

「なんだよフレイヤか、どーしたって言うんだよ……」

「……わたし結婚させられるの」

「結婚？何処の娘があい……」「冗談じゃないの！しかも相手はあのキュヒラーよ！」

「うげッ……あのカタブツかよ」

「……私、いやよ。あんな奴となんて、ねえ、あんた英雄になるんでしょ。なんとかしなさいよ」

「……んな事言われてもよー」

「もう終わりだわ！私、あの男と結婚させられてカタブツ夫人だとか言われるんだわ！」

「おっ、おい！泣くなよ。わーかった、何とかしてやるから」

「……ひっく……どーすんのよ」

「……“冒険者”になるんだよ」

父に気が付かれないように家に戻ると、お金とか着替えとかをかばんに入れてすぐに家を出たわ。街の門を出るとギョンターが待つ

てた。

「遅いよフレイヤ」

「しょーがないでしょ！女の子の準備って時間かかるんだから」

「女の子ねえ……よし、気が付かれる前にササッと遠くまで逃げろぞ」

「何処に向かうつもりなの？」

「ちよつと遠いけど南のバルテンブルクだね。東のホルステンとかに行くとはれるかも知れないからさ」

「そうね、行きましょ！」

今思うと私達の考えは本当に甘かったわ。それを気が付いたのはすぐだった。

「さーむーいー、ギョウター、火まだ付かないの？」

「ちよつと待ってよ、くそっ、おかしいな？」

初夏とは言え夕方から寒くなる。火打石で火をつけようとするが、なかなか付かない。

着火用の火口を持ってこなかったのだ。

「だめだ！付かない」

「どーしよっか……」

「持ってきた服、厚着しよう。後はくっ付いてマントに包まるぐらいだなー」

木の下で二人で身を寄せてマントに包まった。

周りは真っ暗で何も見えない。呼吸音がやけに大きく感じたのを覚えてる。

「変な所触らないでね！」

「寒いんだからひつつくしかないだろ！」

「……」

「ん、どうした？」

「……その、ごめん。私のせいで…迷惑だったよね？」

「……いや、そうでもねえぜ。どうせそのうち家から出るつもりだったから。」

それに1人で行くよりフレイヤと2人の方が心強いし」

「……そう、ありがとう」

翌朝、家から持ってきたパンを食べると道を南に進む、すると突然藪から数匹のコボルトが出てきた。

「でっ、出たわ！」

「フレイヤ！武器持って下がってろ！俺がやる」

私は家から持ってきたショートソードを構えた。剣を持つ手が震える。

モンスターと対峙したのは初めてだった。

「フレイヤ！コボルトは2足歩行だからスピードは狼以下だ！牙と爪だけには気をつけろ」

長剣と木の盾を持ったギョウターがコボルトに斬りかかった。さすがに冒険者を目指しているだけあって手慣れた様子で始末してい

く。私の知らない所で実戦してのか。

「フレイヤ！一匹そっちに行った！気をつけろ！」

私の方にコボルトが向かってきた。ちよつと、なんでこっちに來るの！

眼をつぶって劍を前に突き出す。ガウツ！という鳴き声と手に強い衝撃が來た。

……恐る恐る眼を開けてみると、コボルトの胸に劍が突き刺さって絶命していた。

全身の力抜けて、その場にへたり込む。絶命したコボルトが仰向けで倒れた。

「頑張ったな、フレイヤ」

いつの間にかコボルトを全滅させたギョンターが戻ってきた。こいつ、こんなに強かったけ？「うお抜けねえ、すぐく派手に刺しやがったな。くそっ」とか言いながらコボルトに刺さっていた劍を引き抜くと、鼻腔に赤錆びた鉄のような匂いがした……ああ、私が倒したんだ。と実感した。

その時、森の奥から遠吠えがすると、先程のコボルトを倍の大きさにしたような化け物が出てきた。

「なっ……人狼！（ヴァラヴォルフ）」

「なんなのよ……あれ……」



ギョンターはコボルトの血に染まった剣を私の手に押しつける。

「フレイヤ、先に逃げろ。こいつは俺じゃ倒せない。時間を稼いだら、俺も逃げる」

「ギョンター……だめ……立てない」

「げ……マジかよ。畜生」

ギョンターは私の前に立ちふさがる。人狼に向かって言い放った。

「来るがいい化け物め！フレイヤには指一本触れさせねえ！」

人狼が突進してくる、とても防ぎきれないとは思えない。私は目をつむって顔を伏せた。

「弦の拘束」

風で木々が揺れるような音が聞こえた。顔を上げて見る。

すると、地面からツタが伸びて人狼を包み動きが止められた。

ウッドランス  
「木槍」

私の後ろから鋭い木の枝が通過し人狼に突き刺さった。

後ろを見ると紺色のローブを着てオークの杖を持った青年が立っていた。

「やれやれ、斬撃の効果は薄いですか。なんて丈夫な毛皮なんですよ。いい素材です」

「石塊の一撃」

子供ほどの大きさの岩が地面から飛び出て宙を舞った。人狼に直撃して人狼は息絶えた。

「おやいけない、潰してしまいましたか、これで素材に出来ませんね。残念です」

青年は私達に笑みを浮かべながら近づく。結構かっこいいじゃない。

「大丈夫ですか？血の匂いに釣られて別のモンスターが現れる前に離れましょう」

「あの、助けていただきありがとうございます」

「助かったよ。ありがとう」

「いえいえ、礼には及びませんよ。それより聞きたいですね、あんな危ない所で何をしていたのですか？」

私達は事情を説明した。

「やれやれ、困った姫君と騎士ですね。家族が心配していますよ、どうするのですか？」

「……少なくとも俺はもう戻れない」

「そんなことは無いでしょう？」

「絶縁状を置いてきた」

「えっ」

何考えているの馬鹿ギョンター。なんでそんなことするのよ

「ライネー家のお嬢さんと駆け落ちします、探さないでください。ってね。これならフレイヤの親父さんの面目も多少は立つし、実家も放逐されてるから責任は取れない」

まったく、いつも変な所で頭が回るんだから。駆け落ちしたってことに  
なれば婚姻なんて破棄されるのは間違いないし、追われる事も無いはずね。

「それは…街には戻れないでしょうね、あなた達」

その青年は、口に手を当てて考えるといった。

「分かりました。あなた達を放っておいて野垂れ死にされると気分が悪いですね。着いて行きますよ。パーティを組みましょう、冒険者登録もやってみますか」

私たちは喜んだ。こんなにも心強い人が参加すれば、旅はうまくいく、前途が開けた。

「申し遅れました。私はトーマス・カーライルです。今年の初めにボウディック国立魔法学校を卒業したケルティック人です。宜しく願います」

「で、3人でバルテンブルクに行き冒険者として活動を始めたの。」

トーマスさん、旅の色々な事知っていて、本当に助かったわ」

「いえいえ、知識だけでしたから。実践するととなると本当に難しいですね。」

それにお二人がいたおかげで、帝国公用語が上手く扱えるようになりました」

「でもトーマスさんのお陰でギュンターをうまく制御できたわ」

「制御って……俺は馬か何か？」

「馬だったら、倒したオークを焼いて喰おうとしないわよッ！」

フレイヤの話にみんなが笑う。そうか、この3人には確固たる信頼関係があるのか。

私もその仲間に入れるといいなと思いながら山道を進むのだった。

## 第12話 冒険者ヴィト

「今日はここで野宿にしましょう」

火が少し陰り始めたころトーマスが声をかける。  
日が暮れてからでは遅すぎる。ある程度早めの準備が必要だ。

「いつも通り俺、枯れ木集めてくる」

「私とトーマスで料理の準備ね、ヴィト君料理出来る？」

フレイヤが私に聞いて来る——その質問に対する答えは一つだ。

「……人には何かしら欠点がある」

みんなから爆笑された後、俺とギュンターが枯れ木拾いに行く。  
屋敷だと使用人が料理を作るし、前世でも格安弁当を買って生活していた男だ。スパゲッティ食べて何故か救急車で運ばれた経験もある。

それ以来料理なんて一切しなくなった。したいとも思わない。

「いつまで、笑ってる？ギュンター」

「いや……だって…普段との格差が……」

こんなに薄情な奴だと思わなかったぞ、ギュンター君。  
君にはいつか私特製“飽和した味噌汁”を飲ませてやろう。

「俺は別に完璧な超人じゃないぞ。持ちうる能力を限りなく有効に行使するだけだ」

「……その考え方が普通じゃねえ」

枯れ枝を抱えて戻るとシチューが出来ていた。いいね、女の子の手料理だ。

これを喰えるだけで転生して良かったと思う。え？前世？聞くなそんなもん。

料理をした火を種に大きな焚火にする。火があると、動物やモンスターも余り寄り付かない。

彼らも人間を恐れているのだ。自分たちの巣を壊滅させたり、襲いかかってくる人間が、だからモンスターも行動するときは大抵集団で、はぐれているのは群れから追いやられた奴か、巣立ったばかりの若い奴か、さもなくば力の強い上位種だ。

火を焚いているのに襲ってくる敵は、それは大抵、山賊——人間の間敵は人間だ。

「さて、それではご飯も食べた事だし、交代で見張りを立てますか」  
「あつ、待って下さい。いい魔法がありますよ」

「んあ、どんな魔法だ？」

「うん、教会魔法の一種の“警鐘”って魔法で1ペース（約30？）以上の

大きさの動体が魔法の効果範囲内に侵入すると音が鳴るんだ」

「何それ！すごい便利、私も使いたい」

「……教会魔法は、教会語（エトルリア語）が出来ないと難しいと思う。

それに“結界”程ではないけど守護魔法って会得するのは難しいし」「そっか、残念」

地面に円を描く、その中に正方形を描く、中央部分の正方形内にはS A T O R A R E P O T E N E T O P E R A R O T A Sと書き込む、一種の回文だ。

後は陣にマナを注ぎ込みながらそれに対応した呪文、効果範囲、時間等を指定すればいい。本当はT、E、Nは赤で書き込むと理想的だが：

「Requiem aeternam dona eis, Domine, et lux perpetua luceat eis」

呪文を唱え終わると、陣からマナが放出される。成功だ。

この微量なマナの存在している範囲が効果範囲だ。

「本当に魔法使えたんだなー」

……テメェ、疑ってたのか。

「火を見ていると、とても落ち着くわ……」

「東の地には火を崇める宗教があると聞きますが、ヴィト君知ってますか？」

「確か、拝火教って宗教の事だと……どんな内容かは知りませんが……」

「確かに教会の説法にも火に関する教えとかあったわねー」

「……んなの、あったか？知らないぞ俺」

「あんたは聞いてないだけでしょー……」

「……そうだっけ、覚えて……ねえや」

火を見ながらマントに包まり横になり、雑談をしてると……まぶたが……重く………

気が付くと夜明け前だった。東側が明るくなりつつある、東雲って奴だ。

幸い、何事も無かった見たいだった。

皆を起こさないように静かに動く、冷えたからだを温めるためにも少し筋肉を動かす。

「ヴィト君おはよー」

「フレイヤさんおはようございます」

「だ、か、らフレイヤでいいってば。あの馬鹿呼び捨ててるのに私は呼び捨てできない？」

「……分かったフレイヤ。じゃあ、僕の事もヴィトって呼んで」

「わかったわ、ヴィト……ふふっ」

「どうしたの？」

「やっとくだけた言い方してくれた」

「あ……どうも癖なんだよ。どうしてもタメ口で話せないというか、



慣れないというか」

「本当に変わってるね。ヴィトは、考えとか、行動とか、普通の人より優れているわ」

「うーん、自分が特別優れているって言うより、周りの環境だと思う」

私は倒木とうぼくに腰掛ける、フレイヤも隣に腰かけた

「前にも話したけど、うちの家系は他国の貴族とかが多くて、いろんな言葉で会話していたんだ。小さかった俺は、お爺様とか義姉さまと会話したくて、当時、領地とうりゅうに逗留していた言語学者に教えて貰っていたんだ」

「すると気が付いたんだ、教会語と、ガウル語と、俗語（エトルリア諸語）には、単語や文法の共通点が多くて簡単に覚えれた。そうしたら、教会について教えてくれた司教様が、眼を掛けてくれて、教会魔法とか、法律とか色々教えてくれてね。今に至るわけさ」

「なるほど、そのような覚え方で身に付いたのですか」

後ろからトーマスが声をかけてきた。ギョンターも居る

「2人とも、おはようございます」

「おはよー、トーマスさん。ギョンター」

「おう、おはよー」

「ええ、おはようございます」

「あの魔法は、大変便利でした。

今までは見張りを立てて、交代制で寝て居たのですが、その必要

も無くなりました」

「“警鐘”は元々、布教する為に、旅をする宣教師が発明したと聞きます。

護身魔法と似たようなものだと思いますよ」

「十字教の教義としては、他者を愛し、融和する事が基本です。その為に他人を傷つける技は余り無いのですよ」

「……私の知る十字教とは、随分違いますね」

……表情が少し暗いぞ、トーマス。やはり何か腹に抱えて居るな。

「教義を曲解する人間はいつの時代にも居ます、何も十字教だけでは無いでしょう？」

「考え方なんて人其々です。百人の教徒が居れば百通りの解釈があると思います。」

教義は一つかも知れませんが、それをどう思うかはその人次第。それを分らずに、他人に強制をする人間がこの世には多いのです。

」

私の発言に、フレイヤとギュンターは、ぽかんとした表情だ。これまで聞いた説法を根底から覆しているからな、無理もない。

「まあ、こんな所で宗教論争しても仕方ないのですがね……」

「そうですね、朝ご飯を頂いたら出立しますか」

そうだ、さっさと飯を喰って進もう。時間を無駄にしないのは、時間だけだ。

「……酷いな」

「……多分、全滅ね」

道を進むこと数時間後、時間は太陽の位置から昼頃だろう。

本来なら村で食事なり補給なりをするのだが…

到着した村は建物が焼け落ち、辺りには据<sup>す</sup>えた悪臭と、焦げ臭さが立ち込めていた。

辺りに横たわる物体は、ほぼ間違いなく……

「……くッ！」

「ヴィト！」

「ヴィト君！」

「……大丈夫です、そのうち慣れます」

胃の中身をぶちまけた後、青くなっているだろう顔を上げる。

そうだ、こう云う事態は旅をする以上は遭遇する可能性はある、

ここは現代じゃないのだ！

「……野盗ですか、いえ、違いますね。彼らなら若い女性は攫って

いくでしょうね」

「この辺はわりかし平和なはずだろ。襲撃するならまずモンスターだろうよ」

旅をしている3人は、このような事件に遭遇する事も有るのだろう。

表情こそ暗いが冷静だ……これが経験の差か。

大丈夫？とフレイヤが水袋を差し出してくれる、口の酸っぱさを取る為に飲み干す。

「ごく稀にですが、魔物が群れを成して人間の村を襲撃する事もあるのです」

私は蒼白の顔を上げトーマスを見つめる。

「モンスターの恐ろしい所は、繁殖能力はんしよくのうりよくと数の暴力です。」

「単体で有れば、農具を持った農夫でも倒す事は出来るでしょう。しかし、5体、6体と現れると勝てません。訓練された騎士でも10体相手に1人では勝てません」

「ですから、我々冒険者は戦う時にパーティを組みます。1人では無理でも、数人なら弱点をカバーして戦えます」

「鍛え上げられた冒険者グループは、魔物の群れを殲滅せんめつ出来ます。しかし、それは個人能力の高さよりも、連携の強みです……今日はその事を覚えて頂きます」

トーマスが村の広場に目線を向けると、死したはずの村人が起き上がり動いていた。

「ヴィト、ありゃグールだ。葬儀をされなかった死体が、数週間で邪気が籠って動きだす」

「彼等は何意思も無く、本能のままに人間や動物を襲う……倒してあげるのが彼らの為よ」

「この近辺を通る人の迷惑にも為りかねませんからね。ギュンター君、いつも通り頼みます。フレイヤさんは、今回は前衛をお願いします。私とヴィト君で後方から支援します」

「よっしゃ！ やってやるぜ」

「りょうかい、任せて」

「僕も……前衛に出た方が良いのでは？」

「借り物の使いなれない剣で戦うのは難しいでしょう……それに、その顔で前線で戦えますか？」

「……解りました」

トーマスの指示に異を挟んだ私は諭すように説得される。その意見は正しい、大人しく指示に従った。

「ヴィト、グールの弱点は邪気が宿ってる心臓だ、それ以外は効果かねえ、注意しろよ」

「教会魔法で殲滅してやるさ、悪魔や死人相手は十字教の十八番ってね」

そして4人は村の制圧を開始する。

「Dona eis requiem. Hosanna!」(彼らに安息を与えたまえ。救い給え!)

呪文と共に左手に現れた光球を射出し、グールにぶつける。低威力で簡単な浄化魔術だが、グール相手には絶大なダメージらしく、青い焰に包まれて消滅する。

「うおおおお!」

雄たけびと共に、ギューンターが空竹割りにグールを両断する。からたけわ腐敗しているとは言え人を両断するその筋力には私は驚嘆する。きょうたん

「弦の拘束!」

「ありがとう! いやあああッ!」

トーマスに拘束された敵を、フレイヤが氣勢を上げてマチェットで左胸を割る。

ギューンターはもう一体の拘束された敵の胸を突き倒す。

次に5体のグールが現れた。数が多い!

「まとめて殲滅します!」

「Dona eis requiem: dona eis requiem:」

「In paradium deducant te chor  
us Angeloum te suscipiat, a eter  
nam hab eas requiem.」

（天使達が、貴方を楽園へと導き、聖歌の合唱で出迎え、永遠の安息を得られますように。）

「……Amen.」

右手で十字を切り、左手を振り下ろす。射出された光帯が5体のグールを包み浄化する。

聖水等のアイテム無しに中級浄化術を使った為、一気に魔力が消耗されてしまった。

その後、数体のグールを仕留めると戦闘は終わった。

戦闘が終わると地面にしゃがみ込む。皆を見回すと、トーマスと私は後衛だったので平気だが、前衛2名は、グールの体液を浴びて酷い有様だった。

「みんな、お疲れ様。もうひどい匂いだわ。井戸まだ使えるから、水浴びしてくるね」

「おう、俺らは下の小川で洗ってくるか。行こうぜ、ヴィト」

ギョンターに誘われるが、私にはまだやる事が残っている。ここ  
で出来るのは私しかない。

「先に行って、トーマスさん、残っている遺体を集めてください」

「……そーいう事か、俺も手伝うよ」

「私もよ……もう、既に汚れてるしね」

魔法で倒した遺体は、灰になっているので問題ない。しかし、剣で倒した敵や

まだグールに変化していない遺体を一か所に集める。祈りの文を捧げてまとめて灰にする。

この世界の十字教の葬儀は、金銭のある者は教会で司祭の呪文により、金銭の無いものは家族が薪を組み遺体を灰にする。遺体のままにすると、邪気が籠りグール化してしまう。

遺体の形を保った浄化法で葬儀出来るのは、よほど金銭の余裕のある権力者か

若しくは聖職者のみである……民衆は最後の審判を受け、復活する事が出来ないのだ。

衛生学的に考えると理想かもしれない。しかし、民衆の気持ちとしてはどうだ？当然不満である。

何とかして土葬してもらおうと司祭に金を積む、それが原因で教皇領は腐臭漂っているのだ。

100年ほど前の公会議で、司祭の呪文による浄化でも肉体は復活する、と決議された。しかし、目の前で肉体が完全に灰になる様を見れば、なかなか信用されるものではない。

だが、彼等には済まないが灰になってもらう。



今の私には、遺体をそのままに出来る術を行使するだけのアイテムも、余力も無い。

灰を一か所に埋めると木で作った十字架を突き立てる。

“シェーン村の住民、ここに眠る。願わくば公審判の日に復活せんことを”

葬儀を終えると、3人が小川で水浴びをする。さすがに覗きをする好色漢もする体力も無い。

さすがに、秋の山岳地で水浴びをすると体が凍りつく、しかし、体が臭う寄りマシだ。

つか、フレイヤさんはお湯を沸かすから井戸に行ったのか？多分そうだろう。

小川で洗濯と体を洗い終えると、川原で鍋に水を汲み、湯を沸かす。聖水造っておこうかな？……今日は魔力が無いから今度で良いか。

白湯が沸いて皆に配ろうとすると、フレイヤさんが戻ってきた。頬がピンク色だ。

「あー、テメエ1人だけ湯浴みしやがって！この！」

馬鹿がフレイヤさんの後ろに回り、冷えた手を背中に突っ込む。

「ひゃあ！何すんのよ、このお馬鹿ッ！！」

踵を上げて金的一撃、振り返って胸にハイキック……ナイスコンボです。

哀れギュンターはそのまま川に転落する。

「うわっ！」

「ぎゃあ、冷たい！」

「ちょっとー馬鹿じゃないの？皆が濡れないように落ちなさいよ」

「お前が落としておいて、なに言いやがる！洗った奴まだ乾いてねえんだぞ！」

「知らないわよ、後あんた晩ごはん抜きね」

「お前サマは悪魔で御座いますカツ！？」

「あー、俺の市民の服使う？そんなに汚れてないから洗って無いし」

「さすが！俺の親友だぜ」

「濡れた格好で抱きつこうとすんなタワケが！」

このやりとりに皆が爆笑する。昼とは打って変わった平和な時間だった。

その夜は、村はずれの焼け残った道具小屋で過ごした。“警鐘”を使う余力が残っていなかったので、交代で見張りを立てる。私も見張りをするつもりであったが、「疲れているだろうから休んで魔力を回復しろ」との有難い言葉に甘えて就寝した。

翌日、一日かけてクルムバッハに辿り着く、だが既に日が落ちていた為、城門は閉じられていた。

野宿している者も居たが、余裕は有るので、城門の周りにある宿屋で一泊した。

翌朝、クルムバッハの冒険ギルドへ到着した。ギルドは街の大通りにある石造りの立派な建物で、中の依頼掲示板には多くの冒険者が仕事を探しに屯していた。

我々は、依頼報告なので報告窓口に行き、書類と引き換えに報酬を手に入れる。

その額、グルテン金貨3枚だ。庶民の年収が金貨15〜20枚あれば普通の生活を送れると言われているから相当な額に見えるが、装備品や旅費は自前な上、命の危険もあるから高いとは言えないのである。

そして、私の冒険者登録を始める。登録窓口行って面接と試験（といってもランク付けなので落とされる事はない）を受けるのだが、目立つと不味いので指輪を外し、トーマスさんから予備携行のタクトを借りる。

「まず、名前と出身地を教えてください」

「……ヴィト。シェーン村から来た」

「教区司祭の証明書はお持ちですか？」

「……ない」

「…家族のお仕事は、村では何をしていましたか？」

「親父は小作人、お袋はその手伝い」

「教会を管理している司祭様の尊名は？」

「……司祭様は、しさいさまだ。みんなに勉強を教えてくれるいい人だ。他に名前が在るのかい？」

「もしかして、村を勝手に飛び出したのですか？ご両親は心配していないのですか？」

「……ううっ」

（嘘）泣いて涙をこぼす私、タイミング良くトーマスが受付の人と話す。

「……シェーン村は、モンスターに全滅させられていました。彼は、井戸に隠れていたので生き残っていたのです。往路の際の逗留時に、彼と会話したので身元は確かでしょう」

その言葉にすまなさそうにする職員、周りの冒険者たちも同情的な目線で我々を見つめる。

「……それで、同情して連れて来たのですか？なら、街の修道院に預けるべきでしょう」

「それも有りますが、彼は魔法が使えます、簡単な回復魔法と浄化魔法だけです」

魔法が使えると言うのは聖職者以外の民間人（冒険者は除く）ではなかなか居ない。魔法を発動するための、発動体付きの杖は高価で有るからだ。本当かい？と聞く職員に涙を拭いて答える。

「……うん、俺の家は兄貴がいっぱいだから、俺の畑はない。そうしたら、“しさいさま”が頑張って勉強したら読師にしてやるって言われたら、文字勉強した。」

「しさいさま”はいい人だ。文字が覚えて読めるようになったら、魔法も教えてくれた。おまけに自分の使って無い杖までくれた」

「……でも、あの日みんな死んじゃった。親父も、お袋も、兄貴も“しさいさま”も！」

私の口から語られる告解に皆が涙している……まあ、嘘っぱちだね。しかし、フレイヤさん、嘘って解っている君まで泣くのはなぜだい？

「……そういう事情なら理解出来ます。冒険者の登録を認めましょう。

早速試験を致しますが、危険のない回復魔法なら、私に掛けて下さい。」

「うん、H o s a n n a ! (救い給え)」

職員に光を当てる。回復力も少し痛みが和らいだ位かな？という実用性は少ない技だ。浄化に使うにしても直接触れて居ないと使えない為、あまり意味がない。

「はい、確かに確認致しました。合格です」

この感動劇で周りの人間が一斉に拍手する。高い実力で目立った訳では無いので問題ないだろう。

職員がタイプライターのような機械で金属板に文字を打ち込む、この時代にこんな便利な機械は無かったぞ？活版印刷の技術は発明されていると聞いたが、既にこのような機械が出ているとは……

「面白い？近年、帝都で発明された機械で、この地に導入されたのもつい最近よ」

「それまでは、職人が手打ちで作っていたのよ、これが導入されて発行も登録当日に出来るようになったから楽になったわ」

はいどうぞ、と手渡されたのは真鍮製の金属板だった。

「ランクは1～7まであって、最初は7から始まります。カードをランク4までは無くした場合の再発行は出来ません。最低ランクからのスタートになります」

「ランク4からは、ギルド本部に登録書類が出来ますので再発行は、手数料と引き換えに発行できます。ただし、届くまでは証明等に時間が掛かるので、その間は仮カードになります。昇格等出来ないので気を付けてください」

「ギルド本部はエトルリア半島の“ウェブス・ウェトウス・ウォルシニ”に存在します。そこで再発行書類の手続きと発送を行うので、場所によっては数カ月掛かることにもなる上に、手数料で金貨数十枚取られる事も有るので、注意してください」

「昇格についてです。昇格はランク4までは、ギルド支部内で定期的に行われる試験に合格するだけです。実技か筆記の選択形式です。腕に覚えがあるなら、いつでも受けてください」

「ランク4以上は依頼形式での昇格になります。各支部が出す依頼の中で、危険度の高い赤印の付いたものをランクごとの指定回数をクリアしてきて下さい」

「ランク1の試験はギルド本部で年に一回行われます。実技、筆記と2つとも受けて、その総合判定です。どちらの能力とも高くなければ合格不可能です」

「そのような理由で腕は一流のランク2の方って多いのですよ……話がそれましたね」

「さて、次に依頼と報告についてですが……」

「その事については、私が説明しました。心配は要りません」

「あら、そうですか、では私からの説明は終わります。冒険者ライフ頑張ってね！」

周りの荒っぽい男達が「これで仲間だな！ボーズ頑張れよ」等と激励してくれる。

私は、手にした金属板を見つめる。以下のように記載されていた。

V I T O        V I R        I N P E R I U M        F R A N C I        F O  
D E R I S        S C H O E N  
(ヴィト 男性    フランク帝国    連邦州    シェーン村)  
C L A S S I S

？

この安っぽい金属板にどれだけの価値があるのだろうか、これがある限り、私はヴィトという一人の人間に生まれ変わったのだ。身

分が手に入れば、大々に動ける。

派手にやっても、こそこそ隠れずに生活できるのだ。私はそれが嬉しかった。



### 第13話 真相と決意

登録が終わると、次はギンター達の報酬の換金である。金貨を渡されたが、実際使うには銀貨に変換した方が使い勝手良い。ギルド内に駐在する銀行の係員を訪れた。

「報酬の換金をお願いします」

「畏まりました、金貨3枚で宜しいですか？」

「いえ、交換するのは2枚で、後は口座に貯金してください」

「口座の名義人は？」

「ギンター・シュヴァルツシルト、その彼です。ギンター君、ギルドカードを」

「おう」

「確認しました。ギンター様の口座に振り込み致します。クルムバツハ冒険者ギルド駐在連邦銀行員のハンスが確かに承ります。こちらが非常時の木札です」

銀行員が木片をギンターに渡す。万が一の際はこの木片が証明になる。

「交換手数料は銅貨5枚です。」

本日のレートは1…12…240です。銀貨23枚と銅貨15枚をお受け取りください」

金貨を持ち続けて歩くのは危険だな。私も口座に金貨を預けておかうか。

「あの、俺も口座を造っておきたいのですが……」

私の発言に銀行員は丸眼鏡を上げて、コイツ何言ってるんだ？という表情で見つめられた。

「……口座開設は、街の支店銀行に行ってください」

「判りました、後で行きましょう」

私達はギルドから離れる。次にやっておきたい事があった。

「なあ、ヴィト。俺の口座に纏めて入れるのはダメか？」

「うーん、迷惑じゃないかな？」

「口座開設料って結構取られますよ？私達はそれが嫌で1つの口座しか持っていないのです」

「勿論、金利の折半とか、個人の貯金額とかはきっちりやるわよ」

「じゃあ、お願いします。後で銀行寄りますよう」

「ああ、そうだ。これ渡しておきます」

トーマスから5ターラーを渡される。受け取る理由はない、断ろう。

「私達は既にパーティーです、報酬は分割されるべきです。

ああ、返そうと言ったってダメですよ。金銭問題はトラブルに発展しますから」

「……でも、全然役に立っていないし」

「怪鳥の時も、ヴィト君がいたから逃げられずに済みました。野営の時もその術で休息出来ました。グールとの戦いもヴィト君の魔法で決着が着いたようなものです」

「そうよー。あの魔法は本当に便利だったわね」

「僕でよければ教えますよ?」

「ホント!?!」

「はい、ただし教会語の勉強からスタートになりますが」

「うううー頑張るよお……」

「俺にも教えてくれよ!」

「……出来れば私も良いですか? 興味はあったのですが、教えてくれる人がいなくて」

「どうぞ、構いませんよ……ここですね」

私が向かったのは、商人ギルドだ。交易商人や町の商会の人間が集まる場所である。

——つまり、多くの情報が集結する。

もちろん、冒険家ギルドにも情報は多く集まる。

だが、私が知りたい情報は政治的な情報……つまり、我が祖国の失陥の情報だ。

ギルドマスターに面会を依頼する。

多忙につき……等と言いだした職員にそっと、銀貨を握らせる……面会はすぐに実現した。

「で、欲しい情報は、チエルヴィーノ侯国の失陥時の情報ですか……」

「ご多忙の所を申し訳ございません。あの地には叔父が住んでいます、どんな情報でも構いません」

「……君の叔父について解る事はないと思うがね。まあ情報を頂いた以上……」

ギルドで聞いた情報はとんでも無いものだった。

私の知っていた事が大幅に間違っていたのだった。ただ、敵軍が攻めて来たのではなかったのだ。

『思ったよりも簡単に潜入出来たな』

『交易商人に扮しました上に、この侯国は近年戦争も無く墮落しきっています。関所の検問もおざなりだし、なにより少人数です。簡単に出来ますよ、ピサーニ閣下』

『閣下は父上だ。私は唯の伯爵家嫡子に過ぎんよ、協力者は？』

『はい、強力な人間が付きましたよ。マスカーニ家の嫡子、ジュゼッペ・マスカーニです』

『ふむ、良く付いてくれたものだ。この国の貴族は忠誠心厚く、切り崩すのは不可能に思えたのだが……』

『公爵閣下、直々に説得なさったので付いた次第でございます』

『あの時のか……カッシーリ家は崩せなかったか？』

『無理でした。冗談と受け取られた様ですね』

『馬鹿な分、意味が分からず説得できなかった、馬鹿に救われたと

いう事か。皮肉だな』

『どの道必要ないですよ。戦争が始まれば、この国に駐留する部隊等ごく僅かですから』

『まあ、そうだ。あの男が反乱の音頭を採っても、部下に刺されるのが落ちだな』

『どうも、遅れました』

『よく来た、マスカ―ニ殿、いよいよ今夜決行だが、首尾は？』

『侯爵家の家族の生存を条件に、父も吞まれました。私も同意見です』

『分かっておる、一家の身を人質に降伏を迫る、その後は領地の天封<sup>てんほう</sup>と息子達を人質にする、だな？』

『アルベルト侯爵は家族思いな人物です。家族の身を押さえれば必ず降伏します。また、次男ヴィットーリオは聡明な人物です。生かしておいた方が役に立ちますし、私が後見します……では、私は別邸襲撃部隊の指揮を執ります』

『うむ、本宅は私が襲撃しよう。この国の傭兵は職に付けずに飢えていた。』

予想以上の戦力を集める事が出来た、必ずうまくいくさ……』  
『はい、本邸の方はお任せします』

『……馬鹿が、有能なればこそ、消さねばならんのだ』

『ルイージ殿！これは一体どういう事なのです！？』

『……見ての通り、傭兵共が暴走したのだ。実に残念だ』

『何を白々しい！』

『……ジュゼッペ君、賽は既に投げられている。賭け金を途中で下すのは許されない。全てを失う事になる……私はそれでも構わ  
ないがね』

『賢明な判断を期待しているよ……クハハハハ！』

『なんだと！町で反乱だと！？いかん、直ぐに軍を引き返すぞ！』

『いけません！父上、今軍を引き返せば、後ろを突かれる可能性が  
あります！』

『……フェルディナンドの気持ちも解るが、あの街には我々の家族  
が居るのだ』

『皆も同じ気持ちであろう！軍を引き返し、反乱者の首を上げ、町  
を奪還するのだ！』

こうして、軍を引き返した父上たちであったが、峠の野戦陣地に籠られた反乱軍と、追撃してきたブレンダーノ軍に挟撃されて殲滅された。生き残った者はほとんどいないそうだ。

皮肉にも自分達の町を護るために用意した硫黄に焼かれて、貴族達は死んだ。

程無くして、タウリニアも陥落した。

チエルヴィーノ侯国とタウリニア共和国の2国は、歴史上から消滅した。

ガウル軍の援軍が到着しなかったのは、ガウル貴族の切り崩しがあったのも事実だが、それよりも重要事態が発生した事が原因だった。

ガウルの首都ルルティアが、ケルティック軍によって陥落したのだ。

確かに、事実上の首都としてサン・ベニーニユに政府機能は集中している為、政治的な混乱は一切発生していない。だが、精神的な首都はあくまでルルティアだ。ガウル政府も首都はルルティアであると公言している。

ガウル軍は奪還のために大規模な軍事動員を起こすつもりだった。その為に、我々は見捨てられたのだ。侯国や共和国との関係が深いガウル南部貴族は、援軍を送る意志であったが、国王の勅命が下った以上は進軍する事は出来ない。

両国が陥落した後もだ。メリヴェール侯爵やモンペール公爵、ルグドーヌ侯爵などは大激怒して討伐軍を派遣しようとした。だが、主戦派の方々に鉄材の輸送の再開と量の増加を提案（ブレンダーノへ取引していた分が消滅した）すると、あっさりと同意して軍を北部戦線に送るように命令した。

そのお陰で3公の怒りを買い、彼等は宰相派へと接近して行ったとの事。

教皇領も近接するブレンダーノの覇権主義に、不安こそ抱いていたが、今までの歴史上、教皇領を襲撃した人間など数える程しか居ない上、その人間も何れ没落して行ったという事実から樂觀視している。

他にも陥落直後に、教皇や枢機卿あてに“お布施”を送ったようだった、以上の理由から破門までは至らなかったようだ。

更に私が、簡単に街から逃げだせたのも理由があった。

……カッシーリ子爵だった。彼の警備部隊が奮戦したお陰で町が閉鎖されるのが遅れたのだった。カッシーリ子爵は、職務に殉じて果てた。



……やはり、わたしはあの男が嫌いだ。

しかし、これで真相は究明できた。ガウルに関してはやむおえない。

誰だって自国の利益は大事である。それを無視して他国を助ける事に期待するのは間違っている。

だが、マスカーニ親子とルイージ・ピサーニ、奴等は許さん。

特にウンベルトの奴は絶対にこの手で消してやろう。奴とブレンダーノ公の2人はこの手に掛けねば気が済まない。奴等が、我等の家族を消したのなら、私も奴等の家族を地獄へ叩き落としてやる。

……だが、力が足りない。これからどうするか。

始めは有る程度の力を付けたら、祖父の支援を借りるつもりだった。

だが、祖父は大国の一領主だ。小国でも君主だった父とは立場が違う。ガウル上層部の支持が得られない以上、兵を出せないだろうし、出せたとしてもその規模は拡大したブレンダーノ軍に及ぶことは無いだろう。

義姉上を頼ってアラマンネンに行くべきか？義姉上達は生存して、

故国に戻された様だ。しかし、その案も却下。地理的にも一国を挟んで上、トンマーズ公子にとって私は厄介者である。

義姉上は歓迎してくれるだろう。だが、廻りの者が良くは思わないはずだ。

場合によっては暗殺の危険すらある、よって生存も知らせられない。

姉さま達にも知らせたいが、手紙を送るにしても、面会をするにしても、私を知る人間と会う事は避けた方がよいだろう。また、私の正体が知られば、何処にバレて暗殺されるか解ったもんじやない。それに、利用されて使い潰されるのはゴメンだ、私は駒じゃない。

最悪のパターンとしては、ガウルに現れたたんに身柄を拘束されて幽閉、若しくは処刑される。なぜならば、私は政治的な利用価値もあるが、ブレンダーノの君主と敵対関係にある以上、消しておいた方が後腐れが無い。ガウルの上層部はあくまでケルティックとの戦争に力を入れたいはずだ。そうなれば悲劇である。

個人で傭兵隊を組織する？却下だ。手持ちの金額は軍を組織できるほどは無い。仮に有ったとしても、子供の身で運用できるとは到底思えないし、下手したら金だけ巻き上げられて私の死体が川に浮かぶだろう。傭兵隊に入るにしても、士道ニ背キコトヲ不許、隊ヲ脱スルヲ不許、勝手ニ金策致不可、私闘ヲ禁ズの全てを無視する方針なので不可だ。

当分は、冒険者生活が続けるのが最良だろう。その間に経験を積み、人脈を広めるのだ。

時期が来た時に行動しよう……たとえば10年、20年掛かろうとやってやる。

商人ギルドを出ると、皆が心配そうな表情で聞いて来るが、大丈夫ですよ。と答えた。

……怒りは一時の感情、持つべきは憎悪だ。憎しみを糧にして、苦難に耐え、心身を鍛え上げる。あの夜の絶望の味を私は忘れない。

大通りを進み、ヘルヴェティア連邦銀行クルムバッハ支店に到着する。

首都なのに支店なのかは何故かと問われると、この街は連邦参事議会があるから首都なだけで、東のツェーリングの方が商業的にも人口的にも発展しているからだ。

さっそく、金貨を粗方預けてしまいたい所だったが、地中海金貨、しかも通常の金貨の倍の重さを持つドウカート金貨を300枚も預けようとした為に、ちょっと裏に呼び出しを喰らってしまった。

「どうも、連邦銀行支店長のワルター・ブリュクナーと申します」

別室に案内されて、現れたのは髪に白いものが増えた50台過ぎの細面の男だった。

いかにも人が悪くて辣腕らっわんそうな風貌ふうぼうは……まるでネズミだ。

もっとも、こういうタイプの人間の方が交渉は上手く行くのだが

ね。

「本日は、多大な額の預金をして頂きありがとうございます。失礼ですが何故、当銀行にこれほどの額を預けて頂くのですか？」

副店長の交渉相手にはトーマスが映っていた。年齢的に一番無難ではあるが。

……残念だが君の相手は彼では無いよ。

「この銀行は客を不愉快にさせるのが仕事かね？」

まずは先制のジャブを一撃、交渉相手を勘違いしたと気が付いた、支配人は顔を青くする。

「貴方様でしたか……勘違いして申し訳ありませんでした」

「謝罪はいい、変装してきた私も悪かったのだ」

喋り方をわざと高慢な口調に変える。これで相手は変装してきた裕福層の息子に勘違いするだろう。

「私は別にグリーマーニ銀行へ預けてもかまわないのだが、何分交渉に時間が掛かると踏んだからこちらに来たのだ」

時間が無い事と別の店でも構わない旨をアピールする。相手に思わせる余裕を与えない。

「沈黙は金と言うだろう、私の事を詮索してしないで、早くして欲しいものだ」

それとなく裏の事情がある事を漏らし、一気呵成に畳みかける。

「わっ、解りました。確かに金貨300枚お預かりいたします」

「いい判断だ……これは独り言なのだが」

支店長にドウカート金貨を握らせる。

「在る商人が税金を過小申告して、正しい額を納めなかったのだ。ある日その商人に捜査の手が入りそうになった。偶然、聞きつけた商人は帳簿と現金を隠さねばならなくなった。その商人は、信頼出来る身内に資産の一部を預かってもらっているのだ」

「では失礼させてもらうよ、支店長。縁が逢ったらまた会おうではないか」

私が右手を差し出すと拝むようにその手を握る支店長。

「ええ、また“その時”はお願いいたしますよ……ククク」

「ああ、こちらこそ……フフフ」

「俺は絶対、今のアイツ見たくは成りたくネエ……」

「私ですよ……」

「チガウ、チガウこれは夢、あんなのヴィト君じゃない……あははは」

在る銀行の応接間に黒い高笑いが響いた昼であった。



### 第13話 真相と決意（後書き）

主人公が祖父の元に行かない理由を加筆しました。

#### 解説

ある商人が税金を過少申告

マネーロンダリングって素敵な響きですね。子供るとき、意味もなく使っていました。「ねえ、センチもマネーロンダリングしてるの？」と恰幅の良いスーツを着たオジサンに聞いたら怒られた思い出があります。

## 第14話 初依頼

純真な方々に少し“大人の世界”を垣間見せた後、近くの酒場兼宿屋で昼食と宿の予約を済ませると、私の装備を購入に行く。防具なしで旅するのは危険すぎる。

色々考えて装備を選んだのだが、防具はアクトンと呼ばれる綿入の服とリベットと金属板で裏打ちされたレザーアーマーのコート・オブ・プレートを選択した。頭部にはモリオンヘルムを被り、脚部は膝当てのみ装備する。

装備を決定して体のサイズを採寸する。サイズを直すのは3日掛かると言われた。

次に、武器を選ぶ……理想的なのは斬りつけるタイプの武器だが。

「これなんか、どうだい？」

それは、ブロードソードの一種で、スキアヴォーナと呼ばれる剣だった。

長さは80センチ程の両刃剣で、片手持ちの護指が付いたロングソードより若干軽くて短い剣だ。

「はい、その剣が良いです」

冒険者は旅をする人間である。騎士の様にフルプレートを装備して出歩く事は出来ない。戦闘になる前に疲れたら意味が無いからだ。



その為、防御力よりもある程度の軽さを求めなければならない。

次に衣服屋へ向かう。要らない服の下取りとか新しい服の購入だ。村で購入した服は間に合わせだったと言う事もあるが、重くて動きにくい上に所々穴が空いていて隙間風が寒かった。

選んだ服は赤地の毛織の服で毛皮で裏打ちされており、寒さを通さず冬に向けては最適だった。

普段はアクトンをシャツの上に着込んでいるが、町の中で綿入れ鎧を着るのは宜しくないので購入する。

脚衣はブラケと呼ばれるリネンで作られたぶかぶかの黄緑色のズボンだ。革のブーツもしっかりとした造りのファーブーツを選択する。

外套も鹿皮のなめし革の物を選ぶ。村で購入した物は固い革で頑丈だが動きにくかった。

この外套は袖が付いており、現代のロングコートに似ているが袖は通さずに肩に掛けて使う。肩の部分には丸襟の形の毛の着いた肩当てが付いており、寒さや風雨から守る為の物だ。

フードも付いており、これを被って眠ったりする。

その後、様々な商店を巡り本格的な装備を購入した。

背囊、毛布、着替えの下着、筆記用具、武器の整備道具、ベルト

に付ける雑嚢、剣を吊るす剣帯、ホルスター、弾薬や火薬をいれるケース、魔法の補助アイテム、医療品等だ。

他にも火打石や着火する為の火口、松明、水袋、食糧、調理道具、服を修理する為の布や紐や裁縫道具が必要だ。その重量も合計すれば10kg以上ある。

これらを装備すると何処ぞのGrande Armeeのマスクット兵か、バックパッカーのように見える。

パーティなのである程度の荷物の分散をして持って行くが、それでも鎧等を装備すれば十数kgになってしまふ。やはり荷馬が欲しいな……

宿屋に戻ると部屋である物を制作する。紙薬莢だ。旅の間にトーマスから初歩的な術の“石”と“樹”と“火”を会得したが、魔力だって無限ではないので銃も併用する。

……石と樹を組み合わせたら相手を扇状に石化させる事出来るかな？  
今度聞いてみよう。  
デルタ・ペトラ

油脂を塗った厚紙に火薬と鉛玉を入れて折り閉じる。使う時は歯で噛み切り、火皿に火薬を注ぎ、銃口から弾丸と火薬を入れて、薬莢をさく杖で押し固めて発射する。マスケット兵と芸能人は歯が命。

黒色火薬は、20世紀の爆薬と違って、燃烧速度はゆっくりである。つまり、爆発の圧力がゆっくり強まっていく形であり、蓋をし

ていた方が発射ガスを有効利用できるのだ。実際に初期の射石砲などは木の蓋をしていたらしい。他にも紙が弾を固定してくれるから銃身内で動くことが無くなる。これも命中率に影響する。

ちなみに現代の銃、特に12, 7?の対物ライフル辺りで同じことをやったら、恐らく銃身が破裂する。危険なので良い子は真似しないように。

とりあえず20発分を造り終わるとフレイヤさんが部屋に入ってきました。

「ヴィト君、勉強教えてよー。他の二人も部屋で待っているからー」  
「解りました。今行きますよ」

「……古代エトルリア語は21文字で構成されたのですが、現代の教会語はY、Zを加えた23文字です。AからZまで続けて発音して下さい」

「発音には大きく分けて、教会式、俗語式、帝国式の3つがあります。皆は正統派の教会式で言語を覚えて頂きます」

「エトルリア語を勉強するには、聖書から始めるのが一番です。街で購入した一冊があるので皆で見ながら覚えましょう。聖者の成した奇跡とその歴史背景などを説明します」

帝国歴350年頃に、この世界では、現実世界のシリアで魔族の大量発生が起こった。それから数十年の間、当時の世界帝国であった「エトルリア帝国」は討伐のために熾烈な戦争を起こしていた：

帝国歴407年 この世界でキリストにあたる聖者が、マッシリアに降臨して、教えを布教して行った。彼は、優れた魔術師だったらしく、様々な奇跡を成し遂げて行った。

その卓越した魔術の腕と布教活動を危険視したエトルリアは、彼を魔族との戦争に駆り出して戦死させてしまおう、と画策した。だが、聖者は成功した場合は布教、国教制定、教会領の設立を条件に快諾して、魔族の討伐へと出撃して行った。

帝国歴412年 聖者はその身を犠牲に戦いに勝利して魔族の数は激減した。

この結果に狂喜したエトルリア帝国は、十字教を国教に制定、マッシリア教会区を設立する。瞬く間に帝国領内に伝播した宗教は、世界宗教として認められた。

しかし、当然、旧来の宗教を好むものも多かった。そういった者達は反乱を起こしたり、別の地域へ新天地を創るものが多く出た。元々エトルリア帝国は多神教で別宗教には寛容的な国だった。それが一神教を国教に制定したのだ。当然、反発は大きかった。

各地で起きる反乱、長年続いた戦争で経済を圧迫された国家、各

地の穀倉地帯の喪失、さらには、412年に発生した火山の噴火による冷害等が重なり、帝国歴506年、エトルリア帝国は崩壊し歴史から消えた。

聖者はリュジニャン島（キプロス）で弟子達と別れ単身で、最終決戦に向かう直前にある発言を残して旅立った。

曰く、この戦いで魔族が激滅する事はあっても全滅する事はない。彼等は千年後に復活し、再び我等と戦いになる。終末の日、最終戦争<sup>apocalyptic war</sup>となるか人類が生き残るかは、その時の審判による。

以上が、この世界の終末論。千年伝説だ。

他にも現実の聖書の逸話がほぼ丸ごとそのままに残っていた。世界が違って人間を考える事は同じなのか……と思った。

「今日の所はこんな所ですね。前にも言いましたが、エトルリア語から派生した言葉が、俗語とガウル語、タラゴーナ語です。覚えておいて損はないです」

翌日、依頼を探しにギルドへ出向く。まだ私の装備が完成していないので出立するのは先の話だが、人気のある依頼は直ぐに無くなるので、押さえておきたい。

「どんな依頼を受けるのです？」

私の質問に答えたのはギュンターだった。

「そーだなー、この先は東の帝都方面に向かいながら出来る奴をこなしていく」

「去年はこの後、ガウルへ向かったのよねー」

「ああ、だが今年には行かネエ……」

何やらガウルに向かうのは嫌そうな3人、理由を聞いてみると

「トーマスの存在だよ。ガウル人の連中はケルティック人を嫌って  
るから！……田舎の村だと宿すら取れないんだぜ？」

「ホントよ！トーマスさんが何かをしたと言う訳ではないのに！」  
「そのお陰で、十字教徒の人間を信用する事は出来ませんね……」

十字教の影響力は、エトルリア帝国の直轄領だった地域に強い。  
具体的には、イタリア半島、イベリア半島、教皇領等がある南フ  
ランスだ。

帝国領内は十字教の地域だが、民間信仰も多く残っている為、布  
教目的に司教領等が乱立している。

それが原因で、国家としてのまとまりに欠けているのでは無いか  
と思う。

「これ何かどうだ？」

「街道沿いに新しく出来たと推測されるコボルト窟の掃討ね……」

「…問題無いですかね？」

「新しい窟なら、数も多くは居ないから大丈夫でしょう」

依頼について係員へ聞きに行く。

「その依頼は、今日張り出されたばかりですね。お受けしますか？」

「お願いします！」

「えっと、受けるのは4人ですか？ギルドカードの提出と12ペーニツヒをお願いします」

ギルドカードと仲介料を提出すると、係員が書類に必要事項を記入して手渡してくれた。

「はい、これが依頼書です。依頼後の交換先はジークリンゲンの砦に持ち込んで下さい」

「規定通りに対象が既に討伐済みであれば、その書類は砦に届けてください」

それから装備が完成するまでは皆に言語を教えたり、回復魔法の補助具の聖水を作ったりした。

装備が完成していいよいよ出立する。目的地は連邦の商業上の首都ツェーリングだ。

この時代の徒歩の旅は、整備されている道であれば時速約4～5km程度で進める。

一日8時間歩くと仮定すれば、大体30～40kmの移動が出来る。

ツェーリングの途上、依頼の討伐場所に到着したのは、2日後の

昼頃だった。

「見てください、あの洞穴がコボルトの巣穴です」

トーマスが指さした先には岩肌に洞窟が掘られていて周りに、つるはしや掘り出された土や石がまとめて積まれていた。恐らく鉱山が襲撃されたのかな？

その穴の前には薪が組まれていて5体の子供位の大きさ位の魔物が暖を取っていた。

「コボルトは魔物の中でも知能の高い、下級魔族に分類されます。鉱山の洞窟等に棲んでいます。鉱石を使えなくしたりする害獣ですね。」

「まずは、入口の5体から倒します」

フレイヤとトーマスが石弓と杖を構える。私とギウンターが低木に隠れながら接近する。

私とギウンターが同時に頷く、狩りのお時間だぜ。

茂みから飛び出す二人、ギウンターがコボルトの首を刎ね、私が背中から一匹を切り裂く。顔と肩に返り血が掛かるが気にしない。

同時にトーマスの放った魔法がコボルトの腹を貫通させ、辺りに血だまりが広がる。

フレイのボルトも、コボルトの額に命中して前のめりに崩れる。



慌てて辺りを見渡すコボルト、それを見逃す我々じゃない。刹那、ギョんターの剣が心臓を、私の剣が首を同時に貫く、二人が同時に剣を引き抜くと、仰向けに倒れるコボルト。

暫く痙攣していたがやがて動かなくなった。

「二人ともお疲れさまー、ヴィト君も剣の振り早いねー。お姉さん驚いた」

「おう！俺の速さについて来るなんてやるじゃねえか！」

「剣がロングソードより短いし軽いからね……てか、ロングソードであの振りの速さってなんだよ？」

「かははは、俺に不可能はねえ！」

「さて、この後はコボルト洞窟の制圧の仕方を見せましょうか」

トーマスの指示で、生木や枯れ葉と薪を集める。やはりこの方法か……

死体を証拠に残さないといけないから、スラリー爆薬で洞窟ごとフツ飛ばすと言うスマートな方法が使えないのが残念だ。

「フッフ、犬肉の燻製のお時間ですよ……」

トーマスさんが影のある笑みを浮かべてる。この人の姓ってルツケーゼだっけ？

洞窟が煙でスモークされる。煽いでるのは近接オンリーのギョんターー。

我等3人は、煙に巻かれて出てくるコボルトをターキーショットしている。敵ながら哀れだ。

30分もたつ頃には数十体のコボルトの山が積み重なっていた。後は、こいつ等の尻尾を持って行くだけだが……

洞窟の奥からローブを着て、杖を持った人狼が現れた。

すかさず武器を構えて戦闘態勢に入る我々、だが……

「待ってくれ！僕に戦う気はない、降伏する。宝物を渡すから命だけは助けてくれ！」

「……会話した？」

「幻聴じゃないわよね？」

「産まれて初めて見たぜ……」

「くそっ！身代わりを置いて、鉄の腸からうまく逃げられたと思ったら、今度は煙で燻される！何だって、こんな目ばかり遭わされる！」

「そりゃあ、お前ら魔族が人間ばかり襲うからだろ」

「僕が魔族だって？冗談じゃない。あんな下等生物と一緒にされて堪るか！」

ギューンターの台詞にヴェアヴォルフ(?)は杖を地面に叩きつけて地団駄を踏む。

「すると、あなたは人狼ではないの？」

「そうだよ！確かにコボルトを仲間にして居たさ。でも人間だって馬を役するだろ？それと同じだよ」

「見た目は、完璧ヴェアヴォルフですが……」

「……色々あって義兄を怒らせてね。見つかったらとんでもない目に遭わされるのさ」

「……証拠は有るのか？」

私の質問に彼は、私の目をじっと見つめると目を細めて言った。

「君、珍しい目をしているね。僕と同じ目だ」

彼の瞳は私と同じ、琥珀色の目だ。だが、その目の色はそこまで珍しいとは言えない。

「君なら、これを有効活用出来るんじゃない？あげるよ」

彼に渡されたのは純金製のルーン文字が刻まれた腕輪だった。

「変化の腕輪さ、最も、効果は髪の色と瞳の色が変わるだけ」

「何だそりゃ？使えねーな……」

「ふふっ、そう思うのは正しい使い方知らないからだよ」

ギョントーの発言に、小馬鹿にした表情で呆れる彼。

「そうだねー、たとえば……」

「…例えば、その指輪とマスクを装着して窃盗する」

「…人の命とかね、ふふっ」

「君の考え、やっぱり僕に似てるよ。君みたいな人間が多ければ世

の中ももっと面白くなるのに残念だね」

彼はその口を大きく開き、邪気のある笑みをみせる。

「ああ、その馬鹿っぽい君」

「なんだよ！俺か！？」

「その剣、使い勝手いいでしょ。正式にきみにあげるよソレ。フレイ達には僕から別の武器を送っておくからさ」

ギョんターの剣ってやっぱりアレだったか。ってことはコイツの正体は……

「……元々、お前のモンじゃないだろう、エイトリが激怒してるぞ、この詐欺師」

「あは、僕の正体気が付いちゃった？さすが君、ますます気に入ったよ」

「お前と一緒にするな。俺は人を騙しても、裏切りと契約破棄だけはしないぞ」

「まーまー、それは個人の価値観の違いって奴だよ」

「じゃあ、そろそろ行くね。機会があったらまた会おうね？ばいばーい」

高笑いを響かせると、彼は大量のカラスに為り飛び立っていった。足元にはトランプのジョーカーが残されて、以下のように記載されていた。

“義兄には知らせないでね♪…割とマジで”

「あの方は一体何だったのですか？」

トーマスの質問に私は答える……本当に碌でもない連中ばかりに  
気に入られる。

「……稀代のトリックスターさ」

## 第14話 初依頼（後書き）

### 解説

#### コートオブプレート

金属板で裏打ちされたレザーアーマー 薄い金属板があるため、斬撃などは防げる。但し、刺突や斧などは防げない。

#### モリオンヘルム

16世紀に流行した兜 ひさしが跳ね上がっているのが特徴で、銃を変えた時に邪魔にならないようにするためと言われている。

#### デルタ・ペトラ

サガフロ2に登場する魔法。威力がそこそ高い上に、範囲も広く、石化効果付きという雑魚殲滅に最適

#### 紙薬莢

16世紀の銃兵は、弾と火薬を別々に入れていたため装填に時間がかかった。17世紀に紙に弾と火薬を同時に詰めた薬包が一般化されて来た為、装填速度が上がった。同時期に銃の軽量化や、銃剣の発明、構造が単純で信頼性の高いフリントロック式が戦場に現れると、銃兵の能力が向上し、18世紀にはパイク兵が駆逐された。

#### 黒色火薬は燃焼速度がゆっくり

これは火薬の形状が影響している。黒色火薬は粉末状であるからだ。粒状に加工すれば燃焼速度は向上する。

#### スラリー爆薬

含水爆薬の事。アルミ粉末と硝安と水で出来ている。コストが安い

割にアンホより威力が高い。鉦山や発破解体に使う。中東やアフガニスタンでも大活躍している。

## 第15話 昇格試験

討伐任務の終了後、ジークリンゲンの砦へ向かい、コボルトの洞窟の掃討を完了したと報告する。

約一柱ほど逃がしたけど、依頼に神殺しまでは入っていない。

「討伐完了！？たった4人でか？」

「はい、洞窟を煙で巻いてしまえば外に出てきます。あとは注意して戦えば簡単ですよ？」

砦の警備兵は驚いたようだった。入り組んだ狭い洞窟の制圧は、なかなか困難なはずだ。

「煙でか……上手く考えたものだな。明日確認の部隊を送るから、それまで逗留してくれや」

「あの、火薬を売ってもらえませんか？銃に使うのですけど……」

「お、拳銃使いとは珍しいな！高く掛かるだろうから少し安めにしとくよ」

「助かります、おじさん」

「まだ、おっさんじゃねえ、28だ！」

火薬を売ってもらって、部屋に向かう。割り当てられたのは2部屋、割り振りは当然。

「「ヴィト・トーマスとギュンター・フレイヤだね」」

即決だった。



翌朝、砦の広間で4人は朝食を摂っていた。コボルトの対処に困っていたのだろう。

食事もなかなか豪華なものを振舞ってくれた。当時の基準では、だが。

ライ麦パンと酢漬けのキャベツにニンジン、サラミに水で薄めた蒸留酒だ。さすがに軍の基地だけあって保存の利くものを中心だが：このサラミは何とかならないのか？ほとんど塩の塊だぞ？

「処でギンター、昨日聞けなかったけど、その剣ってどうやって手に入れたの？」

ギンターはサラミを齧りながら答える。

「前に質屋で見つけた綺麗なシヨテルを持ってた事があったて、それのある洞窟にクエストで行った時に、焰の女神に見せたら“この鍵束と地図と交換してくれ”と頼まれたんだ」

「んで、その地図の場所に行ったら9個のカギのかかった箱があったて、開けたらその中に入っていたのがこの剣だ。ヴィトはこの剣の事知っているのか？」

コイツ等知らずに使ってたのかよ……

「その剣、間違いなく“レーヴァティンの剣”だね……城ぐらい楽に買えるよ」

「「「えええええッ！」」」

城の広間に3人の絶叫が響いた。

「トーマスさん知らなかったんですか？ケルティック神話もノルド神話も似たようなものでしょ？」

「いや、私の専攻は“樹”の魔法ですよ？炎系統には疎くて…第一そこまでの魔力感じないのすが…」

「伝説の武器って、強固な封印が掛かってるんだよ。

そうじゃないと10ペース（3m）以内に近寄る事も出来ずに焼け死ぬよ？」

神の武器が人間界に出回らない理由の一つだ。

むき出しの溶鉱炉を持って歩ける人間など存在しないし、そうでなくとも危険だ。

“いかずちの○ま”を持った人間とも出遭いたくない。

槍なんか持ってたなら忽ち避雷針だし、雨が降りだしたら周囲の人間は命の危機である。

「うおおお、すげえ、俺すげえ！」

興奮するギョンター。だが、私なら鍵束渡された時点で疑うけどな……

「と言う事は、かなり軽いのかい？それならあのスピードも納得だけど」

「いや、普通に重い」

「まあ、そうか。重さも立派な長所だしね、軽かったら骨を断ち切る様な使い方出来ないからね」

コボルト窟の討伐の確認が出来たので、証明書類が発行された。聞いた話によると、あそこは銅を試掘中にコボルトに奪われたとの事、有望な鉱脈である事は解っていたのでギルドに依頼したそう。

深く掘られた鉱山だったら突入しなかった。試掘の段階で本当によかったよ…

砦の人達に別れを告げて、旅路に行く、目的地のツェーリングまではもうすぐだ。

商業都市ツェーリング、この地はトゥーリクム湖の河畔にありラインフェルデン家が治める連邦内でも最大の都市だ。交通網の要所でもあり、各国の銀行が支店を構え、連邦銀行の本店もこの地にある。金の集まる所には当然人も集まり、道を歩けば、商人やら出稼ぎ人やら詐欺師やらが声を掛けてくる活気のある街だ。

ギルドに報告を済ませると、1人当たり銀貨7ターラーと8ペーニツヒ渡された。

残りは旅の旅費として貯金される。家計簿を書くのはフレイヤさん、さすが商人の娘。

私も家計簿でも付けようか、幾ら貯蓄額が多少でもどんぶり勘定はマズ過ぎる。

前世の簿記の知識は少しは役立つかな？商業高校出ておいて良かった。

まあ、こんな時に生かされるなんて夢にも思わなかったが……

案の定、損益計算書を書き始めた私にフレイヤさんが喰い付いてきた。

ついでだから複式簿記の概念を教えたら後で詳しく聞かせろ、と懇願された。退屈するよりマシだが。

「おい、なに書き物なんかしてるんだって。

そんなもんよりギルドの昇格試験やってるぞ、ヴィトも受けようぜ？」

いいよな、お前は、財政面をフォローしてくれる女が居て……マジでモゲロよ。

「実技と筆記どっち受ける？お前は、やっぱ頭いいから筆記か？」  
「うーん、実技の方にしようかな？自分の実力を試したいと云うのも有るし……」

「ギンター達はランク幾つなの？」

「俺ら3人は前に受けた時一緒だったからな。皆6だよ」

「そかー、じゃあ次は5だね？4からは特典が付くと聞いたけど」

「そうねー、依頼時の手数料無料とか、実入りのいい仕事を斡旋して貰えたりね」

「その分、失敗した時や、依頼破棄の記録が付いたりしますから、一概に良い事ばかりでは無いですが」

「ランク4からは見習い終了って事かしら」

昇格試験の実技は、ギルド支部とは別の会場で行われるらしい。私とギウンターは、手数料を支払うと中庭に案内された。

中庭はロープで仕切られていた。外側には多くの群衆が押し掛け、いて、声援を送っていた。

一種の娯楽と云う事だろう。酒や賭けをする人間も居るようだ。

「おー、すげえ、皆見てるよ。ヴィトは緊張しねえのか？」

「……少しね。でも二人が同じチームで良かったよ」

試験方法はチームに分かれた集団戦。勝てた方が全員昇格というかなり荒っぽいやり方だ。

一々評価している余裕も無いのかもしれない。手間は掛からない方法だ。

勿論、命に関わらない様に木剣、木盾を使い、魔法も命に関わる術式の使用は禁止されているものの、毎年事故は結構発生しており、死者が出る事もあるらしい。

「それでは、ギルド昇格試験を開始します。始め！」

観客達の声援と冒険者達の蛮声が混じり合い、あちこちで激突が始まっている。

ギウンターも私も、目の前に現れた相手を倒すのに専念している。

私の相手は、武器を滅茶苦茶に振り回している。正規の訓練は一

切受けてないのだろう。

そんなやり方だと直ぐに息が切れる上に、振りが大きく隙だらけだ。

振りぬいたタイミングを見て、腕を打ち据える。武器を落とした相手の顎あごを盾で殴打して昏倒させた。

次の相手は木の槍を使っていた。薙ぎ払いを盾で受け止る。

一気に懷まで接近して鳩尾みぞおちを刺突したら嘔吐して崩れ落ちた。

その後も順調に戦闘を進め、勝敗の帰趨きすうは決まっていたが、相手側の二人の豪傑げうけつの存在に会場は沸騰した。

1人は木剣をレイピアのように使用していた。重みのある木剣だが、その振りは素早く、幾人もの味方が伸びていた。

もう1人は木槍を振り回す大男だった。普段は斧を使いなれているのか、刺突攻撃は一切せず、振り回すだけだが、筋肉質な体系が繰り出す一撃は相当重いらしく、相手のギョンターも手一杯だった。

私はレイピアを使いまわすドラゴナー風の男の相手をする。

小さい私の姿を見て、一瞬笑いかけたが、笑みを消して一礼すると剣を構えて対峙した。

刺突剣の最大の弱点は腕が伸び切った時、その隙を存分に利用させてもらう！

相手が勢いよく攻撃を繰り出してくる。防御に徹して、隙を与え

ない。

すると、痺れを切らした敵が、一気に勝負を決めるべくフレッシュを掛けて来た、今が好機！

剣でパレードして伸び切った腕を脇でロックする、盾を構えて全体重を掛けて突進する。

「うおおおお！」

叫び声を上げてタックルする。体重の軽い子供の身だが、筋が伸び切っていたのと、勢いで突進したので、両者は地面に叩きつけられる。

「やるな少年、俺の負けだ……おっと、この言葉じゃ理解できんか……頑張ったな」

「……あんたもな、使いなれているレイピアなら俺が負けていた」

私はタラゴスペイン語ーナ語で相手に話しかける、相手は少し驚いたようだ。

「この異国の地で同輩に出会えるとは……神に感謝する」

「いや、俺はこの国の人間だ、訳あってタラゴーナ語を覚えたただけだ……あんたもまだ戦えるだろう、勝負を放棄していいのか？」

「……いや、さっきの激突で肩を外したようだ。痛いから早く降りてくれると嬉しいのだが……」

慌てて彼から降りると、砂を払い、身を起こす。無事な左手で私の腕を掲げて言った。

「私は、この勇気ある少年に栄光を譲る！」

その芝居がかった動作に会場は沸騰した。

その後、勝利した我々は、全員が合格してギルド支部に戻った。

「合格したようですね。二人ともおめでとうございます」

「ヴィト君、あの剣士を倒すなんてすごい！見て興奮しちゃった」

「相手が使いなれてない武器だったからですよ。ギョウターもよくあいつを倒せたな」

「あー、あれ相手の自滅だ、鎖帷子とか胴鎧とか着込んでたから、そのうち酸欠起こしてぶっ倒れた」

「……そういう事か」

「じゃあ、私達はこの後、筆記試験だからそろそろ行くわね？」

「待って下さい。筆記試験も同時に受けるのはダメですか？」

「うーん、どうでしょう？係員に聞いてみたらいかがです？」

ギルド員に聞いたら、原則駄目だが今回は特別に許可してくれた。

「1人体調を崩して中止した方の用紙が余っているので、手数料を払っていたただければ、いいですよ。それに……」

係員は試験を受ける二人のギルドカードを見て、言った。

「早くみんなに追いつきたいのね？そういう健気な子、お姉さん好きよ」

気恥ずかしさから、少し顔を赤らめた。



筆記試験の方は、かなり簡単だった。とはいっても、弁証法や修辞学といった物では無い。

モンスターに対する知識とか、簡単な応急措置の方法とかの文章問題だった。

これは試験と言うより、正しい知識を身につける教育だな。

こう云う事があるから、この世界の外科技術は史実より進んでいるのか……

この世界では、瀉血しゃけつや創傷そうしょうを焼き鑊ごてで焼いて血を止める等の方法は余り使わない。

せいぜい傷が化膿したり、毒のある敵に攻撃された時に、傷口を切開するという方法がとられる。

アルコールによる消毒法まで広く知られている。微生物の概念までは無いようだが、史実のヨーロッパなら、アルコール消毒が発見されるのは19世紀のリスター男爵の登場まで待たないといけない。

古代ローマには、ワインを包帯に染み込ませて傷口を保護したり、傷口の洗浄などの知識は存在した。

史実ではローマ崩壊後に消失してしまうのだが、この世界では、エトルリア帝国は崩壊しても、文化までは破壊されなかったらしい。

その影響かどうか知らないが、知識レベルの一部分は史実の当時に比べて高く、民衆の識字率も史実に比べて遥かにマシである。三人に一人ぐらいは、文字を読める人間が居て、新聞の様なものの発

行さている。

ただし、群雄割拠の時代が続いてるせいか、技術の進歩具合がかなり歪になっている。

魔法の存在からも、貴族間は神官による魔法治療を受けるのが常識で、民間人の医者は身分が低い。

まあ、戦争ばかりしているから、科学技術に予算を振り分ける余裕がないのだろうな……

私はそう推測している。

かくして、めでたく四人ともランク5になった。別に特典が付く訳ではないが、気分的には嬉しい。

ギルドカードには？、？と打ち込まれている場所に×印が打たれて、左に？と云う字が打たれた。

昇格祝いに酒場で痛飲していると、見覚えのあるタラゴーナ人が現れた。

肩の骨を元に戻したのか、右手を掲げている。顔を顰めて手を下した……やっぱり痛いらしい。

「アミーゴ！探したぜ、隣良いかい？」

何時からか知らないが、私の友人となったタラゴーナ人が円卓に

座る。

「しけたもん飲んでるなあ、俺がおごってやるよ！このテーブルにワインを持ってきてくれ！」

……私はワインよりエールの方が好きなのだが、まあいいか。

「この4人がお前のパーティか？自己紹介が遅れたな。俺はファンだ。ファン・デ・コロナドって言うんだ」

「コロナド家って、タラゴーナの貴族だったよな？」

「よく知っているな！まあ、俺は庶子だから家は継げない、名前だけだ」

庶子とは正規の結婚をしてない人間から産まれた子供の事だ。

「先程のすごい剣士さんだー、カッコいいわね」

「嬉しいぜお嬢さん、この格好はタラゴーナ人の誇りさ」

ファンの服装は、ブーツと足の全体を覆うストッキングのような靴下に、南瓜パンツを彷彿させる黒と金の縞模様のシヨス。上着は首と袖口にフリルのついたジャーキンを着て、白い手袋を装着し、頭頂の高い帽子を被っていた。

そしてタラゴーナと言えば、黒。全身を漆黒に纏い、黒髪、黒い瞳がボタンの金色と、白いフリル、帽子の羽飾り、真紅の外套と好対照を成していた。

「この時期は寒くってね、さっさとタラゴーナに帰りたいってものだ。お前達も来るか？」

「いや、私達はこの後、帝都へ向かうのですよ」

「そいつは残念だな、おう、ワインが来たぞ！新たな友人達を、神に感謝すると共に乾杯だ！」

「お前の剣術見事だったな、パレードの動作が巧みだった。誰に習ったんだ？」

私は、溶けた焼きチーズを頬張りながら答える。

「元兵隊上りの老人に……今はもう居ないけど」  
アッシエーテ

「……悪い事聞いたな」

「別に構わないよ、あんたの腕前も見事だった。正規の訓練受けた人は違うね」

「まあな、ピストーラを持っているな、そいつも使えるのか？」

「その老人から譲り受けた。形見分けみたいなものさ」

「持つてるだけじゃない、腕前だ」

「50ペース以内なら外さない……それ以降は神の意志」

フアンは口笛を吹くとにんまりして言った。

「やるじゃねえか、俺も同じ位の腕前だ。今度の当てで勝負しないか？」

「火薬がもったいない。無理」

火薬は軍でも使用する、価格はかなり高い。原料の硝酸が採れるのが、スペイン、イタリア、アラビア等の乾燥地帯だ。インドと新大陸でも産出するが、湿気に弱い為、この時代の技術では、大量輸送が実現されていない。

「なあ、嬢ちゃん。君の瞳は、故郷の空のように綺麗だ。俺と一緒に観に行かないかい？」

「ええっ、でも私は……って、ギュンター！あんた何ぶっ倒れてるのよ！？」

「無理に強い葡萄酒を一気に飲むからですね。慣れない人は偶になるですよ」

「ばーか」

こうして楽しい夜は更けて行った。

「うへえ……頭イテェ……」

「お、やっと起きたか？ほら水差し」

翌朝、目覚めたギュンターに水を渡すと、飲み干して息を吐く。

「うめえ……今いつ位だ？」

「さつき3時課（午前9時）の鐘がなったな。この寝坊助」

「わりい、飲み過ぎたようだ……」

「運んだ俺とトーマスに感謝しろよ。さすがにフレイヤも酔っ払いと一緒に寝る気はないようだな」

「確かに、トーマスなら妙な真似にはならんわな」

「どうか、あの人はなんであんなに達観してるんだ？聖職者だからか？」

「……もしかして不能？」

「お前が言うか？一年間旅してて、なんでフレイヤと何も起きないんだよ」

赤くなったり青くなったりと忙しい奴だな。

旅装に着替えて一階に向かうと、他2名は既に準備を完了して待機していた。

「遅いわよ！ギンター、あんたの朝食無いからね」

「うへえ……って、ヴィト！お前喰う時に起こせよ！」

「下手に動かして寝ゲロ吐かれたら、シーツ代弁償だぞ？起きない方が悪い」

「もう……しょうがないわねえ」

フレイヤの手からギンターに紙包みが手渡される。

「パンを貰ったわよ……って、あんた顔がまだ赤いじゃない！？」

今の彼に顔を近づけるのは酷ってもんだぜ？フレイヤさん。

街を出て帝都方面の街道を進む、次の目的地は、ハライン大司教区だ。

## 第15話 昇格試験（後書き）

### 解説

科学技術に予算を振り分ける余裕が無い  
シヴィライゼーションで稀によくあること。特にラッシュをやる時  
に必要な軍事技術以外は自力発明をおこなわない。

ハライン大司教区 史実のチロル州の辺りに存在する、教会領だ。

大司教（大主教とも言う）は大きく分けると5つに分かれる。

- 1、複数の司教区から成る、司教管区のボスの管区大司教
- 2、大司教区のトップである大司教
- 3、教皇から与えられた称号の定任教区司教
- 4、消滅した大司教区などの名前だけの名義大司教
- 5、ド・ヴィリエ大主教

尚、グリエルモはルグドーナの管区大司教だから1に、今回訪れるハライン大司教区は2に該当する。

教会領の首都ヘルホルトに入る。とは言っても街に聖職者が大量に居て云々、という感じでは無い。至って普通の街だ。

この教会領は峠を隔てた史実のイタリア、トレントにあたる地域にマルタノ大司教区が存在している。

この2つの教会領は、数多くある大司教領の中でも重要な地域とされている。何故か？

それは、2つとも帝都へ向かう重要な街道と、山脈を越える峠を押さえていて、お布施と言う名の関税を大規模に入手できる上に、ハライン大司教区には、テルシュタイン銀山という、この周辺でも



最大の銀鉱山が存在し、マルタノ大司教領にも、銀鉱山や鉄鉱山が多く存在するからだ。

この街には宿屋が存在せず、修道院に宿泊する規則になっている。何ともあこぎな商売だ。宿泊する修道院を探していた時に問題は発生した。

「……お断りですな」

「異教徒は修道院へ立ち入る事を禁じています」

「……お引き取りを、異端が院内にいますと修道士に悪影響です」

訪れる修道院の片っ端から拒絶を喰らってしまった。予想はしていたが、ここまで露骨だと実に腹立たしい。トーマスの十字教嫌いも無理のない話だ。

しかし、このままでは今晚の泊まる場所が無い。

最悪、娼館で泊まるしかないが、女連れて行ける場所では無い。

十数件目の寂れた修道院で、ようやく宿泊許可が出たのは、日も暮れて、通りにいるのは巡回の兵士と、怪しい職業の女だけに成り始めた時だった。

「ほほほ、それは大変で御座いましたな」

「もう、既に晩課（午後9時）に近いので軽い食事しか出せませんが、ご了承ください」

その修道院は、修道士も数人しか居なく、壁も所々ひび割れている。

おそらく修復する労働力も、資金も足りてないのだろう。

「御恥ずかしながら、なにぶん人手が足りなくての：

しかし、当院のリクオル（リキュール）は旅の疲労回復には一番です、持って来ましょう」

修道院は“労働は祈りに繋がる”等という共産主義者の巣窟で、自給自足の共同生活を送っている。

修道院や教会では、ミサに使う蝋燭ろうそくやワインが大量に消費されるが、それを作っているのは修道院だ。

中世に盛んに行われた養蜂業は、甘味料の蜂蜜を入手する目的は勿論だが、

蝋燭に必要な蜜蝋みつろうを入手する事がメインだったと云う。

また、ワインやアルコールの製造業も現金収入の一環である。

現在の修道院でも、多くのアルコール類が製造されて出荷されている。

現在では修道院ビールの方が有名であり、多くのスタイルのビールが入手できる。

代表的な物は、ベルギービールのシメイの赤、青、白やレフシリーズ、オルヴァル、ウェストマール等だ。コリアンダー等の香辛料と、ホップの苦みのない小麦ビールの独特な風味と後味が面白い酒だ、一遍飲んでみる。

割り当てられた部屋に向かう、男子修道院は原則女人禁制だ。  
だが、こういう事も偶にはあるのか、1人別室での逗留は許可された。

まあ、フレイヤ女史なら、間違いを犯した修道士等が居ようものなら、

マチェットで脳天を叩き割りそうな勢いだから心配はないだろうが……

「なんて、ボロボロな毛布だよ……」

「屋根があるだけマシだ、小額の御布施で泊まれるんだ、我慢しろ」

鐘の音と共に目覚めると、着替えて、軽い祈りを済ませる。まだ、外は真っ暗だ。

「おい、早く起きろよ」

「んあー、朝まで寝かせろよ……」

「ここは何処だと思っている？修道院だぞ、普段とは違うんだ」

この時代の街での生活の時間は、鐘の音で決まる。  
季節によってもまちまちだが、基本的な時間は以下のように決まる。

- 1、朝課    || 午前2時    修道院での起床時間
- 2、讃課    || 午前3時    一般市民の起床時間
- 3、一時課 || 午前6時    ミサの時間、その後は朝食の時間
- 4、三時課 || 午前9時    仕事の時間

- 5、六時課 Ⅱ 午後0時 昼食
- 6、九時課 Ⅱ 午後3時
- 7、晩課 Ⅱ 午後6時 仕事終了、帰宅して晩ごはん
- 8、終課 Ⅱ 午後9時 就寝

普段が3時や4時に起床しているのが2時に叩き起こされるのだ、不満も溜まる。

一応修道院に逗留している以上、その規則には従わねばならない。修道士達と共に祈りを捧げる。一応、トーマスが参加する事も許可してくれた。

6時頃、ミサが始まる。聖堂に市民がまばらに集まっているが、空席が目立つ所を見ると、多くの者は、大聖堂などに集まっているのだろう。なにぶん人手が足りないので、私達も手伝いをする。

まず始めに、開催の儀で入祭唱を唱える。聖歌を合唱する人数が足りないのだろう。

その後、教会より来た司祭の挨拶が始まり、祈りが捧げられ、キリエが唱えられる。

聖書の朗読が執り行われる。旧約聖書（この世界では、前書と呼ばれる）の文を読み上げる。第一朗読が終了すると、第二朗読を詩篇の中から読み上げる。これは、答唱詩篇とくしょうしへんと言って、先唱者の読師どくしと信徒が交互に朗読する。終了後、司祭による副音朗読が行われる。

次の典礼は、祭壇にワインとホスチア（無発酵のパン、味無くて糞まじい）

を奉納し、司祭が、奉納文を唱える。そして、全員で賛美の祈りを

唱える。

その後、司祭がワインとパンを摂取して、最後の晩餐のお言葉を唱える。

最後の典礼が、交わりの儀である。主の祈りと神の子羊の祈りが執行され、

司祭がホスチアを引き裂き、ワインに浸して食べて、ワインを飲む。これを“聖体拝領”と言う。

その後、信徒達にホスチアを配り、参加者も聖体拝領せいたいはいりようを執り行う。

そして、閉祭の儀が行われてミサは終了した。

ミサの後は、修道士達の労働の時間である。季節によって仕事の内容は変わるが、秋の現在は、小麦の収穫や冬に向けた準備等、一番忙しくなる季節だ。私達も謝礼を兼ねて、労働する。

「腹減ったぜ…メシが喰いてえ……」

「修道院は基本ろくな飯無いからな、次の食事は九時課だ」

「まじかよ…」

「ギョンター！黙ってないで手を動かす！」

「そうだ、働けば自由になれる」

この時代の、聖職者の食事はミサで食べる聖体の後は、午後3時の食事まで待たないといけない。

しかも、その内容も……

「oh…ナンデスカ、コレ？」

「遠回しな自殺ですね……」

「修道士も大変ね……」

皿の上には、パンとワインとゆで卵に申し訳程度のチーズだった。肉食は禁止されているので、パンに塗る獣脂すら無い。

沿岸都市なら魚料理が食べる者も居るが、この山岳都市には、干し魚か川魚しか無く、高価だ。

何れにせよ、この修道院で食べることなど出来ないだろう……

「……どう見てもビタミンとカルシウムが足りてない。

案外、異端審問とかが増えたのも栄養不足と禁欲で発狂したからじゃないか？」

「ヴィト君何か言ったの？」

「……何でもない」

食事の後は、終課まで祈りの時間などに成るが、この際に場所を借りて、

3人に聖書の勉強を教える。教材も幾らでもあるだろう、院長は快諾してくれた。

書庫に案内される、手の空いているらしい院長と私でマンツーマンのレッスンだ。

トーマス達に教えるのは院長にお願いする。一応は私から概要は教えてあるから、細かい所の復習となるだろう。だが、問題は……

「さて、お前はとうすんだ？この大馬鹿野郎」

「……ゴメンナサイ」

馬鹿一名の思想教育を行う。コイツは壊滅的に物覚えが悪い、未

だに概要を覚えきっていない。

これを機に徹底的に自己批判させてやろう……

「その写本の福音書からだ、羊皮紙は高価だから間違っても汚したり、破損させたりするなよ？」

ギュンター曰く、この時の私は悪魔の様だったと言う。

その後、5時間かけて愛のシベリアンコントロール……もとい教育せんのうを実施した為、完全に燃えカスになったギュンター君。これで少しは真面目になると良いのだが……

千鳥足のギュンター引き連れて帰還する廊下で、院長が私に話しかけてくる。

「あなたの聖書への造詣ぞうし、驚きました。若いのに完璧に内容を諳んそらじる等、ご立派です」

「実は、以前は修道士を目指していたのですよ。もっとも、村が壊滅して断念しました」

「確か、シェーン村でしたな。あそこの司祭とは同じ修道院で修行しておりました」

「知っているのですか？」

院長は遠い目をして漆黒の窓の外を見つめる。

「ええ、マルティン司祭は高潔な人物でした。大司教区の腐敗を糾弾し、

枢機卿の忌避を買って、あのような辺境……失礼しました、あの地に送られたのです」

「そうだったのですか…」

顔も知らない人物に、そんな事情があったとは知らず複雑な気持ちになった。

翌日も朝課の鐘で起床する。毛布の中で服に着替える。私が着用したのは、修道士の服だ。

昨日の話を聞いた院長が、特別にミサの朗読を行わせて下さるそうだ。

「おはようございます、ベネディクト院長」

「おお、大変似合ってますよ。紹介しよう、この方がヨアヒム大聖堂のユリアン司祭だ」

「……宜しく」

院長に紹介されたのは、街の中心の大聖堂付きの司祭だ。

最近の院長は体調がすぐれないらしく、派遣された司祭が、毎日のミサを執行していると言う。

「そうとは知らず、昨日は遅くまで付き合せてしまい申し訳ありませんでした」

「気にしないで下され、足が痛むのでミサを行う事が出来ないだけです。」

こればかりは年齢によるものですから、魔法でも効果がありません」

「それに、部屋で祈りを奉げているのと、神の教えを説くのでは、



他者を導く方が重要ですよ」

一時課の鐘が鳴り、ミサが始まった。昨日とほとんど同じ手順で進んで行った。

そして、遂に私の出番の第二朗読が始まる。内容は“昇階唱”魔法の呪文にもなる基本的な文だ。

いつもとは違う読師<sup>どくし</sup>に注目を浴びるが、構わず進める。

「Requiem aeterna dona eis Domine et lux perpetua luceat eis.

」  
(主よ、永遠の安息を彼らに与え、絶えざる光でお照らしてください。)

「In memoria aeterna erit justus ab auditione mala non timebit.

」  
(正しい人は、永久に記録され、凶報にも恐れはしないでしょう)  
(詩篇112…6-7)

「……詠唱もお願いします」  
司祭の言葉に甘えて続ける。

「Absolve Domine, animas omnium fidelium defunctorum ab omni vinculo delictorum.

」  
(主よ、全ての死せる信者の靈魂を、余す所なく罪の鎖より解放してください)

「Et gratia tua illis succerren

te, merentur evader . iudicium  
ultionis.」

（彼らが主の聖寵の助けにより、刑罰の宣告を逃れ、）

「Et lucis aeternae beatitudine  
perfrui.」

（永久の聖光に包まれた幸福へ至らん事を……）

その後、ミサはつつがなく行われ、終了した。

ミサが終われば、間もなく街を出立する予定だったので、旅装へ着替える。

修道服を返却しようと、院長の部屋の扉をノックした。

「どうぞ」

「失礼します、お借りしていた修道服をお返します」

「おおそうか、もう旅立たれるのかね？」

「はい、余り寒くなる前に帝都へ行きたいのです」

「そうかね……」

院長は窓の外を覗く、街の通りでは市民達が収穫祭の準備をしていた。

あと数日もすれば、街もお祭り騒ぎなるだろう。その後は長き冬に耐えるように、街は静まり返る。

「先程のミサは見事だった…綺麗な教会語の発音だ、マルティン司祭の教えは君へ受け継がれたのだな」

「まだ、未熟者ですよ……」

「教会魔法も使えるのだろうか？その指輪は発動体だな」

「……はい」

私は、この人の良い老人を騙しているのだ。死後は地獄の第8層マーレボルジェの底まで叩き落とされるだろう。

「もし良ければ、この地に残りなさい。君の知性と理性なら、良き修道士になれるはずです……」

「いえ、行かせてください……私には、成すべき目標があります」

「それに、若い我が身では、ここの食事は満足できませんね。修行効率の向上のために食事の改善を要求します」

私の軽口に、院長は大笑いして1つの贈り物を下さった。黒ずんだ銀のロザリオだ。

「それは、マルティン司祭が昔使っていたものだ。

私には必要無いので持って行くと良い。よく磨けば色を戻すだろう」

既に飾りの文様は磨かれて潰れているから、金額的な物は大した価値では無いだろう。

しかし、このロザリオに詰まっている想い出は、貨幣で手に入れる事は出来ないはずだ。

逡巡しゅんじゅんしている私の手にロザリオを握らせて、肩を叩いて激励げきれいする。

「I t e, m i s s a e s t.」(往きなさい、貴方は遣わされた。)

それは、毎日のミサの閉祭の儀。一番最後に締めくくられる、ミサの語源となった言葉で意味は(i t e 行け) + (m i s s a 派遣) + (e s t 過去形)で「天に祈りは送り届けられた」や「聖者は、貴方の為に遣わされた」等、様々な意味が解釈されているが、この場合の意味は……

「おい、ヴィトまだかよ? 早く一緒に出発しようぜ!」

## 第17話 帝都への道

首都ヘルホルトを出立し、街道を東へ進み一日後の事だった。

「ギョンター、アレ見えるか？」

「ん、あの人だかりか？俺には良く見えネエ……」

「…私には見えるわ、荷馬車が襲撃しゅうげきされている、ゴブリンね」  
「どうします？隠れてやり過ぎしますか？」

「襲撃しているのは6匹か……」

馬車を護衛している人間は全滅したようだ、辺りには数名の遺体が転がっている。

「隠れても、後でバレルかも知れねえな……やろう」

普段はアレだが、戦闘時のギョンターは本当に頼りになる。

さすがパーティの隊長を務めているのは伊達では無い。戦闘時以外はトーマスがトップだが。

「こんな事もあるかと準備していたものがある」

「なんか、いいもんあるのか？ヴィト」

何処かの技術士官的な発言をして、かばんから導火線の着いた陶器製のビンを取り出す。片目を瞑つむって、親指を立てる。

「魔法のカクテルさ！」

導火線に着火して投擲<sup>とうてき</sup>する。ソ連外相歡迎用カクテル<sup>モロトフ</sup>? そんなチャチなものではありません。

投擲されたビンが山賊の頭上付近で爆発する。燃え盛るアルコールがゴブリン達に降りかかった。

「素晴らしい!! 最高のショーだとは思わんかね!？」

その正体は、キツイ蒸留酒に増粘剤の獣脂と酸化剤に硫黄を加えたビンと、口を塞ぐように小型の爆弾を取り付けたものだ。つまり、元祖ナパーム弾である。

のたうち回っているゴブリンを容赦なく始末していく。旅を始めてから、戦闘する機会が多いせいか、命を絶つことに対する忌避感が薄れてきている。

言葉遣いも荒くなって来たし……だいぶ染まって来たようだ。

「グギャーギ、ギャー、ギャー!」

「Fire in the hole!」

林から出て来たゴブリンの伏兵にもう一発お見舞いする。重いからさっさと消費したかったのだよ……つーことで御苦労さん。

いやあ、蒸留酒だから失敗するかと思ったが、案外上手く行くもんだ。

原価はかなり掛かったけど、十分な効果が得られたよ。

「いやあ、助かりましたよ。まさか、教会管理区内でゴブリンの集団に襲撃されるとは」

「申し遅れました。私は、へんれきしょうにん遍歴商人のルーカス・ドレクスラーと申します」

ルーカスは交易商人らしく、様々な地域の特徴が入り混じった服装をしていた。

膝丈まである毛皮の防寒服を着用しているが、その下にも厚手のカサツクをボタン留めしていた。膝までの短ズボンにも綿の詰め物が入れられ、靴下も、鹿の革で作られており、長い旅路を過ごすには最適の服装だろう。頭に被ったフェルト製のカッペロ帽の下から覗く顔は、日に焼けて赤い。

暗い部屋で銀貨を数える街商人とは、一線を画している。

「たまたま、いい装備があったからですよ。それが無ければ、難しかったですね」

「なるほどー、あれは凄まじい爆弾でしたね。私にも使えますか？」

「火を付けて投げるだけですけど、上手く空中で爆発させなければ、効果は薄いですよ？」

「それに材料費がかなり掛かるので、お勧め出来ないけど……」

材料の火薬とかスピリッツが安く入手出来たから、実験で作ってみただけだ。

こんなもん依頼で使ったら間違いなく赤字である。

「そうですか、しかし護衛が全滅してしまった。このままでは帝都へ帰れないぞ……」

「あなたは、帝都に向かわれるのですか？偶然ですね、実は私達もですよ」

トーマスの言葉に、ルーカスは笑みを浮かべた。

「そういう事でしたら、貴方達を護衛として雇用したいのですが……勿論、報酬は弾みますぞ」

馬車に荷物を載せて、徒歩で進む。いやあ、肩に重みが無いのはかなり楽だ。

「へえー、そうなのですか？銀の地金ですか」

「はい、ハライン大司教区で採れる銀は、量も多くて価格が安いのですよ。この地金を帝都で売却して銀貨に鑄造されるのです」

「それで、馬車が空っぽだったんだなー」

「銀は重いので、余り積み過ぎると馬車が壊れます。そうになったら破産ですよ……」

「他にも個人が購入できる量には大きく制限があって、私もこの量を購入できるようになるまでは苦勞致しました」

「と言う事は、この毛皮は偽装なのでしょうか？」



「左様です。尤も、それも立派な商品ですが……」

この時代の交易商人は村と街の価格差から、暴利を貪れるように思えるが、

交易は危険が大きい上に、購入量も組合に管理されて満足に購入する事はなかなか難しかった。

街の商人も自分達の仲間内を保護する事を優先させる。

酷い時は、商工会が領主と結託けったくして、交易商人の資産を没収したり、追放したりする。

つまり、ハイリスク、ハイリターンなのだ。その為に、商人達は自分を護る為にハンザ同盟を結成したり、イタリアでは保険制度や、銀行が発展し、為替手形や公証人を介し、公正証書等の作成を行った。

国が信用ならないから信用決済が発展したとは、何とも皮肉な話である。

荷物を背負って無いお陰で、予想より速い速度で旅を進められた。普段の2割増し位の距離だ。体もそこまで疲労していないし、今日は安眠できそうだ。

焚火を作ってスープを作る我々、ルーカスは黒パンとハードチーズかじを齧かじっている。

「宜しければ、食べますか？ 私達はスープ物だから、皆で食べられますよ」

フレイヤがルーカスに勧めると、嬉しそうな顔でこちらに来る。行商人だから、食費を削って商売をしているのだろう、しかし、金の為に生きるなんて寂しくないかね？

人生は楽しんでなんぼだと思うけどな……

乾燥玉ねぎと干し肉と豆で作ったスープを旨そうに飲む5人。

他には調味料に岩塩しか加えてないのに、なんでこんなに旨いんだ？

空腹は最大の調味料って言うのかな？

本当にフレイヤさんの作る料理は、屋敷に居た時よりもおいしく感じる。

火であぶって溶けたチーズを食べるルーカス、へえ、チーズってそんな食べ方もあるのか……

一方の私は石臼みたいに固いパンをスープに浸して、歯で削るように食べる。

マナーも何もあつた物ではないが、こんなもんまともに喰おうとしたら歯が折れる。

食事を終わると馬車の中で就寝した。何時もの癖で、何気なく“警鐘”を使ってしまう、ルーカスさんに驚愕されてしまった。今後は気を付けよう。

地面で寝ると体が冷える。それに、下が固いと落ちついて寝られないのだ。贅沢な暮しになれると言うのも問題だ。私が、毛布を買い求めたのもそれが理由なのだ。頭の下が固いと落ちつかないのだ。

安眠できないと、翌日まで疲労が残り、旅に影響する。たとえ熱を出しても、宿まで辿り着かなければ休む事は出来ない。魔法で直すにしても疲弊しては使えない。体調管理はすごく大事だ。

その後、数日間の旅を経て、帝国のランツフェルト州に入った。

史実のザルツブルク＋ケルンテン州を合わせた場所になる。帝国は、貴族領以外にも直轄州を幾つか抱えているが、ランツフェルト州は、鉱物資源に恵まれており、この地で産出する岩塩や金、銀が凋落<sup>ちようらく</sup>しつつある帝国を支えている、重要拠点だ。

当然、大貴族達も、この地の資源を狙っており、何かと理由を付けてこの地の下賜を願っているらしい。というか、帝国が有るからお前らも安寧な生活が出来るのだが。

その帝国が崩壊したら、大貴族が割拠するこの地は、格好の草刈り場となるのは目に見えているのだが、そこら辺を理解して……いないのだろうか……

州都ヴァルヒエンブルクに到着する。ルーカスさん曰く、この地には帝都に向かう銀商人が多く集まり、彼等とキャラバンを組んで帝都へと向かうとの事。まあ、人が多い方が安全だもんね。今日は街の宿屋に泊り、明日の朝一に出立するグループと共に行動すると

か。

馬車を宿屋まで連れてくる。商人向けの宿は四方を塀で囲まれており、中庭には馬車を停めるスペースが有り、馬は隣接する馬小屋に停める。門は日暮れと同時に閉じられて、宿泊客と宿屋の人以外は立ち入る事は出来なくなる。

ルーカスさんが、商人ギルドから戻ってきた。隊商は、明日の賛課に出立するらしい。

また朝課に起きるのかよ……依頼だから起きるけどさ。

翌日 まだ外は真っ暗なので、松明を頼りに広場に向かう。そこには、数台の馬車と商人、それから傭兵が十数人居た。

「おお、ドレクスラー久しいな」

「お久しぶりです、ノイマンさん」

ルーカスが、中年の商人と会話している。ノイマンが私達に気が付く。

「それが、お前達の護衛か？ 1人を除けば全員子供じゃないか？」

「彼等は冒険者ですよ、ゴブリンに襲われて命を落としかけた時に助けてくれたのです。腕は確かなので安心して下さい」

「お、1人可愛い娘が居るぞ、俺達の所へ来いよ！」

「ギャハハ！ やめろよ、ゲオルグまだガキじゃねえか！」

傭兵達の下卑<sup>げひ</sup>た笑いに、軽くイラッ☆としたので近づいて言い放

った。

「p a p e   s a t a n   p a p e   s a t a n   a l e p p e !」

私の早口が全く聞き取れなかったらしく、怪訝な顔をしていた。

「おっ：おう、何て言ったんだ？」

「ジゴクにおちろクソヤロウあんたの旅路に幸あれ、ってね」

「お、ありがとな！ポーズ！」

街を出て一時間後、キャラバンの遠くに数頭の騎馬が見えた。皆も気が付いたらしくルーカスが言った。

「あれは、盗賊だね。恐らくは南のマゼールランドの連中だ。あいつらの馬は小さいが、

すばしっこくて街の騎士団が来ると直ぐ逃げやがる。手に負えない連中だよ」

「こちらは30人近くも居る隊商だ。奴等も迂闊うかつには襲って来ない、大丈夫だろう」

ルーカスの指摘通り、盗賊は数時間の間は付かず離れずの距離を追尾してきたが、やがて何処かへ消え去ってしまった。

翌日は森林沿いの道を進め為に、馬車の両翼を警戒しながら進んだ。森の中はモンスターや盗賊が潜伏している事も有り、いつ襲撃

されるとも解らない状態に神経を尖らせた。

「大変だ！」

「一体どうしたんですか？」

「先頭の馬車が、泥濘どろぬまにハマっちゃまった。動かすから手伝ってくれ！」

傭兵に先導されて行ってみると、2頭立ての馬車の片輪が見事に沈み込んでいた。馬車の持ち主の商人と、その弟子がもがく馬を宥なだめようとしているが、興奮していて危険なので近寄れない。

「私に任せてください。ヴィト君、聖水を貸して下さい」

トーマスが杖を持ちながら、呪文を唱えつつ聖水を馬に振りかけると、暴れていた馬が次第に落ち着いて、やがて平常心を取り戻した。

「治癒魔法の一種で、興奮している者を鎮静ちんせいさせる術なのですが……馬にも効果が有ったみたいですね」

トーマスの活躍に商人や傭兵達が歓声を上げる。後は、泥から脱出するだけだ。

「おっしゃ！丸太持って来い、丸太ア！」

「敷き藁と板も持って来い、この先の水たまりを先に潰しとくぞ！」

その後、数十分掛けて馬車を脱出させると、皆から歓声が上がった。特にギョントーの見かけとは裏腹の馬鹿力と、怪我をした傭兵への私の治癒魔法が、賞賛しょうさんされてどうもむず痒かった。

一週間かけて道を進み、帝都まで残り数時間の距離だった。この旅の間で商人や傭兵達と親密になれた所が嬉しかった。彼等と交流して話を聞くと、さすが各地を転々としているだけあって、ためになる情報や、役に立つ知識を得られた。傭兵の中には冒険者辞めて俺らと行こうぜ、と誘ってくれる人も居た。

「おい、盗賊だ！」

後方を見つめると、出発した当日と殆ど同じような騎馬が遊弋ゆうよくしていた。

しかし、今回は、その数も数十頭と大幅に増えていた。

「ありゃあ、本気でやる気だぜ……やべえな」

傭兵の一人が呟く。自体を察知したノイマンが皆に指示を出す。

「皆聞いてくれ！奴等は私達を襲ってくるだろう」

「出来るだけ早く逃げれるように、軽い馬車から先頭に行こう」

私達の馬車は2頭立てだが、馬車自体の大きさはそこまで大きくなく、荷物も積み過ぎてない。移動力は高かったので、先頭の方に移された。

だが、4頭立ての幌馬車や、荷物を大量に積んでいる馬車は、慌てて商品の一部を捨てて、何とか走れるように調整していた。

手綱を加えて馬車を走らせる。5人乗ってもこのスピードとは馬  
って凄いな。

後方を見ると、馬車の荷台から、矢が射掛けられている。しかし  
盗賊は巧みに馬首を返して矢を避ける。

一台の馬車が遅れてる……欲を張り過ぎたか、慌てて荷物を捨て  
ているが遅すぎる。

荷馬に矢を撃たれて一台の馬車が転倒した。盗賊達が殺到して、  
傭兵が寸刻みで殺されてしまった……

「おい、前方を観ろ！」

アルノルトさんの言葉で前を見ると、盗賊が箱や樽で道を塞ぎ、  
手ぐすねを引いて待ちかまえていた。

ここで殲滅する気か！

「やむを得ん！道を外れるぞ！！」

街道を外れ、原っぱを強引に突き進む、振動も凄まじくなり、ま  
ともに立っている事も出来なくなった。

馬車の車輪が悲鳴を上げている。頼むから街まで持ってくれよ！  
ここで細切りにされるのは御免だ！



再び、数頭の騎馬が我々を追い始めた。こうなっては仕方ない、我々も応戦する。

「ルーカスさん！私にそのクロスボウと滑車を貸して下さい！」

「使ったことあるのかね！？」

「照準の付け方は銃と変わりません！フレイヤのやり方見てたから、装填も出来ます！」

ルーカスよりクロスボウを分捕り、ベルトに滑車を付けると急いで装填を始めるが、揺れる馬車ではなかなか上手くいかない。糞っ！弓でも持ってくれば良かった。トーマスも魔法を撃ち放って盗賊を仕留めている。

「ヴィト！私のクロスボウを使いなさい！滑車とソレ貸して！ギョンター！近づく馬鹿はなますにしない！」

フレイヤのライトボウは滑車を使えば強く装填できるが、別に無くても装填できるボーガンみたいな奴だ。そうでないと10秒に一発とか無理だ。フレイヤは馬車に寝転がり壁に足を付けてベルトを装填している。

……なるほど、揺れる馬車ではそうやればいいのか。

石弓を構えて狙いを定める。相手の移動する位置を予測して……今だ！

「うグオ……」

盗賊の右目にボルトが吸いこまれた。崩れ落ちる……次だ。

「ヒヒヒーン！」

第2射は馬に命中する。盗賊は暴れる馬に振り落とされるが、あぶみ鎧に片足が引つ掛かり、そのまま引き摺られて、何処かへ消え去った。

……なるほど馬を狙えばやりやすいのか。

第3射も馬に命中する。今回振り落とされた盗賊は、暴れる馬に踏みつぶされた。

その瞬間、赤い花びらが盗賊の口から飛び散るのが見えた。

「ヴィト！やるじゃない。私といい勝負の腕前だわ！」

そう発言しながらも、フレイヤの放つ矢は確実に山賊を仕留める。いつの間にか数を減らした盗賊は、散り散りになり逃げ出した。

ふと前を見ると、帝国軍と思われる騎兵部隊が盗賊目指して喊声を上げて突撃していた。そして、帝都の城門はもう目の前に近づいていた。軽装騎兵が我々に並走して来て話しかける。

「我々は、帝国軍ゴルゴシュミット連隊の第4騎兵中隊です！」

「帝都へようこそ！市内に入ったら、詳しい事情をお聞かせ願います！」

無事に到着できた……その安堵感から馬車上にへたり込む我々……こんな依頼受けなきゃ良かった。



## 第18話 決闘

帝都に到着した私達は、城門横の詰め所で事情聴取されることになった。最も、概要は見ての通りだったので、説明する事もあまり無かっただが……

「商人達の遺体と遺品を回収してまいりました。何分、盗賊に荒らされてしまったので、全てとは参りませんが……」

「うむ、御苦労であった。下がってよし」

「遺品と遺体はどうするね？」

「彼らの所属していた商業組合に届けて頂けますか？故郷に家族がいる者には遺灰と遺品を送ります」

「……身寄りのない商人は、組合の方で葬儀を上げます。遺品もそちらで処分するでしょう」

「死んじまったら、保険金も受け取れねえだろ……馬鹿野郎」

ノイマンさんはそう呟くと、馬車を連れて商業組合に向かって行った。

「さあ、私の所属組合の商館へ行きましょう。そこで商品を売却して今夜は逗留します」

ルーカスさんに案内されて、到着したのは彼が所属する組合の商館だった。既に、我々が襲撃された事を知っていたらしく色々噂さ

目を閉じて、腦裏に浮かんだのは自分がこの手で命を奪った盜賊達の姿だ。右目を貫かれて絶命する瞬間あげた断末魔が、私の耳の奥に今も癒着している。馬に胸を碎かれて、血の噴水を演出した男、首を刎ねられた傭兵、串刺しにされた商人、腐乱した遺体、絶命した母上。そして、今際の時に見えた、車に撥ねられて血にまみれた自分の右腕……

[illegible]

300

鞆から修道院で頂いたりキュールを取り出し、蓋を開封する。薬草の香りが辺りに広がるが、今の私に必要なのは味じゃない。そのまま直飲みして、蓋をして鞆に戻した。仰向けに倒れて、天井の木目を見つめていると、全身の鼓動が速くなり、思考がぼやけて来た。いい気持ちだ……これようやく……眠れる……

目が覚めると部屋には誰も居なかった。窓を開けて外を見る。出ている露店の客層や太陽の位置を観る限り、朝の9時位か……随分寝坊したな。昨日はいい感じに酒で意識が飛んでくれて良かった。

ベッドに座り、しばし物思いに耽っていると、扉が開く音がした。なんだ、ギョンターか。

「ヴィト、起きたか。飯食いに行くぞ」

「……今はいいかな。昼に食べるから安心して」

「あーもー、めんどくせえ！ほら、行くぞ！」

「ちょっ、待て、引っ張るなよ！」

人間一日や二日喰わなくなっただって生きていけるさ。少し放っておいて欲しいな。

「お前、昨日も殆ど手を付けてないじゃんか、どうせ昼も同じだろ！」

ギョンターに引き摺られて到着したのは、街の市場だった。その後は川原に向かい、川を眺めていた。

「ほら、石榴だ。せめて果物位なら喰えるだろ」

「……ありがとう」

ギョンターに手渡された果実を手で割る、種が少し飛び散った。少し口に運ぶと、ベリー様な酸味が口に広がった。これなら食べれるな。

そういえば石榴って、人の肉と同じ……

そこまで考えると、昨日の寝る直前の光景が脳裏に浮かんた。思わず、石榴を叩きつける。

「ヴィト！大丈夫か！？」

「……うん」

「……やっぱ、昨日のアレか？」

「ああ、人をこの手で殺めたのは、初めてだったから……」

「やっぱりか、二人とも心配してたぜ」

「……悪い」

ギョンターは堤防に寝転がると、青空を見上げる。

「俺もモンスターとか倒すのに躊躇はないけど、人を斬るのはどう

もな…」

「でも、しょうがないだろ。ああいう時は、殺らなきゃ俺達が死んでたよ」

「それに、フレイヤなんか捕まったら、死んだ方がマシって目に遭わされるぜ」

「……俺は、皆が死ぬのを見るぐらいなら、誰だって斬れるさ」

「……そうか、そうだね」

「うん、じゃあそろそろ宿に戻ろうか。多少気分も良くなったしね！」

こういう世界、こういう生き方では、人間を殺める事など前世と比べ物にならないほど多い。

命の値段ははるかに軽いのだ、どこかで妥協をするしかない。過ぎた事に心を惑わされてはならない。

元氣を取り戻した私の姿に、トーマスさん達は安堵したようだ。彼等と今後の旅路について相談する。

「今後だけど、どの方面に向かう？北の方はこれから寒くなるし、早くしないと街道が雪で塞がれる」

「東のマゼールハンガリーランドはどうか？後は南のエトルリア半島とかはダメ？ヴィト君いるし」

「マゼールは治安が宜しくないらしいですね。近年、独立運動が盛んだとか…」

「半島でも良いけど、どうせならグラエキアギリシャはどうか？あそこなら温暖だし、冬でもすごしやすいかも。俺、グラエキア語理解でき



るから」

「青い海！暖かい気候！古代遺跡！いいわね、賛成よ！そこにしましょう」

「あそこなら、治安も安定しているらしいし良いですね。」

ラグーナ商人も多く訪れるから、覚えた俗語も役に立つでしょう」

「おう、俺も賛成だ！決定だ！」

「なら、早くした方が良いね、11月の末にはラグーナの商船も交易をしなくなるから」

この時代の商船は冬の間は余り交易を行わない。幾ら穏やかな地中海でも波は荒れて、危険だった。

その上、ラグーナ共和国の交易用の商船は、喫水線の浅い2～3本マストの大型ガレー船だ。ひとたび波が荒れば、漕ぎ手も乗客も水浸しになってしまう。とても冬の期間の交易には向いていない。

進路が決定し、ルーカスさんから報酬を受け取り、別れを告げる。本人は北に毛皮の買い付けに向かうので着いて来て欲しいと頼まれたが、目的地が違うので丁重にお断りする。

南に向けた依頼を探しに冒険者ギルドへ向かう為に商館を後にして、広場を通りかかった時だった。

「見つけたぞ、ギウンター・シュヴァルツシルト」

「カールマティアス・フォン・キュヒラー！」

「そうだ、貴様に貴族の面目を見事に潰された男だ」

キュヒラーの風体は、身長は180cmで金髪碧眼、掘りの深い顔、筋骨隆々な惚れ惚れするような典型的アーリア人種だ。髭の伍長が見たら、腕に入れ墨を彫って連れて行かれそうだ。

「久しぶりだなフレイヤ、君も壮健で何よりだ…」

「やだ…：…なんで、あんたがこんな所に居るのよ…」

「それは、だな」

キュヒラーは手袋を脱ぐと、ギウンターに叩きつけた。

「…：…我が名誉を回復するためだ！」

キュヒラーの刺すような目線に皆が釘付けになった。

「明日、火曜日の一時課（午前6時）に教会裏の墓地で待つ。  
来るか来ないか貴様の自由だが、来なければ敗北として貴様の名誉は失墜する。好きな方を選ぶ」

「ギウンター、こんな挑発乗る必要無いわ、行きましょう」

「フレイヤ、これは私と奴の名誉の問題なのだよ。貴女に口を出す権利はない」

ギウンターは足元に落ちた手袋を拾い上げる。

「…：…確かに、あんたの名誉を汚したのは俺だ。でも、あの時の行動は正しかったと思う」

「それを決めるのは、明日の朝だ……逃げるなよ」

そして、広場を立ち去るキュヒラー。後に残されたフレイヤがギウンターに突っかかる。

「ちょ、ちょっとなんで決闘なんか受けるのよ！あんな奴、放つとけばいいじゃない！？」

「フレイヤ、騎士を目指してた人間なら良く判るのさ。名誉の重みがな」

「そうですね。男には退けない戦いがある、って奴ですね」

「へえ、トーマスさんって意外と情熱家なんですね」

「……意外と、は酷いですよヴィト君」

翌朝、朝霧の中を墓地へ向かうと、霧の中にシルエットが浮かび上がった。

キュヒラーは紋章入りのサーコートの下に鎖帷子を着込んでいた。装備しているのは、バスタードソードと言う1，2mの片手でも両手でも使用できる剣にカイトシールドを装備していた。

対するギウンターはいつも通りのハーフアーマーと、脚甲、右腕だけに腕当てを装備し、ケトルハットを装備していた。

「……ほう、今度は逃げずに来たか」

「俺はそんな真似はしない」

「ふん……では、始めるとしようか」

「審判は私がする。互いに剣による一騎打ち、勝敗は、続行不能になるか、死、までだ」

「銃は遣わないのか？」

「ああ、こんな街中で発砲したら警備兵が来るからな」

「……いいだろう。だが、審判員はするなよ」

鐘の音が鳴り響き、決闘の開始の時間を知らせた。

「うおおおお！」

ギンターが氣勢と共に長剣を振り下ろす、キュヒラーは盾で弾き返して切り返す。盾を構えて後ろに飛び避けたが、相手の剣の射程は長く盾の表面が削り取られる。

「ギンター！」

「フレイヤさん！出てはいけません」

キュヒラーはその剣の長さを生かして、距離を取り攻撃を加えて行く、さすがに熟練の騎士の連撃にギンターも押されるが、果敢に反撃を加える。

ギンターは相手の剣に盾を抑えつけて、自由を奪い、懐に入り剣を振りかざす。しかし、予想されていたのか、蹴りを喰らい跳ね飛ばされるギンター。その隙を逃さず、長剣を振り下ろされる。

その追撃を寸前で回避する。隙を見たギンターは剣の射程内に入り込み、なんとか戦闘に持ち込んだ。

「ふん、やるな！」

一度、自分のペースへ持ちこんでしまえば、そこは実戦に次ぐ実戦を重ね続けた男だ。旅の間で得たスタミナもあり、果敢に攻撃を掛ける。逆にキュヒラーは重い剣が災いして、体力的にも、スピード的にも徐々に追い詰められていく。

「くっ、おのれ！」

「喰らえッ！」

ギウンターが剣を突きたてようと、突貫した。その様子も見たキュヒラーがにやりと笑った。

ミシリツと音がして長剣がキュヒラーの盾に突き刺さる。しかし、キュヒラー自身には刃は届いてない。キュヒラーがギウンターを蹴飛ばし、盾を投げ捨てると、剣を奪われたギウンターに残された反撃の手段はもうない。

剣を両手で構えて、攻勢を掛けるキュヒラーと何とか盾で身を守るギウンター。

勝負ありだ、ここで幕引きにしないと……

「よし、もう続行不能だ。しょ……」

「ヴィト！まだケリは着いてねェ！」

何バカな事言ってるんだ！？死ぬ気か！

遂に盾が叩き割られて、一切の武装を失ったギウンター。バスタードソードが振り下ろされる刹那。

「もう、辞めて！」

ギンターを抱きかかえて、キュヒラーを見据<sup>みす</sup>えるフレイヤ。キュヒラーの顔<sup>たちま</sup>が忽ち苦痛に歪<sup>ゆが</sup>む。

「勝負あり！ 審判命令だ、もう辞めろ！」

こうして決闘は終了した。

「……ギンター、大丈夫？」

「今、治療魔法を掛けますね」

ギンターに駆け寄る二人。そんな彼らに近づこうとするキュヒラーの前に、私は立ち塞がった。

「あなたが勝者だ。だが、フレイヤを無理矢理連れて行こうとするのなら、私が相手だ」

「……君は何を言っているのだ？ 彼女が望みもしない事はしないよ」

「この決闘は単に私の名誉の問題だよ。あの一件について今更、掘り返さんよ。」

最も奴が命を落とす羽目になったら、一度連れ帰らねばならんがな」

キュヒラーは呆れた表情で、私に手紙を託した。

「これでは、私が悪者みたいでは無いか。

この手紙は彼女の父親からだ、落ちついたら手渡しておいて欲しい  
……ではな」

そう言うと、キュヒラーは墓地から立ち去った。  
ふと周りを見渡せば、霧は晴れて通りには徐々に人通りが増え始めた。

翌日、我々は帝都を離れて、街道を南西へと進んでいた。  
目的地はラグーナ共和国だ。そこから船でグラエキアまで向かうのだ。

「ああ、そうだフレイヤさん。手紙を預かっていました」

「へっ？私、誰から？」

「父君だそうです。どうぞ」

フレイヤに手紙を渡すと、封を開けて読む。

「心配掛けるな馬鹿娘、一度戻って来い。」

シュヴァルツシルト家には私が説明した、だって！やったあ！」

「それは良かったですね。来年暖かくなったら、行ってみましょうか」

「でも俺、兄貴達に折檻おしおきされるのは間違まちがいねえよな……」

「良いんじゃないの？つか、それ位制裁てんばつ無いと世非モテの男共が許さん。  
むしろ死ぬ」

「ヴィトの裏切り者オオオ！」

去年の今頃はこんな風に気の合う友人達と旅するとは思わなかったな。

父上、母上、兄上、私は今、楽しく過ごしています。どうか、天より見守って下さい。

第2部 完



## 第18話 決闘（後書き）

感想欄でも述べましたが、現在裏で別作品を作成中です。

そのため、今後この作品の投稿間隔が少し空くと思います。

別作品のタイトルは「海の都の少女（仮題）」で、

16世紀ヴェネツィアの少女チェーリアが主人公です。

ネタ成分は殆ど無い恋愛モノで10話前後で完結します。

早ければ土曜日に投下しますが、何分時間が無い為遅れる可能性が高いです。

つまり、今の書き貯めを落としたら、次の更新が2週間ぐらひは空きそうだ…

## 第19話 新たな船出

「ここが、かの水の都ですか……」

「すっげーな、道も家も全部石で出来ているぜ……」

「どの建物も綺麗ね……」

「冬だからそこまで匂いは無いけど、夏になるとかなり臭いらしいよ」

「気分を壊す事言わないの！」

我々が、ラグーナ共和国へ到着したのは、万聖節の3日後、11月4日だ。

ラグーナ共和国は、エトルリア半島北部でも、ブレンダーノを凌ぐ国力を持っているが、海外に植民地が多く、その方面にも戦力を回さなければならない。海軍においては、この世界のトップクラスの戦力を保有しており、過去には、ギアーノ共和国と熾烈な覇権争いを繰り広げ、遂には勝利をおさめ、地中海の女王として君臨している。

政治政体は貴族制＋寡頭制で、各家から1人選ばれる120人の貴族から成る元老院と、投票で選ばれる40人委員会と10人委員会（実際の人数は15人）、元首が治める国家だ。

まあ、解りやすく言えば、元老院が議会、40人委員会が閣僚、元首と10人委員会が総理にあたる物だろう。

「こんにちは、ラグーナへ、ようこそ。何かお困りな事は無いですか？」

警士の男が帝国語で話しかけて来た。さすがに各国に商人や、観光客が多く訪れる国だけあって警士でも、他国語が操れるとは……

「俗語で大丈夫ですよ。グラエキア方面に向かう船を探しているのですが、交易船で東方航路に出る船は無いですかね？」

「S i c a p i r e ! そうだったのか済まない。あんたらの格好、帝国風だったからな」

「それと、今の季節、商用ガレーはもう動かなねえよ。唯一南下するのは、年末に向けて、故郷に戻るグラエキア傭兵の船だな」

「あの連中がそうだ。あの旗印は、たしかアリストス傭兵团だな。話をしてみると良い」

警士に紹介されたのは、黒髪の縮れ髪で浅黒い肌の男だった。名前をアルゴニオンと名乗った。事情を説明すると快く快諾してくれた。

「用件は解った。まあ、良くある事だし、君達以外にも同行者が何人か居るから構わんぞ」

「一応、俺達はミノア島（クレタ島）迄行くが、何処で降りる？」

「ケクロピア（アテネ）共和国で降りるつもりだけど……」

「悪いがその地は寄らない。どうしても行きたければ、メッシニカ辺りで下船するのだな」

トーマス達と相談した結果、ミノア島まで行く事となった。ミノア島は、ラグーナ共和国最大の海外地で、この地で産出する貝紫や大理石等がラグーナへ運ばれ、高く取引されている。住民も、エトルリア系とグラエキア系が生活していて、どちらの言語も通用する。

「一応、食事は用意するが……女が居るな。同行者にも女が居るから同室にしよう。男共はどうする？ 雑魚寝なら1人4ドゥカート。個室なら1人15ドゥカートだ」

「3人で寝るから1つの個室でいい、もちろん敷布団は貸してくれるな？」

「分かった、出港は2日後の朝、ここに来てくれ。船旅に必要な物は解るか？」

「今回が初めてだよ」

「そうか、おいリュロス！ 彼等に必要な買い物に付き添ってやれ」

リュロスと言う男に付き添われて行ったのは、酒屋や雑貨屋、肉屋などだ。食事は出るんじゃないのか？ と聞いたら、やる事も無い船旅で退屈するから買っておいの方が良い。と返された。確かにそうだ。

購入したのは、サラミやハムのような保存性の高い食品、チーズ、果実の砂糖漬けやシロップ等だ。他には、ミノア産のブランデー、あっさりしていて飲みやすいと言う事で購入した。雑貨としては、金タライを購入した。何に使うのかと聞いたら？ 直ぐに分かるさ。

と答えられた。どーゆーことやら。

その後、安宿に泊まったが、値段の割には寝具が綺麗だったのを覚えてる。翌日は街を観光した。船遊びをする時に漕ぎ手がボツタくろうとしていたが、俗語で軽く罵倒してやったら、適正価格に戻した。

翌朝、霧が立ち込める中、元首宮殿の横の河岸に行くとアルゴニオン以下、数十人の傭兵と、数人の冒険者と見られる人間が待機していた。それ以外にも、黒いトーガを着た貴族と見られる男性にその従者も居た。

「今回、ミノアまで行く船は、沖に停泊しているあの船だ」

リュソスが指さしたのは、40m位の大きさを3本マストの帆船だ。船首楼と船尾楼の形から、船種はキャラック船と推測される。

キャラック船、15世紀に開発された大型帆船で、コロンブスの大西洋横断のサンタ・マリア号が有名だ。排水量も200トン以上もあり、積載量も豊富で、遠距離航海にはうってつけの船種だ。最も、その積載量の多さが災いして、機動性はキャラベル以下で、座礁したり、艦隊行動に後れを来したりして、コロンブス先生も「(#ω#)ビキビキ」だったそう。サンタ・マリア号が座礁した時も、嬉々としてニーニャ号に乗り換えた。

「あの大きさだからな。余り湾内深くには近寄れないのさ。試して一隻建造されたらしいが、次からは小型の船に造り変えるらしい」  
「荷物だけは多く詰めるからな。小麦とか材木とか、腐らない物とか、時間が掛かっても問題無い物を輸送するのは向いている」

地中海でガレー船が長期の間その主役を務めたのは、安定した速度で航海出来るからだろう。たとえ、風が凪いでも、オールを漕げば前へ進めるが帆船ではそうはいかない。

また、地中海が比較的波が穏やかだからだ。北方のバイキングもガレー船だが、あの辺りもバルト海だから内海で波は穏やかだ。

これが、北海、大西洋だとそうは行かない。波風も強く、ガレー船ではまともな航海は難しい。ユリウス・カエサル「ガリア戦記」の中でも、ガレー船主体のローマ海軍が丸型帆船のガリア軍と戦い苦戦している。戦いその物は、ローマ軍が勝利をおさめたが、その理由は、ガリア軍は、運悪く風が凪いで立ち往生した所を、帆やマストを鉤で引き倒されて、接舷されて白兵戦で確固撃破と云う物だった。

そして、ガレーは機動力こそ高い物の、漕ぎ手を多く必要とする上に、喫水線も浅く積載量は低い。つまり、多くの港に寄港する必要がある、遠距離航海に向かない。

ラグーナ共和国が補給基地の確保に命を燃やす理由である。また、人件費も多数掛かる為、単価の低い交易品を輸送する訳にもいれない。よって、主力交易品は単価の高い武具、美術品、ガラス細工、絹織物、香辛料等の豪華品の交易に特化して行った。

ただし、干潟の上の都市と言うあり方を観ての通り、食料の自給率は極めて悪い。食糧の小麦の多くは、ブレンダーノ公国の南にある「水晶同盟」と言う都市国家連合や、最大の交易相手に、史実のエジプトの位置にある。イアフメス朝等からの輸入している。それらは大量に輸送する必要がある、帆船で運ばれているそう。少なくともゴンドラとか漁船みたいなのでは交易はしない。

これは現代でも変わらないだろう大型帆船をタンカー、ガレー船を空輸と考えてくれば、簡単に想像が出来るだろう。

材料や、原油の輸送はタンカーやコンテナ船で、高価な品は空輸で、頭がハッピーになれる“白い粉”は、モーターボートでアルバニ…  
…おっと、つい熱くなりすぎたようだ。

「この小船で船まで行くんだ。5人ずつ搭乗して行け」

小船で、キャラック船まで向かう。揺れる船に、立っていられず思わずしゃがみ込む。我々の姿に、同乗していた女性が笑いながら話しかける。

「ははっ、情けない姿だねえ。あんたら船に乗るのは初めてかい？」

「すごいですね。よく揺れる船の上で立っていられますね」

「あたしは、既に慣れっこだからね。で、嬢ちゃんがあたしと同室の子だね？」

「多分……あつ、私フレイヤって言います」

「そんな、畏まらなくて、いーって。あたしはヘレネって言うんだ。よろしく」

ヘレネと名乗った女性はブロンドのシニヨンに、意志の強そうな青

い瞳、少し日に焼けたのか鼻筋や腕が赤く、肩に麻袋を下げていた。服装はアテナのレリーフのような純白の短衣と長いスカート姿で、腕をあげすけに出すなど、帝国やエトルリアではあり得ない服装であるが、グラエキア地方では一般的であるのか平然としていた。

「ヘレネさんも冒険者なの？」

「まねー、17の時からだから……もう4年目かな」

「なあなあ、杖を持ってるって事は魔法使えるのか？」

「あーこれね、この部分を押さえるとね」

シャキン、と言う音と共に杖の先から刃が出て来た。

「巡礼者の杖ですか……」

「お、坊や良く知ってるじゃない？」

巡礼者の杖、とは聖地巡礼等に出かける旅人が、護身用に持つて行く仕込み杖の一種だ。その起源は古代の演劇で使われる、物に当たると刃が引っ込む短剣だ。現代でも子供のおもちゃで、縁日等で売られてるアレだ。

「他にも投げ矢とか得意だね。よほどの事がない限りは外さないよ。お金が足りなくなった時はよく的当てとか賭けで稼いだりしたもんさ」

「へえ、それは心強いですね……おっと、そろそろ到着しましたよ」

梯子を伝って、甲板に上がる。海風の風外套がはためく。

「ようこそ、アンジェラ号へ、俺は船長のクエリーニだ。航海の間宜しくな」



クリエーリ船長は40代位のいかにもな海の男だった。後の彼の話曰く、彼の兄は元老院議員で、無給の兄の食い扶持は俺が稼いでんだ、と豪快に笑っていた。ラグーナ貴族は、必要経費以外は無償奉仕という国家なのだ。

「帆の交換作業の間や、天候が荒れた時以外は、自由に甲板を見ていいぜ。特に今後一週間は嫌でも甲板に居るさ」

クリエーリ船長はよく分からない笑みを浮かべて、歓迎してくれた。

## 日記 著 v i t o

11月6日 遂に、錨を上げてラグーナを出港した。と言っても、夜には対岸の都市へ着いた。水、食料などはこの地で積み込むらしい。船の食事は想像より酷くは無かった。メインは固焼きのビスケットだが、砂糖が入って無いので味はクラッカーに近い物があった。

11月7日 昼までに資材の積み込みが終わり、順風にも恵まれて、出港する。良い出だした。このまま順調に進めばイゼルティア地方（クロアチアのアドリア海沿岸）の軍港ジャデーラには3日後には着くだろうと言っていた。

11月8日……船酔いが酷い。金タライが要るとはこういう事だったのか……我ら旅慣れない冒険者が完全にダウン。正直日記を書くのもつらい。フレイヤに面会しようと部屋に行ったが、女の情けだ見るな、とヘレネに追放された。甲板に出たら皆に笑われた。人の不幸を笑うとは酷い奴らめ、地獄へ落ちろ。

11月9日 不幸は重なる物だ。風が逆風になってしまった。こうなると船はジグザグに進むしかなくなる。この船のマストは3本で、中央の帆が四角の帆だが、逆風になると畳んで前後の三角帆の2本で航海する。速度も落ちるわ揺れも酷くなるわ、たまったもんじやない。ふざけるな！

11月10日 あろうことか、風が凪いで船が動かなくなってしまった。なんてこったい。だが、そのお陰で、吐瀉物の揺りかごは停止して少しずつ気分が回復してきた。船の揺れにもだんだん適応して、壁に手を突かずに歩けるようになった。

11月11日 微弱だが順風が吹いた。船が動き出した時は皆でお祭り騒ぎだった。船の揺れにも適応して食事がのどを通る。だが、トーマスはまだ適応しきれていない。顔を青くしている。元々青かったが…。食堂帰る時も、揺れで転倒して頭を打ってた。無理すんなよ、おっさん。

11月12日 気分が回復したので甲板へ出て船員たちの作業を観ていた。あんな高いマストに命綱も無しに良く登っていくよ。実際、事故も結構起きているらしい。だから船員の募集は年中掛かっているとの事。日が暮れた夜、ジャデーラに到着したが、危険なので接舷は朝に行うとの事。投錨して夜は停泊した。

11月13日 朝にジャデーラ着。食糧の積み込みもあるが、気分を害した人達の回復の為に2日間停泊するとの事。今まで船の中に居たせいか、地面に居ると妙な違和感を感じる。適応力って恐ろしいな。

11月14日 町を観光した。売り込みなどがしつこかった。彼等

は近隣の村人で、商品を売ってお金を稼いでいると言う。私やギョ  
ンター全く興味無かったが、トーマスが何か珍しい薬草を見つけた  
ようで、乾燥した葉っぱを数袋購入していた。末端価格幾らだろう  
？ 危ない物じゃないよな？

11月15日 本来なら今日が出港だが、風向きが良くないらしく  
取りやめだそうだ。ヘレネがフレイヤに葉の冠を作っていた。あの  
二人随分仲良くなったな。

11月16日 ようやく出港だ。追い風に恵まれて、船が南下する。  
そうだ、皆にグラエキア語を覚えて貰うか。片言位でいいから話せ  
るようになれば、ずっと楽になるだろう。3人を呼んで、甲板でグ  
ラエキア語の青空教室だ。すると、フレイヤは既にヘレネから少し  
だが教えて貰ってるそうだ。なら、フレイヤの方はヘレネにお願い  
するとして、私はギョンター達を教える。ギョンターは引き攣った  
顔で逃げやがった……あつははは！ 何処へ行こうというのだね！？

11月17日 ヴイトのぱーふえくと語学教室が始まるよー。と言  
う事、でギョンター達にグラエキア語を仕込む、教材はディゴメデ  
ス法律書だ。古代の法律書で、民衆に法律を解り易く説明するため  
に、簡易な表現や、実際の裁判記録等がまとめられている。本自体  
は所持して無いが、頭の中に大体のあらすじは入っているから問題  
無い。こうして勉強しているうちに傭兵団の連中が参加してきた。  
彼等もあれこれ口に出しているが、あんたらの俗語は訛りが強すぎ  
て、ギョンター達には理解できないぞ。片言の中国人が、日本人に  
英語を教えるようなものだ。傭兵団の連中にも正しい俗語を叩きこ  
んでやる。

11月18日 今日語学教室を続けていると、ラグーナ貴族の人  
が話しかけて来た。名前をサグレードと言うらしい。なんか、ディ

ゴメデス法律書を探しているらしくて、持っていたら譲って欲しいとの事。残念ながら、幼少住んでいた教会に有ったが、焼失したと説明したら残念そうにしていた。可哀そうだったので、不完全な写本でいいなら作りましょうか？と説明したら喜んでくれた。そして教会語（ラテン語）とグラエキア語のどちらで書きましょうか？と聞いたら驚愕していた。と、いうのもこの本は、初版はグラエキア語で書かれているが、この世界の本は教会語で書かれるのが一般的、多くの写本は教会語で書かれている。私が所持していたのはグラエキア語版だ。正直そちらの方が楽なのだと説明すると、貴重な文化財が…と嘆いていた。

11月19日 ラグシウムに入港する。この街で補給をすると早々に出港した。理由は近年、海賊の被害が多く発生して、機動性の低いキャラック船の単独航海はいい獲物らしいからだ。駐留艦隊のガレー船3隻が暫くの間並走する。船長曰く、この地域の海賊は小型船が多く、大型のガレー船がやってくると、では直ぐに逃げてしまふとの事。また、岩礁や浅瀬などに逃げ込んで、海軍も討伐には手を焼いているらしい。逆に沖合まではやって来ないので、ガレーが暫くの間、護衛するとの事だ。数時間護衛したら街へと戻っていた。

11月20日 天候悪化、日記は中止、吐きそう。

11月22日 酷い有様だ。船内はぐちゃぐちゃ、あちこちに色々な物が転がっている。何があったかを説明すると、20日の夕方までは順調に航海をしていたが、夜に入ると雨が降り始めた。そして夜半に入りの頃には、大嵐に変わった。カンテラの使用も止められて、帆と錨を全て下ろして、暗い部屋に居ると、フレイヤとヘレネもこの部屋に来た。女性二人はさすがに不安だったらしい。5人で

一固まりなって、揺れる船で遠い朝を今かと待っていた。

だが、私の頭の中に有ったのは、キャラクターの構造的な欠陥だ。この船は積載量が多い為、船自体が重い。その上、高い船尾楼と船首楼が災いして、重心が高いのだ。つまり、転覆する危険が大きい作りなのだ。

さすがに普段の余裕は全く無い。ジェストコースターなら、安全と分かるが、この船はいつ倒れてもおかしくない無いだ。軋む音と共に船体が揺れる度、恐怖に煽られる。外が明るくなり、視界がはっきりとして来た。フレイヤはギュンターに、ヘレネはトーマスに抱きついている。私は：壁に叩きつけられていた。だが、明るくなってもその日は、一日中嵐だった。

そして、今日ようやく天気は回復した。船長に話を聞いたら、作業中に3人の船員が亡くなったらしい。どれも転落して海に落ちたという。人間は自然には勝てないという事を良く知った日だった。

11月24日 コルキュラ島に到着する。この島はラグーナ共和国のアドリア海とイオニア海の間地点にある重要拠点で、常に30隻近い軍用船が停泊している。北部の軍港シタデーラに入って、地方艦隊の司令にレヴァント（東地中海）の情報を聞く。問題無いらしいので、気を付けて航海せよとお達しがあり、翌日出港した。

11月26日 いつも通り、甲板でギュンター達にグラエキア語を教えている。すると、船室からフレイヤがやって来た。その日のフレイヤの格好は、いつもの綿入れにレザーアーマーという服装では無く、ヘレネに借りたのか、白い古代グラエキア風のチュニックだった。普段、そんな薄手で露出の多いの服など着た事が無いのか、顔を赤らめて、もじもじしている。ヘレネに背中を押されて、甲板

に上がると、船員や傭兵から口笛や歓声が上がった。フロイライン、貴方は私を萌え死なせたいのかね？

11月28日 順風に恵まれ、メッシニカ到着。この地もラグーナ領で、レヴァント方面に向かう船は一度この地に寄らなければならぬらしい。この地が最後の寄港地となり、ミノア島へ向かう。2日間の停泊後に出港する。

「おう、見えたぞ！カンディアだ」

「おお、やっと着いたか、我が故郷！」

そして、12月4日カンディアに到着。一か月近い船旅だった。

## 第20話 ラブリントス

ミノア島 史実のクレタ島だ。第2次大戦で激戦を繰り広げられた事でも分かる通り、この地は東地中海のど真ん中にあるという、戦略的重要地だ。この世界では、ラグーナ共和国の海外の拠点だ。温暖な気候で、耕作地の少ないラグーナにとっての貴重な穀倉であり、島では小麦やワインの生産が盛ん、他に大理石や、貝紫が産出される。古代遺跡も豊富で、冒険者だけでなく、観光客にも人気の高い島だ。

「…12月なのに随分暖かいですね」

「そうね、これなら過ごしやすくて良いわね」

「うん、侯国の8月よりも暖かいと思う」

「……まじかよ」

さっそく依頼を探しに行くと、ギルドには人だかりが出来ていた。話を聞くと、南の遺跡を中心にモンスターが大量発生しており、討伐部隊を派遣するとの事。だが、最低5人以上のパーティじゃないと、部隊として参加させられないとか。

その人だかりの中に見覚えのあるブロンドの女性が居た。

「ヘレネさん！」

「ああ、フレイヤかい。あんたにも依頼を探しに？」

「ええ、でもこの様子だとなあ…」

「なあトーマス、あたしもパーティに入れて貰っていいかい？ そうすれば頭数は揃うからさ」

「私としては構いませんが、一応このパーティのリーダーはギョータ君なのですが…」

「へ？ そうなのかい。てっきり年嵩のあんたがリーダーだと思ってたよ？」

「確かに、戦闘時以外はゴミクズだからな。こいつ」

「ヴィト…お前のどんどん口悪くなって行くよな…」

ヘレネを加えた5人で依頼を受けて、討伐部隊に参加する。出発は翌日になるそうだ。

このクエストは、共和国が依頼を出しているだけあって報酬額がかなり良い。資金的に余裕が出来るそうなので、少しばかりアイテムを買い足そう。

“軍放出品販売所”

「……大丈夫か？ この武器屋」

今までの旅で分かったのだが、このパーティは近接にギョータ、遠距離にフレイヤ、支援にトーマスとかなりバランス良く出来ている。そのお陰で私は自由に動けた訳だが、いかんせん子供の身だから火力が足りない。それを補う為に爆弾を購入した。

翌日、城門前にはラグーナ共和国軍と冒険者達が集まっていた。

「おう、なんだ？ お前らも参加するのかよ」

「アルゴニオンさん！」

「ラグーナ軍の部隊はアリストス傭兵隊だったのですね」



「そうさ、故郷に帰れたと思ったら、直ぐにドンパチさ。今年は集めるだけ集めておいて、いざ攻め込むってなったら、中止しやがって鬱憤溜まってるからな。退屈しのぎには良いだろう」

「まさか、2国も一気に潰されるとは思わなかったからな。仕方ないだろう」

「サグレードさんですか!？」

「正規軍の参謀が私なのだよ。もっとも私の仕事は、監督するだけだから指揮は取らないがね」

「それよりもヴィト君、写本はまだ完成して無いのだ。無茶をされては困るぞ」

「ははは……今月中には渡せるようにしますよ」

「そうかね!? 楽しみにしているぞ」

町を出て、南へ数キロ歩いた時のことだった。丘の稜線の先に、蠢く敵の姿が見えた。

「敵だ! 上空にハルピユア、数20!」

「正面からも来る、ミルミドンだ! キュクロプスも居るぞ!」

ラグーナで購入した望遠鏡を覗き見ると、上空には女の顔の鷲が舞い、地上には二足歩行で武器を持ったアリの化け物が、その中に数体、棍棒を持った単眼の巨人が待ち構えていた。

「石弓部隊は、ハルピユアを仕留めろ! リュソス、歩兵と冒険者を率いて奴等を蹴散らして来い!」

「了解!」

アルゴニオンの指示に皆の気持ちが引き締まり、慌ただしく動き

出す。

「前進！」

戦列の中央に冒険者が、その両翼を護衛する様に歩兵部隊が展開する。石弓の一斉射撃の後に突撃を開始した。

「弦の拘束！」

私とトーマスの魔法が、ミウルミドンとキュクロプスを包み込み、動きを止める。動きを止めたアリをギウンターが打ち倒す。

「坊や！魔法使えるなんて聞いてないよ、後でたっぷり聞かせて貰うからね！」

キュクロプスの眼窩に放たれたダーツが突き刺さる。目を押さえ、棍棒を振り回す巨人に痺れ毒付きのボルトが突き刺さった。

「ナイス援護！」

徐々に動きを弱める巨人。その気になれば引き千切れる植物の蔓も、毒が回った状態では身動きを取る事は不可能だ。その後、5人がかりの攻撃に息絶えた。

強敵のキュクロプスの一体があっさり沈んで、歓声を上げる兵士達。負けじと果敢に攻め立てて、戦果を上げる。不利を悟ったモンスターたちが、算を乱して逃走した。

「突撃！」

そこに、アルゴニオン直卒のストラディオッティ騎兵40が、逃げ惑う敵に突撃する。平地を進むが如く、ミュルミドンの背中に刃を入れ、踏みつぶし丘の向こうまで追撃して行った。

我々も騎兵たちを追って、丘を駆け上がると、眼下に崩れかけた遺跡が見えて、其処はモンスターの巣窟と化していた。

「ゴツイ光景だな。あれが敵の根拠地だ。あそこを潰さない限り、幾らでも湧いてくる」

いつの間にか追撃を中止して戻ってきたアルゴニオンが、剣を掲げ演説する。

「聞け！我々の任務は、あの拠点を叩き潰す事だ。危険な任務だが、勝てばその名声は大きい、つまり女にモテルという事だ」

「野郎共、無茶いいけど死ぬんじゃないぞ！死んだらお前らの女は俺が頂くぜ！」

傭兵流の下卑た冗談に笑いの渦が生まれる。フレイヤにはこのジョークはきつ過ぎたのか、顔を赤らめている。かわいいな。

遺跡からミュルミドンが出現して、3つの方陣を組んで此方に前進してくる。さすが、トロイア戦争でその名を馳せた連中だ。統率のとれた動きは、中世の軍を凌駕している。

我々もバリスタとスコールピオンを組み立てて対峙する。皮の厚いキュクロプスを倒すには石をぶつけてやるのが効果的らしい。

「撃てエ！」

投石機が放たれ、巨人を襲う。巨軀が災いして動きの鈍い彼等には、木の杭や岩が面白いように命中する。

石弓部隊も射撃を開始した。次々とボルトがミウルミドンに吸い込まれて行くが、隊列を直ぐに立て直し、効果が薄い。

「フレイヤ！方陣の横に居る赤い奴。アレを狙える？」

「この距離なら五分五分ね？」

「アレ、多分指揮官だよ。上手くすれば隊形を乱せるかもしれない」「いいわよ、任せて」

フレイヤは滑車を使い限界まで引き絞ると、深呼吸して矢を引き放った。

他のアリとは違い、赤色で体格も少し大きいミウルミドンの頭部へボルトが見事に吸いこまれ崩れ落ちた。

その様子を見たミウルミドンに動揺が走ったのか、隊列が乱れて陣系は崩壊した。

……きつと、政治将校だったのだろう。

残りの二つの方陣もその後、指揮官を狙撃されたらしく、此方へ到達する頃には隊列を乱してバラバラに襲いかかって来るだけだった。

「密集槍兵、突けエエい！」

両翼の戦列の先頭に布陣していた槍兵3列がパイクを叩き下ろし、突きだして槍衾を形成した。槍兵の隙間から、石弓兵が矢を打ち込みミュルミドンを仕留めて行く。

そして、我々の布陣している中央部にもミュルミドンが殺到してくる。

「喰らえ！」

私は、持っていた手榴弾をミュルミドンにお見舞いする。轟音と衝撃で敵に乱れが出来る。この隙を逃さず剣を抜いて突貫する。

突きだされる短槍を避けて、首を断ち切る。白い体液が飛び散り、草地を白く染めた。ヘレネはいつの間にか、仕込み杖で一体を刺殺した。フレイヤもマチェットで頭蓋を叩き割っていた。

しかし、笑いながらマチェット振り回すのは正直怖いんだがね。ヘレネさんもドン引きだぞ…

その時、左翼のパイク兵が崩された。進軍の遅れていたキュクロプスが到着したらしい。倒れた兵士を放り投げ、戦列をかき乱し棍棒を振り回して、屍の山を形成する。バリスタもこの距離になると狙えない。味方を巻き込む危険があるのだ。

1人の石弓兵の前にキュクロプスが立ち塞がり、棍棒を振り上げて叩き潰そうとする。

「糞！間に合えよ！」

手榴弾を巨人の足元に転がす。爆発し、片足を吹き飛ばされたキェクロプスが横倒しになる。後方からってきたラグーナ兵が戦鎧を振り下ろして、止めを刺す。

「助かったぞ！」

親指を立てて応答する。その時、迂回していたスキアヴォーニが側面攻撃を敢行した。

馬蹄を鳴らして抜刀突撃をかける軽騎兵。既に戦列の維持すら困難になっていた敵は抗い切れずに次々と刀の錆になっていく。

「逃すな！追撃、追撃！」

ミウルミドンは逃亡を図っている。残っているのは、足の遅いキェクロプスだけだ。槍袈に貫かれて次々と巨体を地面に沈ませて行く。

逃亡するミウルミドンもその運命は変わらなかった。ストラディオッティの逆落としを喰らい、地面のシミへと変わっていった。

我々が遺跡の到達した時には、敵を殲滅し勝ち鬨を上げるアルゴニオン達が居た。

「お前ら、ご苦労だったな。正直、我々だけであつたら鎮圧出来たか怪しい所だった」

「特に左翼近くに配置されてた5人組は凄かったぜ」

「おう、キュクロプスをあんなに手早く始末出来るなんてな」

気恥ずかしさからその場を離れる。それより気になる事があった。

「おい、ヴィト何処へ行くんだよ？」

「ちょっと、遺跡を観てくるよ。どうも探究心に火が付いちゃって」

「さすがに、天井の一部は崩落しているか…でも、この方が明るくて壁画とか見やすくて良いな」

遺跡の柱の間を抜けて、通路を南に抜けると、中庭に出た。中央のタイルはめくり上がり、雑草や低木が顔を覗かせていた。

右手の部屋を覗き見る。往時は王の間だったのか、壁には美しい壁画が彩られている。崩れた天井から差し込む光が、グリフオンのレリーフを幻想的に映し出していた。

王の間の後ろの小部屋は暗くて奥まで見えない。入ってみると、どうも埃臭くて暗かった。すると足に何かに触れた。手探りでそれに触れると、楕円形をした陶器だった。

「これ、アンフォラだな。明るい所で見てみよう」

中庭に戻って、泥と埃に汚れた陶器をボロ布でこすり落とす。すると、牡牛と美しい女性が描かれていた。

「埃のお陰で絵が保護されてたのか…他にも何かあるかな？」

松明を取り出して火を付けて、先程の小部屋を見てみる。他にも

石の円盤や碑文、パピルスの古文書や女神像等を手に入れた。

「碑文の文字は……ダメだ、アルファベットじゃない。象形文字だな」

考古学は教科書で習う程度の知識しかない。それでもこれは歴史的発見じゃないのか、と期待する。

「古文書は下手に開くと、崩壊するな。とりあえずアンフォラに仕舞っておこう」

パピルスは湿気や温度変化に弱い。その上耐久性も低い。雑に扱くと破れたり隅から崩れるので、持ち帰って開いた方が良さだろう。

「モンスターのお陰で今まで守られていたのか、文明が発展するのも良い事ばかりじゃないって事だな」

中庭を出て、階段を下り地下を覗いてみる。淀んだ空気に鼻を顰めつつ奥を散策してみる。壁が複雑に入り組んでいて方向感覚を狂わす。しばらく進むと、道が開け広間に出た。

「…ほう、人間とは久しいな。そなたの名は何と申す」

広間の天井部が崩れ、光差す瓦礫の山に牛の顔をした男が鎮座していた。グラエキア語が通じるか、少し古風な響きが有るが、好都合だ。

「…人に名前を聞く前に自分が名乗ったらどうだ？」

「ふむ、失礼仕った。我が名はアステリオスと申す。偉大なる太陽



神を祖父に、女神を祖母に、海の神より賜った牡牛を父に持つ高貴な家柄だ」

嫌な予感がぶんぶんするぜ、何とかしてこの場を逃げ出さなければ……

「俺の名前はヴィトだ」

「左様か、良き名である。では……」

「……ソノニクヲクワセロ」

畜生！悪い予感だけは的中しやがる！

「テメエはコレでも喰らってろ！」

ホルスターから短銃を引き抜き発砲した。腹に命中して蹲る化物、この隙にさっさと逃げる。植生が有るなら弦の拘束が使えるのに！

暗い壁を必死で駆ける、後ろを見ると既に回復したのか、壁や壺を破壊しながら猛然と付き進んでくる全然効いてないぞ！

階段の位置に戻るが、その階段のあるべき場所はただの通路になっていた。

「無い！一体どういう事だ！？」

「ムダダ！ワレヲタオサネバ、デルコトハカナワヌ！」

「ッ！」

後ろから迫りくる化け物に爆弾を投げつける。狭い空間に轟音が響きわたり、土煙が巻き起こりむせかえる。

「ゼンゼン、キカヌゾ！」

「なんと言う事だ……」

通路をひたすら奥へと進むと、先程の広間に戻った。

「ヴィト君、一体何事ですか!？」

ギョンター達4人が正面から駆け付ける。入る事は易く出る事は難し、か。

「ちょいとばかり、ヤバイ敵が出て来た」

「お前、また厄介事かよ……」

「ついでにもう一つ、悪い知らせだ。その厄介事を解決しなければここから出られないらしい」

「…わーお」

「…ラビリンズですか」

「そう言う事だね、トーマスさん」

「あんたら、来るよ！」

「ちよっと、あの化け物何よ!？」

「教えてやるよ……ミノア島の伝説の化け物ミノタウロスさ！」

こうして我ら五人はアステリオス改め、ミノタウロスと対峙した。

## 第20話 ラブリントス（後書き）

アパム！書き貯め持ってこい！アパム！！

書き貯めがこれでゼロに成りました。半月も持たなかったぜ！

非難轟々のこの駄作ですが、今後の作成方針を皆様の意見を参考に決定しました。

「このまま当初の予定通り続ける」

下手にプロットの改ざんをしたら、話がおかしくなりそうなので私のモチベーションの低下がしそうなので、当初の予定通りに続けます。

復讐のお話は当分先になります。それが困る読者の方は大変申し訳ないですが、一年後ぐらいにもう一度見に来て下さい。それ位になればさすがに復讐戦の準備が完了します。

：我慢した分、報復は盛大なモノになりますのでご期待下さい。

別連載始めました。

ギャグ要素を排した恋愛モノです。10話前後の短い作品なので、

そちらが完成次第こちらの続きを書きます。

## 第21話 ミノタウロスとの戦い

古代遺跡の地下迷宮で、牛頭人身の怪物ミノタウロスと対峙する我々。幸い天井の一部が崩落している為、明りが差し込んでいる。松明を持って戦う必要は無くなった。

「フシユルルル」

ミノタウロスが鼻息を荒くして突っ込んで来た。まともに喰らえば、タダでは済まない。

「くっ！石礫！」

トーマスが遺跡の岩を浮かび上がらせて、相手に射出する。ミノタウロスは岩を両刃斧で打ち砕く。

「ムダダ！」

「せいッ！」

ヘレネがダーツを放つ、皮膚に突き刺さったようだが余り効果が見られない。

「ヴィト、とんでもない化け物だな」

「勝たないと脱出出来ない。行くぞ！」

手榴弾を投擲して、抜刀する。爆発と同時に突撃を敢行する。フレ

イヤの麻痺薬付きのボルトも命中してその巨躯の動きを止める。

「ヤルナ…ニンゲン！」

「ギョんター、首を落とす！」

「分かった！任せろ！！」

どんな化け物も、頭を潰せば活動は停止する。一気に片を付けるべく接近戦に持ち込む。

「……ザンネン、ウソダ」

突如立ち上がり、斧を振り回すミノタウロス。擬態だったとは！咄嗟に後方に飛び避けて、何とか攻撃を回避する。かくなる上は一つしかない！

「そのキレイな顔をフツ飛ばしてやる！」

短銃をミノタウロスの眉間に撃ち込む。鉛玉がめり込みはしたが、頭蓋を割るには至らず、少量の血を出血させるだけだった。

「……爆弾が効いてない時点で予想はしてたけどさあ……頭蓋骨で銃弾止めるって引くわ……」

古式銃って命中率と射程は現代の銃と比べ物にならないけど、この銃は弾の重さが30グラムだ。それを秒速400メートルで射出すれば、運動エネルギーは約2600J。M16A2の2092.0Jを遥かに凌ぐ。威力に関しては、現在のアサルトライフルよりも上だ。

何喰ったらそんな芸当出来るんだよ……あ、人肉料理か。止めとこ

う。

「ヴィト前！」

「！」

繰り出される斧を剣で払いのける。金属の削れる嫌な音がする。凄まじい力だ。腕がしびれている。まともに受け止めたら剣が折れるだろう。こちらでも反撃はするものの、表皮を切り裂くにとどめ、致命傷には程遠く、むしろ興奮した相手がますます攻撃の手を強める。

その時、ギュンターが氣勢と共に首筋めがけて炎剣を振り下ろす。しかし、そのたくましい腕で喰い止められる。肉の焼ける臭いが辺りに広がり、さすがのミノタウロスも悲鳴を上げててもがき苦しむ。

その隙は逃さない。一気に接近すると、ミノタウロスは空いた右腕で斧を振り回す。私はそれを屈んで回避すると、短剣をミノタウロスの右脇に突き立てた。

（ねえ、ジョルジョ。鎧を着ている相手や体格の大きい敵を倒す時は、どうしたらいいの？）

（……どんなに体を鍛えていても、鍛えられない部分があります。坊っちゃん分かれますか？）

（頭ダネ！！）

（……）

（いや、冗談だって！何さ、その「このガキはイッちゃってるよ。あいつら未来に生きてるな」的な目線は！？）

（訓練中は真面目にやって下さいよ。いや、まあ坊っちゃんには無理でしょうがね……答えは関節部です）



（あー、確かに鎧って脇とか肘は動くようになってるよね）

（他にも筋を断てば動けなくなる上、血管も集中しています。出血で体力が奪われれば、その分動きも鈍くなる。鎧の重さが仇となるのです。覚えておいてください）

ふと、昔、とはいっても、ほんの数ヶ月前の事に思考を奪われていると、暴れるミノタウロスにギンター共々放り出される。背中を強く打ちつけて、肺から空気が失われるのを感じた。

「ググウ……ニンゲン共ガア!!」

呼吸が出来ずに咳き込んでいると、ミノタウロスが私に歩み寄って来る。突き立てた刃の間からおびただし量の出血をしているが、その目は闘志を失っておらず、怒りに燃えていた。

私は、自分の運命を神に祈った。

あのままでは、あの子はミノタウロスにやられてしまうだろう、ギンターは顔を打ち、気を失っている。覚悟を決めるしかない。

「トーマス、あんた近接戦闘は出来るかい？」

「多少は出来ますが、あの巨体に有効打を与えられる自信は無いです  
すね……」

トーマスの返答にヘレネは舌打ちする。これだから魔術師は嫌いなんだ。

「そうかい……なら、フレイヤ覚悟を決めな。私等でアレを喰い止

めるよ。トーマス、あんたはあの二人を後方に下げて、治療して。それくらいの時間は稼ぐさね」

あの子のお陰で、弱点は分かった。ならば容易い！

ヘレネはダーツを投擲すると、ミノタウロスを挑発する。

「やい、このデカブツ！聖職者じゃあるまいし、小さな男の子にいきり立ってる暇があるなら、あたしの相手をしたらどうなんだい！？」

「……コムスメ、ナマイキナ！！」

ヘレネは、挑発されて猛然と突進してくるミノタウロスに不敵な笑みを浮かべると、小袋から砂を取り出して顔面に投げつけた。ミノタウロスは目を潰されて暴れている。

「娘扱いしてくれるなんて嬉しいねえ！これはお礼だ、取っときな！！」

そう言うと、ヘレネはダーツを投げつける。ミノタウロスも声を頼りに斧を振り回すが、間隙を突いて、仕込み杖で頸部の刺突に成功。さらに杖剣を抜き放ち、後ろに回り込んで背中を切りつける。ようやく視界を取り戻したミノタウロスが見た物は、自分の首に鉋を振りかざす少女の姿だった。

ギュンターはようやく、意識がはっきりしてきた。辺りを見回すと、ヴィトがトーマスの治療を受けていた。ヘレネはミノタウロスの背中を一閃していた。そして、幼馴染の少女が、鉋でミノタウロスへ止めを刺す所だった。

「俺って情けないよなあ……トーマスみたいに魔法使える訳でもないし、ヴィトみたいに頭良い訳でもねえ。出来る事って言ったら、剣をブン廻す位じゃねえか」

その自分が、戦えなくなる。それは、すなわち守るべき少女を危険に晒すことである。今もフレイヤが前線に出ている。ギウンターは己の不甲斐なさを恥じた。

「ダメだ……まだまだ修行が足りネエ。未熟すぎだぜ、帰ったら鍛え直さないとイケない」

剣を振り回すだけでは力が足りないだろう。現にキュヒラーにも敗れている。剣術以外にも、技術を身に付けねば。そう考えていると、何故ヴィトが、聖書について教え込んでいるのかが理解出来た。アイツ、俺に治癒魔法教えようとしてたのか。

「まだだ！まだ……生きてるッ！！」

その、ヴィトが叫んでいる。ふと、ミノタウロスを見ると、首に鉋が刺さったまま、フレイヤに斧を振り下ろそうとしていた。その恐ろしい光景にフレイヤとヘレネは動けずにいる。

「畜生！！」

レーヴァティンの剣はミノタウロスの左腕に突き刺さったままだ。持っているのは予備携行のロングソードのみ。フレイヤを突き飛ばすと背中に強い衝撃を感じた。

ミノタウロスと対峙すると、背中の傷を見たフレイヤの悲鳴が聞こ

えた。

心配すんな、熱さは感じるが不思議と痛くはない。

「大丈夫ですか？」

トーマスの魔法で痛みが和らぐと、大きく息を吐いた。薄暗い地下迷宮、埃とカビと肉の焼ける臭いがブレンドされた、淀んだ空気はじつに美味しいですね。ここで、一か月も生活すれば、どんなアレルギーや喘息持ちの人でも間違はなく肺炎になれますよ。

「ええ、何とか……」

ミノタウロスを見ると、首に鉋が喰い込み、膝について痙攣していた。ようやく終わったのか……

「……アイツはサイバーダイン社製かよ」

「……何ですか、それは？」

「あ、いえ何でもないです。治療有難うございました」

ヘレネが杖剣の血を拭いながら戻って来た。高かっただろうなアレ。仕込み刃と剣にも成っているのか。便利そうだけど無理な力が加わると直ぐ折れるだろうな。玄人向きの武器だ。

「坊や、大丈夫だったかい？」

「大丈夫です。あと少し休憩すれば動けると思います」

ミノタウロスを見てみると……おかしい。普通なら倒れる筈なのだが、その様子は無い。アイツの正体はまさか……

「まだだ！まだ…生きてるッ！！」

予想は的中した。ミノタウロスは立ち上がり、フレイヤに斧を振りかざす。間に合わない！！

しかし、ギンターが突進してフレイヤを突き飛ばす。だが、その時にギンターの背中が切り裂かれ。血が吹き出るのを見たフレイヤの悲鳴が木霊した。

「ギンター君！！」

「化け物め！まだ生きていたのかい！！」

ギンターは予備の剣を持ち、フレイヤを庇う様にミノタウロスを威嚇している。だが、ダメージが蓄積している上、背中出血が体力を奪っている。顔は次第に青ざめ、剣を持つ腕は萎えていく。

「ヴィト君は休んでいて下さい！」

トーマスとヘレネは、ミノタウロスに立ち向かっていく。あれだけの傷を負っているのにその戦闘力の低下は見られない。こちらがじり貧となるのは目に見えていた。

だが、奴を倒すの糸口はつかめた。推測が正しければ奴は…

「……あいつ霊体…なのか？」

神話通りの記述なら、ミノタウロスはテセウスに倒されている。この地に存在する筈がないのだ。だが、その亡骸はどうなったのか？説明はされていない。

きつと、正しく葬儀されていないはずだ。死体を抱えて迷宮から脱出などする訳がないだろう。後に、迷宮を設計したダイダロス親子も放り込まれているが、彼らが翼を作り脱出するというのは、ラブリュントスの術式が残っていて正攻法では脱出出来なかったという意味だろう。

奴が霊体であるならば、対処は悪魔払いと大して違いはないが、数千年の怨念の塊である。持てる最大級の術式を行使するしかあるまい。

よろめきながら立ち上がり、雑囊から聖水のビンを取り出して、スキアヴォーナの刀身にまんべんなく振りかける。左手の指輪を聖水の滴り落ちる剣に押し当て、魔力を込めながら祈りの言葉を唱え始めた。

「Pater noster, qui es in caelis,  
sanctificetur nomen tuum.  
Adviniat regnum tuum.  
Fiat voluntas tua,  
sicut in caelo, et in terra.  
Panem nostrum quotidianum da  
nobis hodie,  
et dimitte nobis debita nostra,  
sicut et nos dimittimus debitoribus nostris.  
Et ne nos inducas in tentationem,  
sed libera nos a malo.  
Amen.」

「Absolve Domine, animas omnium  
fidelium defunctorum」

(主よ、全ての死せる信者の靈魂を)

「ad omni vinculo delictorum」

(ことごとく罪のほだしより解いて下さい。)

「Et gratia tua illis succerren  
te,」

(彼等が主の聖寵の助けによつて)

「merentur evader judicium ult  
ionis.」

(刑罰の宣告を免れ、)

「Et lucis aeternae beatitudine  
perfrui.」

(永遠の光明の幸福を楽しむに至らんことを。)

「Confutatis maledictis, flammis  
sacribus addictis, dona eis r  
equiem.」

(呪われた者が退けられ、業火に呑み込まれる時、彼の者に安息を  
与えたまえ)

「……Amen.」

すると、透明だった聖水が青白く発光しはじめた。その剣を見たミ  
ノタウロスがたじろぐ。

「これを使い!」

剣をギョンターの前に投げる。地面に刺さった剣を受け取ると彼の

出血は収まり、力を取り戻しミノタウロスに立ち向かっていった。そして、止めを刺す為のもう一つの切り札を使う。

「コレを使う日が早速来るとはね…」

懷から取り出したのは、聖ヨアヒム銀貨を鑄潰して造った銀の弾丸。アンデット狩りに最適な代物だった。

ミノタウロスは明らかに怯えていた。ギンターが一步前に進めば、相手も一歩ずつ後退していく。しかし、後ろは壁面だ。もう逃げる事は出来ない。半狂乱になったミノタウロスは、咆哮するとギンターに突進して斧を振り下ろす。その一撃を盾で受け止めると、衝撃で2歩分は後退し、塞がりかかった傷口が再び開き激しく出血した。

だが、眩暈がするような苦痛を、倒れようとする肉体を意志の力で奮い起こさせると、ミノタウロスの胴を薙ぎ払う。すると、今までどのような攻撃を加えても、確かな手応えを与える事の出来なかった筈が、紙を切り裂くようにあっさりと腹を切り裂かれた。

「してやったぜ……」

その姿を見たギンターは満足し、片膝をつく。朦朧とする視界にヴィトが銃を持ってミノタウロスに迫っていくのが見えた。彼に後事を委ね、床に崩れ落ちて意識を失った。



こぼれ落ちる内臓や血を手で押さえて留めようとするミノタウロスの姿に、私は、少しばかり憐れみも感じていた。

「たけき者も遂には滅びぬ、偏に風の前の塵に同じ…か」

銃口をミノタウロスの額に当てて、安息の祈りを捧げながら引き金を引いた。

「キサマタチニンゲンハ……イツモ…」

灰と化していくミノタウロス。私は今更ながら彼の生涯を考えた。

太陽神ヘリオスと女神ペルセイスの間に産まれた王妃パシパエと、白い牡牛との間に産まれた忌み子。

産まれて直ぐに両親に化け物として忌避された。家族の愛を知らない彼はしだいに乱暴になる。そして、ただ1人出ることも不可能な迷宮へ捨てられる。

その様な仕打ちをされた彼は、人間を強く恨んだのであろう。当然である。

その彼に生贄として14人の少年少女が送られる。結果はあえて言うまい。

そして、20年も過ぎた頃に生贄に交じっていたアテナイの王子テセウスに首を切られて討たれる。

かくしてテセウスは英雄となり、ミノタウロスは化け物として人々に記憶された。

ミノタウロスの父親である白い牡牛についてだが、一般的にはポセ

イドンが送った白い牡牛だと言われているが、紀元前6世紀の古代ギリシャの散文家アクシオスの説によると、クレタ島初代国王ミノスの母親エウロペを拉致した白い牡牛と同じとされている。

その白い牡牛の正体はエウロペに恋したゼウスが変身した姿だ。

そしてミノタウロスの本名アステリオスの意味は“雷光”である。

もし……いや、歴史に仮定は無意味だが、もし道が違っていたら、黄金の羊毛を獲る為に起ちあがった英雄50人と1頭という話や、妹の夫テセウスと共に冥界へ冒険に行くと言う冒険譚も聞けたかもしれない。だが、そうはならなかった。

やがて、天井から流れる風に遺灰が吹き散らされ、ミノタウロスは消滅した。

私はその光景を己の目に焼き付けて、踵を返し仲間達の元へと歩んで行った。

## 幕間その1 貨幣制度

帝国内に流通する貨幣の種類と重量、経済について

帝国大学 貨幣学者セルジオ・チェルシーニ教授

このフランク帝国内で流通する基軸貨幣は、グルテン金貨、タレール銀貨、ペーニツヒ銅貨の3種類に分かれているが、これは古代エトルリア時代のソリドゥス、デナリウス、アス貨幣を元に造られており、同じ起源のラグーナ貨幣と重量と材質は一致している。ここに各貨幣の重量と材質について示す。

ラグーナ共和国発行貨幣

ドゥカート金貨 ラグーナ共和国が発行する金貨で重量は3ペニウス(6g) 古代エトルリアで発行されていたアウレウス金貨を元に造られた。東方や北アフリカから輸入された金から製造され、守護聖人マルコと発行された年の元首が描かれる。主に交易用で利用され、平民の手に渡る事は余り無い。帳簿上の数字として利用されることの方が多い。帝国でも製造こそしていないが、ドゥカーテン若しくはドゥカールという名前で流通している。この金貨7〜8枚有れば、平民が一年間生活する事が出来る。

リラ金貨 重量1と半ペニウス(3g) 金が豊富に流通する地中海世界では、ドゥカート金貨だと価値が高すぎて流通が困難為、半分の重量のソリドゥス金貨を基に製作された。地中海世界で最も流通している金貨の一つ。

グロッソ銀貨（複数形はグロッシ）重量2と半ペニウス（5 g）デナリウス銀貨を元に造られた銀貨で、通称“大銀貨”と呼ばれる銀貨であり、国章の金の獅子が描かれている。半分の重量のセルティウス銀貨を元にピッコロ銀貨（小銀貨）も発行される予定だったが、当時発生したギアノ戦争の影響で地金の不足が発生し、鑄造計画は中止された。戦争が終結した現在も発行されていない。しかし帳簿上の数字としては存在する。

ソルド銅貨 重量3ペニウス（6 g）の銅貨で、アス銅貨を元に造られた。ガレー船が描かれている。

交換レートは1ドゥカートⅡ2リラ金貨Ⅱ20リラ銀貨Ⅱ400ソルド

次に帝国の貨幣について説明する。

グルテン金貨 帝国が唯一発行している金貨で、重量1と半ペニウス。つまり、リラ金貨と同額である。表には皇帝陛下のご尊顔が描かれている。裏面は皇帝冠、又は国章（皇帝冠とそれを支える槍、杖、剣）が描かれている。広い版図を持つ帝国ではあるが、金貨を発行する事が出来るのは帝都の造幣局と3王家に一部の選帝侯や大司教のみであり、絶大な経済力を誇る北部の商業同盟でさえ発行は許されていない。また、皇帝戴冠式の折に記念硬貨として、アウレウス金貨が特別に発行されているが、近年では戴冠式の参加者のみに配られる為、流通貨幣とは別物である。

タレール銀貨 帝国で一番多く流通している銀貨で、重量は2と半ペニウス。帝国の直轄領である各州の銀山から集められた銀の地金

を、<sup>ウィーン</sup>帝都で鑄造されて発行される。マルコマンネン州<sup>チエコ</sup>チェック地方のヨアヒムスタール銀山（現在のプラハの北西ヤヒーモフ）が語源で、その名の通り聖ヨアヒム銀貨とも呼ばれる。

グロッシェン銀貨 帝国北部の自由商業同盟が発行する銀貨でタレール銀貨と同重量で価値も一致している。

ペーニツヒ銅貨 ソルド銅貨と同重量、ただし描かれているのは、帝国の国章を簡略したPとXを組み合わせたもの。自由商業同盟が発行する北ペーニツヒ銅貨も存在する。こちらに描かれているのは同盟の象徴のコグ船

交換レートは1グルテン＝12タレール＝240ペーニツヒ

帝国と地中海世界では、金、銀の交換レートが違っているが、これは帝国直轄領では金の産出量は少なく、対して銀が多く産出されるからだ。産出されている銀の過半数は帝都で銀貨に鑄造され、地銀のまま他国へ売却する事は禁止されている。

### 帝国の有望な鉱山の一覧

ハライン大司教領のテルシュタイン銀鉱山、ガシュタイン金山（チロル州 オーストリアとスイスの国境近く）

ランツフェルト州の（オーストリア ザルツブルク＋ケルンテン州）シュヴァーツ銀山、塩抗

アンスブリック州（リンツ ウィーンからドナウ川を遡った地）とシャムドルフ州（ウィーンの南シュタイアーマルク州）の鉄鉱山

マルコマンネン州のヨアヒムスタール銀山、アンナベルク銀山、フライベルク銀山（チェコ北部やドイツのザクセン州の辺り）で産出された銀は、帝都ではなくプラーク（プラハ）で銀貨に鑄造される。ヴォルフエンビュッテル公爵領（ドイツのニーダーザクセン州ブラウンシュヴァイク近郊）ベーレン銀山の銀はヴィーヘンブルク（ハンブルク）に送られてグロッシエン銀貨に鑄造される。

マジャルランド（ハンガリー）のノイゾールとシェームニッツ、クレームニッツの銀山と銅鉱山。特に銅山の方は、帝国内地に流通する銅貨のほぼすべてのシェアを占めている。

ウビオールム（ドイツ、ケルン）近郊の鉄鉱山

現在の帝国の経済を支えているのは、これらの鉱山であるが、各鉱山の分布を地図で表すと帝国直轄領（オーストリア＋チェコ）に集中している。この鉱山から得られる経済力がある限り、フランク帝国の日が沈む事は無いだろう。

一方の地中海世界では、銀鉱山は少ないが、東方交易により金を得る機会が多い。また、ダルマティア地方にも金を産出する鉱山がある。この事からラグーナ共和国では、その国土の広さとは比べ物にならない絶大な経済力と他国に対する影響力を持ち、繁栄を極めて

上記の結果から説明する事は、北に行けば行くほど金の価値は高く

なる。特に北の蛮族（ノルマン王国）達は、長年に渡り呪われた悪魔<sup>ドワ</sup>が鉱石を採掘し続けていた為、金や銀の有望な鉱山はほとんど存在しないとされている。一方、鉄、銅、硫黄等は多く産出する。

またルシタニア王国では、新大陸産の貴金属や商品が流入して好景気に沸いているようだが、現在かの地では、髪は抜け、鼻が落ちて気が狂うおぞましい呪いが大流行している。これは、聖書に存在しない食べ物や宝石に触れた為、神の怒りを買ったと教皇勅書が発令され、この呪いに罹患した者は即座に異端者として火炙りに処されている。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2357v/>

---

Epos Etoruria ～エトルリア叙事詩～

2011年11月13日19時01分発行